

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ

第10・11次、第54次調査

1988

福井県教育委員会  
福井県立朝倉氏遺跡資料館

## 序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、山城、当主の館、城下町の跡が良好に遺存している我が国屈指の戦国時代の大規模遺跡であります。

昭和42年に、足羽町によって発掘調査と環境整備事業が開始されて以来20余年になりますが、現在も順調に進行しております。その間事業は、昭和46年には福井県と福井市に受け継がれ、昭和56年には福井県立朝倉氏遺跡資料館が開館し、見学や観光の遺跡来訪者も年間20万人を越えるほどになりました。遺跡の整備に関しましても朝倉館跡はもとより、武家屋敷跡、寺院跡、町屋跡、それらを有機的に構成する道路跡が平面的に復元され、当時の城下町の町並みがより具体的に理解していただけるものと思います。

朝倉氏遺跡の発掘調査の概要は、年々の概報によって報告してきましたが、遺跡や遺物の詳細で学術的な報告は発掘調査を担当して来た者の責務であります。

この報告書は、昭和48・49年度に実施した第10・11次調査と昭和61年度に実施した第54次調査の成果を合わせて掲載しました。調査時期は離れておりますが、両地区は互いに隣接しており、一乗谷における有力武家屋敷の調査例として取り上げました。戦国時代の城下町の研究の一助になれば幸いです。

なお、事業の実施にあたり、懇切なるご指導とご支援をいただきました文化庁をはじめ、奈良国立文化財研究所、福井市教育委員会の関係各位、ならびに終始かわらぬ暖かいご支援をいただきました城戸ノ内を初めとする地元の皆様に対しまして、衷心より感謝の意を表します。

昭和63年3月

福井県教育委員会教育長

田 中 克 之

# 目 次

## I 序 言

事業計画と経過 .....	1
組織 .....	2

## II 第10・11次調査報告

1 調査の経過と概要 .....	5
日誌抄 .....	7
2 遺構 .....	8
a. 町割関係 b. I期の遺構 c. II期の遺構 d. III期の遺構	
3 遺物 .....	16
a. I期出土の遺物 b. II期出土の遺物 c. III期出土の遺物	
4 小結 .....	29
a. 遺構 b. 遺物	

## III 第54次調査報告

1 調査の経過と概要 .....	35
日誌抄 .....	37
2 遺構 .....	38
a. 町割関係 b. I期の遺構 c. II期の遺構	
3 遺物 .....	45
a. 深掘トレンチ出土の遺物 b. I期出土の遺物 c. II期出土の遺物	
d. 耕土・床上・擾乱層出土の遺物	
4 小結 .....	58
a. 遺構 b. 遺物	
附論 朝倉氏の家臣髙淵氏について .....	62

## 図 面

### 第10・11次調査

第1図	石垣立面図(1)
2	石垣立面図(2)
3	土層図
4	遺構平面詳細図(1)
5	遺構平面詳細図(2)
6	遺構平面詳細図(3)
7	遺構平面詳細図(4)
8	遺構平面詳細図(5)
9	遺構平面詳細図(6)
10	遺構平面詳細図(7)
11	遺構平面詳細図(8)
12	遺構平面詳細図(9)
13	遺構平面詳細図(10)
14	井戸詳細図
15	石積施設詳細図
16	第10・11次調査・遺物(1)
17	第10・11次調査・遺物(2)
18	第10・11次調査・遺物(3)
19	第10・11次調査・遺物(4)
20	第10・11次調査・遺物(5)
21	第10・11次調査・遺物(6)
22	第10・11次調査・遺物(7)
23	第10・11次調査・遺物(8)
24	第10・11次調査・遺物(9)
25	第10・11次調査・遺物(10)
26	第10・11次調査・遺物(11)
27	第10・11次調査・遺物(12)
28	第10・11次調査・遺物(13)
29	第10・11次調査・遺物(14)
30	第10・11次調査・遺物(15)
31	第10・11次調査・遺物(16)
32	第10・11次調査・遺物(17)
33	第10・11次調査・遺物(18)
34	第10・11次調査・遺物(19)
35	第10・11次調査・遺物(20)
36	第10・11次調査・遺物(21)

### 第54次調査

第37図	上置石垣立面図
38	土層図
39	遺構平面詳細図(1)
40	遺構平面詳細図(2)
41	遺構平面詳細図(3)
42	遺構平面詳細図(4)
43	遺構平面詳細図(5)
44	遺構平面詳細図(6)
45	第54次調査・遺物(1)
46	第54次調査・遺物(2)
47	第54次調査・遺物(3)
48	第54次調査・遺物(4)
49	第54次調査・遺物(5)
50	第54次調査・遺物(6)
51	第54次調査・遺物(7)
52	第54次調査・遺物(8)
53	第54次調査・遺物(9)
54	第54次調査・遺物(10)
55	第54次調査・遺物(11)
56	第54次調査・遺物(12)
57	第54次調査・遺物(13)
58	第54次調査・遺物(14)
59	第54次調査・遺物(15)
60	第54次調査・遺物(16)

付図1、第10・11次調査・第54次調査  
全測図

付図2、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡



## 図 版

### 第10・11次調査

- PL. 1 道路 S S 260 と土塁 S A 261 (カラー)
- 2 中央排水路 (S D 312, S F 283, S Z 272, S D 271) (カラー)
- 3 調査地区全景航空写真
- 4 全景
- 5 道路 S S 260 と土塁 S A 261
- 6 土塁 S A 262
- 7 土塁 S A 263
- 8 甕溝 S D 268他と門 S I 278
- 9 屋敷東半部
- 10 屋敷西半部
- 11 礎物 (S B 280・281他)
- 12 通路 (S S 282・335他)
- 13 塀 (S A 299・300他)
- 14 堀 (S A 304・306・310他)
- 15 中央排水路 (S D 271・312他)
- 16 溝 (S D 313・322他)
- 17 諸遺構 (S Z 272・S X 341・344他)
- 18 井戸 (S E 291～296)
- 19 石積施設 (S F 284～287・289・290)
- 20 S F 288, S D 266下層出土の遺物
- 21 I期整地層出土の遺物 (1)
- 22 I期整地層出土の遺物 (2)
- 23 I期整地層出土の遺物 (3)
- 24 S B 281, S F 287出土の遺物
- 25 S F 283, S X 341, S D 320出土の遺物
- 26 II期整地層出土の遺物 (1)
- 27 II期整地層出土の遺物 (2)
- 28 II期整地層出土の遺物 (3)
- 29 II期整地層出土の遺物 (4)
- 30 S E 292・293出土の遺物
- 31 S E 293出土の遺物
- 32 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (1)
- 33 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (2)
- 34 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (3)
- 35 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (4)
- 36 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (5)
- 37 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (6)
- 38 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (7)
- 39 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (8)
- 40 III期遺構面・床土・表土出土の遺物 (9)

### 第54次調査

- PL. 41 屋敷全景・建物 S B 316 (カラー)
- 42 銅製水差・越前焼大甕 (カラー)
- 43 全景航空写真
- 44 全景
- 45 土塁 (S A 262・979・3310)
- 46 主要部 (S I 1082, S B 3316他)
- 47 屋敷内部
- 48 I期建物群 (S B 3316他)
- 49 門 (S I 1082他)
- 50 諸遺構 (S Z 270, S D 3331他)
- 51 井戸と石積施設等
- 52 深掘りトレンチ, S B 3316出土の遺物 (1)
- 53 S B 3316出土の遺物 (2)
- 54 S B 3317・3318出土の遺物
- 55 S F 3325・3326, S X 3371出土の遺物
- 56 I期整地層出土の遺物 (1)
- 57 I期整地層出土の遺物 (2)
- 58 I期整地層出土の遺物 (3)
- 59 I期整地層出土の遺物 (4)
- 60 S A 979・3310, S D 269出土の遺物
- 61 S Z 270, S B 3319・3320・3321, S E 3322出土の遺物
- 62 S F 3323出土の遺物
- 63 S F 326・3324・3327出土の遺物
- 64 S X 3333・3352・3364他出土の遺物
- 65 耕土・床土・攪乱層出土の遺物 (1)
- 66 耕土・床土・攪乱層出土の遺物 (2)
- 67 耕土・床土・攪乱層出土の遺物 (3)

## 挿 図

第10・11次調査	第54次調査
1 周辺地形図……………5	12 周辺地形図……………36
2 周辺調査区略図……………6	13 グリッド設定図……………37
3 グリッド設定図……………7	14 土塁 SA 979 東西右垣立面……………39
4 道路 SS 260断面図……………8	15 暗渠 SZ 270詳細図……………41
5 越前焼 付着物・使用痕……………21	16 第54次調査区グリッド名……………46
6 越前焼 接合・補修例……………22	17 遺構変遷略図……………59
7 灯明皿受け台……………24	
8 天目茶碗・青磁碗底部片 (陶製円盤) 実測図……………25	
9 白磁皿(鉢) 一括資料……………26	
10 銅銭拓本図……………27	
11 遺構変遷略図……………30	

## 表

第10・11次調査	第54次調査
1 町割に関する遺構一覧……………8	10 町割関係遺構一覧……………38
2 I期の遺構一覧……………10	11 I期遺構一覧……………40
3 II期の遺構一覧……………12	12 II期遺構一覧……………43
4 III期の遺構一覧……………14	13 出土遺物一覧……………45
5 出土陶磁器一覧……………31	14 グリッド別遺物出土数……………46
6 越前焼遺構面別出土一覧……………32	15 土師瓦葺の総重量……………50
7 瀬戸・美濃焼遺構面別出土一覧……………32	16 出土銅銭一覧……………57
8 染付遺構面別出土一覧……………33	
9 青磁・白磁遺構面別出土一覧……………33	

# I 序 言

特別史跡「一乗谷朝倉氏遺跡」は、戦国大名朝倉氏の居城、並びにその城下町として著名である。発掘調査は、昭和42年に開始され、朝倉氏の館跡については昭和54年に「朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ」が刊行されている。本報告書は、特別史跡「一乗谷朝倉氏遺跡」の第2次5か年計画による第10・11次調査（昭和48・49年）と、第5次5か年計画による第54次（昭和61年）の成果をまとめたものである。

## 事業計画と経過

一乗谷朝倉氏遺跡（昭和5年に朝倉館跡、湯殿跡、諏訪館跡、南陽寺跡、西山光照寺跡が国の史跡と名勝に指定）の調査とその成果にもとづく環境整備事業は足羽町によって昭和42年に開始され、現在も続行している。昭和46年に圍場整備による遺跡破壊の危機に瀕したが、遺跡の重要性に鑑み関係者の尽力によって城戸ノ内については破綻から免れた。同時に史跡から特別史跡に格上げ指定され指定範囲も上記5カ所の3haから城戸ノ内を中心とし山城も含みこんだ278haとなった。またこれに伴い遺構の最も密に存在する平地部21haが一括買収された。こうした経過と足羽町が福井市に合併するという事情から福井県は、昭和47年に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和56年福井県立朝倉氏遺跡史料館となる）を設置し、これまでの事業を引き継ぐこととなった。事業の進め方については、「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会」の指導のもとに5か年計画を策定し、朝倉氏遺跡調査研究所が発掘調査と環境整備事業を、福井市が管理を分担し両者協力して史跡の保存と活用に努めることとなった。

各5か年計画は次の通りである。

第1次5か年計画 昭和42～46年

諏訪館跡庭園、湯殿跡庭園、南陽寺跡庭園、朝倉館跡を対象

第2次5か年計画 昭和47～51年

朝倉館の調査を完了することと、遺跡内の武家屋敷跡・寺院跡・町屋跡などそれぞれの一面を明らかにして遺跡全体像の把握に努める。

第3次5か年計画 昭和52～56年

遺跡内を縦貫する県道建設に伴う調査を軸とし、遺跡敷地内だけでなく面的に拡大して遺跡の構成を把握するとともに、第2次5か年計画で発見した一乗谷の都市計画を追求する。

第4次5か年計画 昭和57～61年

調査を面的に拡大し一乗谷特に赤浜・奥間野・吉野本地区の町割（都市計画）を明らかにする。

第5次5か年計画 昭和62～66年

上城戸跡、南陽寺跡など文献で知られている地区の調査を行うと共に、これまでの成果を生かし、史跡公園としての充実を計る。

事業経過については、各5か年計画終了年次に次の5か年計画の見直しを計ってきたので、ほぼ上の計画どおりに進行してきたが、報告書の刊行が遅れている。

なお、朝倉氏遺跡の調査並びに環境整備事業について指導いただいた研究協議会の委員の方々はこの通りである。

第10・11次調査（昭和48・49年）

委員

福井テレビ副社長	青園謙三郎	福井県文化財専門委員長	久保道舟
国士館大学教授	黒板 昌夫	大阪市公園協会理事長	田治 六郎
評論家	戸塚 文子	法政大学教授	松下 圭一
作家	氷上 勉	城戸ノ内区長（昭和48年度）	石川 成志
城戸ノ内区長（昭和49年度）	石田 昇		

専門委員

東京大学助教授	伊藤 滋	金沢大学教授	井上 剣夫
東京大学助教授	岸谷 孝一	朝日新聞編集委員	木原 啓吉
奈良女子大学助教授	近藤 公夫	福井大学教授	重松 明久
千葉大学助教授	田畑 貞寿		
奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長	坪井 清足		

第54次調査（昭和61年度）

福井テレビ社長	青園謙三郎	東京大学教授	石井 進
東京大学教授	岸谷 孝一	千葉大学教授	木原 啓吉
朝倉氏遺跡保存協会会長	木村竹次郎	奈良女子大学教授	近藤 公夫
福山市立女子短期大学長	重松 明久	千葉大学助教授	田畑 貞寿
奈良国立文化財研究所長	坪井 清足	評論家	戸塚 文子
城戸ノ内町内会長	細田 堅	作家	氷上 勉

組織

発掘調査年次が離れており、整理期間も長期に渡り、その間職員の移動があった。

発掘調査時の職員は次の通りである。

第10・11次調査（昭和48・49年度）

所長	河原 純之	次長	藤原 武二
	水藤 真		水野 和雄
	小野 正敏		岩田 隆
	吉岡 泰英		

第54次調査（昭和61年度）、報告書作成（昭和62年度）

館長	藤原 武二	次長	西嶋 泰隆（昭和62年5月転出）
次長	木澤 山榮		
館員	水野 和雄		岩田 隆
	吉岡 泰英		南 洋一郎
	佐藤 圭		月輪 泰
嘱託	山田 武男		久保 昭三

この報告書作成については、館員一同の整理、検討によるもので、執筆は水野和雄（Ⅲ 3、4-b）、岩田隆（Ⅰ、Ⅱ 3-a、b 4-b）、吉岡泰英（Ⅱ 1、2、4-a、Ⅲ 1、2、4-a）、南

洋一郎（II 3-e）、佐藤生（付編）が分担し、藤原武二の指導・監修のもとに岩田が編集した。

第10・11次及び第54次調査に関係した発掘作業員並びに室内作業員は、次のとおりである。

発掘作業員 石田カズイ 石田はまを 伊與道太 上坂和子 奥田恵美子 奥田木子 奥田まつえ  
奥田ユリ 岸田あや子 小林ヒサヲ 小林 英男 島作計 田中トシヲ 田中文石衛門 谷口  
惣次郎 福岡敏子 福岡まつ子 福岡遊蔵 福岡義信 藤田武志 藤田キクエ 細田四学 堀田  
深 三崎チエ子 山崎庵 山下喜美子 山下千代子 山下ミチコ 吉川京一 吉村正雄  
室内作業員 伊藤 隆三（調査補助員） 川村俊彦（同） 朝倉八重子 石田隆代 田中直美  
辻岡幸子 長谷川 和子 藤田恵美子 吉越強

遺構実測図の作製に使用した座標系は「第VI系」である。遺構実測図の位置記載はこれによった。また、方位については、図のはしに記載した座標で記した。この報告書に掲載した地形図は、パシフィック航業株式会社に、また第54次調査の平面図及び航空写真はアジア航測株式会社に委託した成果を使用した。

遺構の略記号は、次のとおりである。SA（土塁、障壁、柵）SB（建物）SD（溝）SE（井戸）SF（石積施設）SG（庭園）SI（門）SK（土丘）SS（道路、通路）SV（石垣）SZ（暗渠）SX（その他）

なお、朝倉氏遺跡の発掘調査と環境整備事業は、すべて国庫補助によるものであり、下に第10・11次調査と第54次調査に要した経費を記しておく。

第10次調査	1,240㎡	17,000千円（第9次調査170㎡も含む）
第11次調査	2,400㎡	22,000千円（第13次調査2,250㎡も含む）
第54次調査	1,800㎡	25,000千円（第56次調査1,200㎡も含む）

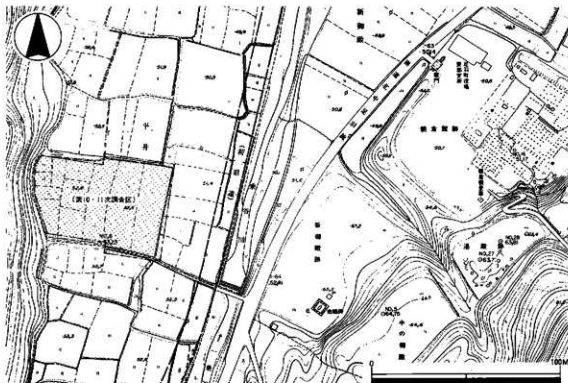
## II 第 10・11 次調査報告

## 1. 調査の経過と概要

この調査地区は、上下の城戸によって区画された「城戸ノ内」の中程やや南寄の一乗谷川西岸に位置している。中心となる当主が居住した朝倉館とは川を隔てて相対している。附近一帯は、水田畦畔等から、比較的規模の大きな区画が読み取られ、また、「一乗谷古絵図」にもこのあたりには「斎藤兵部大輔」・「新馬場」・「平井」・「解酒得監」等有力な武将の名等もみられ注目されていた。昭和42年以來7年をかけ、朝倉館の調査を実施し、ここに第5代朝倉義景が居住し、また検出された10数棟の建物跡等から、その生活の様も明らかになった。この間に、上下の城戸を中心とする278ヘクタールという広大な地域が国の特別史跡に指定され、これを受け、今後の調査計画等も検討された。そこで、まず、全体の概要を把握することが必要とされ、谷内に予想される家臣団屋敷、寺院、町屋、上下の城戸、山城等の各地点がその調査地として検討された。その第一として、この有力家臣屋敷が想定されるこの地区が取り上げられ、屋敷とこれらによって構成される谷内の構造を明らかにすることを目的として、この調査が計画された。(P.L. 3)

発掘調査区は、福井市城戸ノ内町字平井、通称「新馬場」である。調査区の設定は、水田畦畔に残る土塁跡と推定される高まりを規準にし、南北約50m、東西約70m、面積3,665m<sup>2</sup>を対象としている。この東半を第10次調査、西半を第11次調査と2つに分けて実施した。まず、第10次調査を昭和48年8月1日に開始し、冬期間の中断をはさみ、翌年には残る第11次調査を実施し、約1年を要して昭和49年8月5日に現場作業を終了した。

調査区の地形は、南と北に幅2m程の土塁跡と推定される東西方向の2条の高まりがあって、この中は11の水田に区画されている。まず、10~15m間隔に東から西の山裾へ向って区切られ、さらに西の山

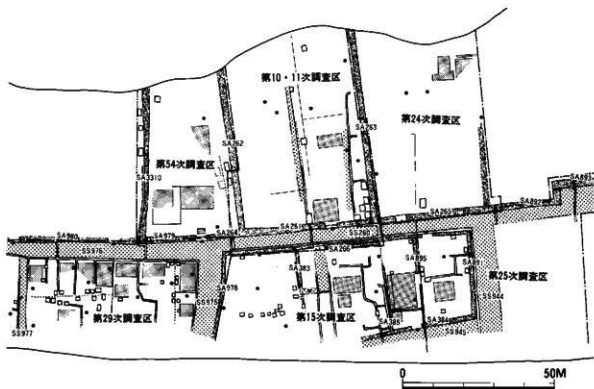


挿図1 周辺地形図

掘ではこれを細分化している。この調査区内では大きな段差はみられず、全体的にみれば、西の山裾から東の川へ向って 0.2m 程度傾斜している。また、土塁状の高まりと水田面には 0.6~0.8m の高低差がみられる。調査区の東端では川沿の水田面との間に 1m 程の高低差がみられる。

調査は、まず、水田耕土を除去することから始められた。この段階で床土上に一部石列等が露出し始めた。次いで、床土を除去し、遺構の検出を始めた。床土上に露出していた北部の石列は、西の山裾から延びる土塁の石垣であることが判明し、屋敷の北境界が明らかとなった。また、発掘区東端の段差を作る石垣は水田化後のものであることも判明し、屋敷の東境界を明らかにするため、約 1m の盛土を除去し、この石垣から約 5m 西で南北方向土塁とこの石垣を検出した。この間には、土塁石垣を崩した多量の石が散乱しており、多くの労力を必要とした。そして、この散乱した石を取り除いた結果、ここが道路跡であることが判明した。また、南の土塁状の高まりも予想通り屋敷の南境界の上置であることが判明し、屋敷の規模が明確となった。以後は、屋敷内の構造を解明すべく調査を進めた。

その結果は、屋敷内の遺構については、後世の水田化に伴う削平部も多く、かならずしも遺存度は良好とはいえず、不明な点も多いものの、屋敷内の基本構成を知る資料や、町割の一端が明らかとなり、当初の目的は、ほぼ達成することが出来たといえよう。そして、以後の町割解明へ向う調査の端緒を開くこととなった。この地区は、これ以後、大きく調査が進展し、面的に、その町割を窺うことが可能となっている。参考までに、以後の調査を含む周辺の略図を示すこととする。なお、ここで示したように引続き調査が実施されているので、今回の報告は、調査の中心となった屋敷とその前面の道路に限定している。そのため、調査区内にあっても他の屋敷に係るものは、その際に報告することとして除いている。また、南北の境界となる 2 条の東西方向土塁の西半は、それぞれ第 24 次・第 54 次の調査によるが、ここで取り扱っている。

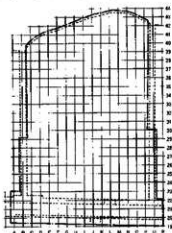


挿図 2 周辺調査区略図



## 日誌抄

第10次調査（昭和48年8月1日～12月5日、  
昭和49年4月5日～4月23日）



神宮3 グリッド設定図

- 8・1 調査開始。耕七を除去。
- 9・17 遺構検出開始。発掘区北半部、東から床土を除去する。
- 9・18 東辺土塚 SA 261を確認。
- 9・25 土原東側の盛り土を除去し道路 SS 260 を検出。
- 9・29 北辺土塚 SA 263を確認。屋敷の東北隅に石横施設群 SF 284～286を検出。
- 10・1 床土下の灰褐色土を除去し、叩き面を造る。
- 10・2 井戸 SE 292を発見。
- 10・5 叩き面を掘り下げ、下層の調査にかかる。
- 10・6 泥立建物 SB 281を検出。
- 10・8 井戸 SE 291と、それに伴う溝・石敷を検出。
- 10・12 溝に沿った道路 SS 335を検出。
- 10・15 掘削 SA 299を検出。
- 10・16 土塚 SA 261に隣接する礎石建物 SR 280を検出。
- 10・19 発掘区南半分の調査に移る。床土、黒褐色土を除去し、下に叩き面を確認。
- 10・20 南辺土塚 SA 262を確認。隔扉敷「ショーガーデン」の一部を発掘する。
- 10・23 道路 SS 260 上の大石をパワーショベルで取り除く。
- 10・26 石敷 SX 337を検出。
- 11・2 下層の検出にかかる。
- 11・5 排水溝 SD 319を検出。
- 11・7 石段 SX 327を検出。
- 11・8 石囲い SX 328を検出。

- 11・12 道路上の大石を除去し終わったので、道路西の検出にかかる。
- 11・14 道筋側溝 SD 268を発見。
- 11・16 道路東側の屋敷の上昇 SA 266・267を検出。
- 11・19 井戸 SE 291・292を調査。
- 11・24 写真撮影のための清掃。
- 11・28 写真撮影。
- 12・1 下層の補足調査。
- 12・5 降雪のため発掘調査中止。
- 4・5 発掘再開。発掘区南東部の最下層を調査。はっきりとした遺構なし。
- 4・8 石横施設 SF 288付近のビット群を調査。
- 4・13 石横施設 SF 288検出。
- 4・15 門 SI 278を検出。
- 4・17 SD 273、石横施設 SF 361を検出。
- 4・20 写真撮影のための清掃。
- 4・23 写真撮影。

第11次調査（昭和49年5月7日～8月5日）

- 5・7 地区新設定。東から床土を除去する。
- 5・8 遺跡 SX 344検出。
- 5・13 井戸 SE 293・294、石横施設 SF 289を検出。
- 5・14 井戸 SE 295検出。周囲は砂利敷になっている。道路 SS 282検出。
- 5・16 2行づつの礎石らしき石を2単位発見。
- 5・17 井戸 SE 296発見。
- 5・25 上層の遺構検出終わる。
- 5・30 3本の井戸を発掘する。
- 5・31 下層の調査にはいる。
- 6・3 掘削 SA 306・310・311の柱穴を検出。
- 6・4 SX 341を中心とする暗渠、溜池を調査する。
- 6・12 南辺土塚 SA 262を調査。
- 6・14 SA 300・301を検出。これに平行するガラ石の詰まった溝らしき跡を調査する。
- 6・17 井戸 SE 295を発見。
- 6・19 この井戸を発掘する。周囲の石敷を検出。
- 6・25 写真撮影のため、清掃。
- 7・6 写真撮影。
- 7・9 SA 262を基準に水糸を張り、実測開始。
- 7・25 補足調査、道筋側溝 SD 269の下層の調査。
- 7・27 SD 269の写真撮影。
- 8・5 調査終了。

## 2. 遺 構 (P.L. 1~19, 第1~15図)

検出した主な遺構は、道路および通路3, 土塁6, 堀13, 溝19, 井戸6, 石積施設9, 建物4, 門2, 暗渠5等である。これらは、大きく3時期に分けられ、これを下層から順に、I期, II期, III期と呼ぶこととする。I期は、道路や土塁と共にこの屋敷が造成された最初の時期であり、II期は、この改造時であって、I期とII期の遺構面の間は0.1~0.2mである。なお、このI期とII期の間には基本構造に変化はみられない。これに対し、III期は大きな変化があったようで、これが滅亡時まで続く。なお、II期とIII期の遺構面の間は0.2~0.3mである。(第3図, 土層図参照)

なお、ここでは、前述した通り、道路とこれに伴う側溝、そしてこの道路に面する南北方向の土塁とこれに直交する東西方向の2条の上屋で囲まれ、西の山裾まで広がる屋敷について報告することとし、他は、それぞれの屋敷単位で報告する予定である。

遺構は、まず、屋敷を区画し、町割に係る道路や土塁等を説明し、ついで屋敷内の遺構を先に示したI・II・III期に分けて述べる。なお、この記述で用いている方向は、谷地形を重視し、谷の入口を北、奥を南としているが、正確には、南北方向道路の方位と地岡上の方位は、道路が北で東へ約6°振れている。また、各遺構平面図等の外側に記された数値は、第VI座標系に基くものである。今後の報告と合せ、町割等を解明する基礎資料として利用願えれば幸いである。

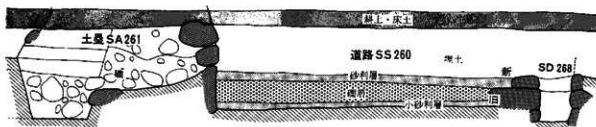
### a. 町割関係(表1)

南北方向道路とここに存在する諸遺構、および屋敷を区画する土塁について述べる。これらの遺構は、各期を通じ若干の手直しをしながら存続するものが大半である。

SS 260 南北方向道路である。I期からIII期まで存続し、この地区の町割の骨格となるもので、この両面に屋敷が配されている。東側に側溝を持ち、これを含めた両側の土塁石垣面内法は約4.5m(15尺)である。路面はよくたたきしめられた砂利敷であって、これが幾層もみられる。1.2/100~2/100の勾配を持って北へ傾斜している。この道路には新旧2つの遺構面があって、この間は約

表1 町割に関する遺構一覧

遺 構		描 要
種 別	番 号	
道 路	SS 260	I・II・III期を通して存在
土 塁	SA 261	同 上
"	SA 262	II・III期
"	SA 263	I・II・III期を通して存在
道路側溝	SD 268	同 上
横断溝	SD 271	II・III期
"	SD 273	I期→SD 271へ
"	SD 274	I・II期
門	SI 278	II期・III期



挿図4 道路SS260 断面図

0.3~0.5mである。これに対応して、道路側溝や道路横断溝の変更がみられる。(PL. 5・8)

SA 261 屋敷の東を区画する道路SS 260に面する南北方向土塁である。I期からIII期まで連続したと考えられる。I期は、北部にみられるように幅1.8m(6尺)であったものを、II期において、後述するように、屋敷の南境界となる土塁 SA 262を設ける際に、南半の幅を約2.7m(9尺)に広げている。南北の屋敷境となる2条の東西方向土塁 SA 262と SA 263の間は45m弱であって、これを3分した北よりに門 SI 278を設けている。この土塁の道路に面する側は、主として長径0.8m、短径0.5m程の自然石を横使いで積むが、中には2m近い巨石も配している。(第1図、石垣立面図参照)これに対し、屋敷内は、石を積んでいなかったようである。なお、水田化に際し、巨石を引き倒したため、この石の厚み分を除いた上方は削平され、この上部の石垣の石が道路上に散乱していた。残存高は、南部で約0.5m、北部で約1.1mである。こうした上部の削平もあって、この土塁の上部構造を示すものは検出されていない。(PL. 5)

SA 262 屋敷の南境界となる東西方向土塁である。屋敷内の竈遺構との関係からII期に造られたと考えられる。(なお、このことは、後の第54次調査により、この約3m南に前身土塁が存在したことで確認された。)幅は、約2.1m(7尺)である。道路 SS 260と平行する南北方向土塁 SA 261の道路側石垣を基準にすれば、この土塁はこれに直交せず、南へ約2°傾いている。石垣は、長径0.5~1.0m程度の自然石を横使いとして積み上げたもので、1~2段が残る。(第1図、石垣立面図参照)西半は、水田化後は農道として利用されていたこともあって比較的保存が良く、高さは約1mである。石積部はほぼこの程度と推定されるが上部構造を示すものは検出されなかった。西の山裾まで続き、約60mの長さで推定されるが、山裾部は未調査であって、検出長は約51mである。(PL. 6)

SA 263 屋敷の北境界となる東西方向土塁である。I期からIII期まで連続する。土塁 SA 261とはほぼ直交している。西の山裾まで延びていたと推定されるが、山裾部は未調査であって、検出長は約61mである。幅は、約1.8m(6尺)である。自然石を横使いとして積み上げるのは先の2つの土塁石垣と同様であるが、この土塁石垣の石は若干小振である。(第2図、石垣立面図参照)やはり西半の保存が良く、2~3段の石積が残る。土塁の高さは、約1.2mである。上部構造は明らかでない。(PL. 7)

SD 268 南北方向道路 SS 260の側溝である。石組の溝で、東側面は土塁石垣がこれを兼ねている。内法幅は、約0.3mである。道路に対応して新旧2期がある。まず、比較的小さな偏平な石を配した古い時期の溝があって、この上に、新たに1~2段(約0.4m)石を積みたして新しい時期の溝としている。(第2図、石垣立面図、挿図4参照)道路横断溝等の関係から、下層がI期に対応し、上層がII・III期に対応すると判断される。(PL. 8)

SD 271・273 南北方向道路 SS 260を横断し、側溝 SD 268にそそぐ石組溝である。I期のものが SD 273であって、道路改修に伴って約1m南へ変更したものが SD 271である。これは、SD 273が東の屋敷の門の正面にあたることから、これをきけた結果ではなかろうか。SD 273は、内法幅約0.2m、深さ約0.15mである。なお、この道路改修の際には土塁石垣の改修もあったと考えられ、この溝は石垣面で行き止りとなり、暗渠等は検出されていない。SD 271は、先の溝 SD 273の約0.2m上層、南に位置している。内法幅は、約0.3m、深さ約0.2mである。暗渠 SZ 272へ続く。(PL. 8・15)

SD 274 南北方向道路 SS 260を横断する石組溝である。内法幅は、約0.3m、深さ約0.15mである。西の土塁石垣面で二方向に分れる。一方は、そのまま直進して暗渠 SZ 275を介して、土塁 SA 263によって区画された北隣屋敷からの排水を受け、他方は、石垣に沿って南に折れ、約2.4m進み、ここで暗渠 SZ

276を介して屋敷内からの水を受ける。また、古くは、さらに南へ延びて、暗渠 SZ 277からの水も受けていた可能性も考えられる。各期を通じて存在したと思われるが、Ⅲ期については不明な点もある。(PL, 8)

SI 278 南北方向土塁 SA 261に開かれた門である。屋敷間口を3分した北寄りに位置している。Ⅱ・Ⅲ期の遺構と考えられる。石垣の改修もあって、Ⅰ期の門位置については明らかでない。この門は、2段の構成であって、上層石垣面から約1.1m内側に第2の段を設け、屋敷内と道路との高低差約0.6mを処理している。両脇に少し大きな役石を立てて形をととのえている。(第1図、石垣立面図参照)その内法は、約3m(10尺)である。ここに設けられたであろう門建物については不明である。(PL, 8)

#### b. Ⅰ期の遺構(表2)

SZ 276 屋敷北端に位置する南北方向土塁 SA 261に設けられた暗渠である。ほぼ北境界の東西方向土塁 SA 263の南側石垣線上に計画されている。道路側のこの暗渠の出口は、縦0.24m、横0.27mの矩形で、石垣中程の少し高い位置にみられる。屋敷内の入口は、Ⅱ期の遺構である石積施設 SF 284 によって壊されているようである。道路 SS 260内に設けられた溝 SD 274に繋る。

SZ 277・SF 361 南北方向土塁 SA 261の北寄りに設けられた暗渠と、その入口に設けられた石積施設である。暗渠 SZ 276の南約3.5mにあつて、暗渠の出口は、縦0.15m、横0.3mであり、先の暗渠 SZ 276に比べ約0.5m低い位置にある。石積施設 SF 361は、北面を除き、石積は大きく崩れている。規模は、南北約1.8m、東西約1.5m、深さ約0.6mと推定される。屋敷内の排水をここに溜め、沈澱槽とし、暗渠を通して排水したものと考えられるが、流入する溝等は不明である。(PL, 17)

SE 294・SB 298 中央西寄りに位置する井戸と、その井戸屋形である。井戸 SE 294は、径0.8m、深さ1.4mと浅く、井桁上台等を用いず、礎層の上に直接円形に石を積み上げている。石は比較的小振りで、径

表2 Ⅰ期の遺構一覧

遺 構			遺 構		
種別	番号	備 考	種別	番号	備 考
暗 渠	SZ 276	あるいはⅡ期か	東西溝	SD 322	素掘 同上
"	SZ 277	Ⅱ期にも存在の可能性	南北溝	SD 323	"
井 戸	SE 294	あるいはⅡ期か	"	SD 324	"
井戸屋形	SB 298	SE 294 同上(掘立柱)	ピット群	SX 334	
東西堀	SA 300	強立 同上	"	SX 338	掘立柱建物跡か
"	SA 301	"	土 壇	SK 339	
"	SA 302	"	"	SK 340	
"	SA 303	"	石 敷	SX 342	SE 294に関連する通路か
南北堀	SA 306	"	土 壇	SK 345	
"	SA 307	"	"	SK 346	
"	SA 310	"	"	SK 347	
"	SA 311	"	ピット群	SX 348	
東西溝	SD 312	石組 同上	"	SX 352	
"	SD 318	素掘 同上	石積施設	SF 361	SZ 277へ通じる
"	SD 321	"			

0.2m程のものを用いている。(第14図、井戸詳細図参照)掘り方の径は、約2mである。井戸屋形 SB 298は、掘立柱であって、東西約3mの規模とみられるが詳細は明らかでない。また、この北の石敷遺構 SX 342もこの井戸に関連する通路的な遺構と考えられる。(PL. 18)

SA 303 西半南寄に位置する東西方向堀と考えられる柱穴列である。柱間は、1.8m(6尺)程度であって、東半は、素掘の溝 SD 321と一致している。

SD 312 中央東半に位置する東西方向の石組溝で、内法幅0.5m、深さ0.2~0.4mである。屋敷内中央にあつて、II期の石積施設 SF 283によって切られているが、本来は、道路横断溝 SD 273と繋っていたと推定される。屋敷内の中心となる排水溝である。なお、この溝の上部は、II期においても生きていた可能性が考えられる。(PL. 15)

SD 318 西半北寄に位置する東西方向の素掘溝である。幅0.5m、深さ0.1mと浅い。東端で少し南へ折れている。

SD 321・322・323・324 西半南寄の素掘の溝である。SD 321は、幅0.8m、深さ0.05mと浅い。また SD 322も幅0.2~0.4m、深さ0.05mと浅い。この2つの東西方向溝は、東端で南北方向の溝で繋っていたようである。SD 323は、幅0.3m、深さ0.1mであつて、内部に礫が多く、盲暗渠であつた可能性も考えられる。SD 324は、幅1m、深さ0.3mと比較的規模が大きい。一部に側石と思われる石もあつて、石組溝であつた可能性も考えられる。(PL. 16)

SX 334 東半北寄のビット群である。比較的径も小さく深いようである。掘立柱穴群とも考えられるが、詳細は不明。

SX 338 中央南寄のビット群。掘立柱穴群と思われるものが大半であるが、建物としてまとめることは出来ていない。(PL. 11)

SK 339 中央南寄にみられる上址である。深さは、0.3mである。

SK 345・346・347 西半北寄の土壇である。深さは、SK 345が0.5m、SK 346・347は0.3mである。

SX 348 西半北寄のビット群。II期の東西方向堀 SA 311に平行しており、この堀の控柱列としての可能性も考えられる。

SX 352 西端南寄のビット群。深さは0.1~0.2mと浅く、礎石の抜き取り跡の可能性も考えられる。

### c. II期の遺構(表3)

SZ 272・SF 383 南北方向土壇 SA 261の中間に設けられた暗渠と、その前の石積施設である。暗渠 S 272は、幅は0.3mであるが、土壇石垣と共に天井石も壊されていて高さは明らかでないが、礎石から考え、0.25~0.3mであろう。石積施設 SF 283は、2つの溝 SD 273・312等の状況から考え、I期に存在したものを大幅に造り替えた可能性が高い。その位置から考え、北の SF 361同様、沈澱槽としての機能が考えられよう。規模は、東西約2.4m、南北約1.5m、深さ約0.8mである。(PL. 17)

SB 280 門 S1 278のすぐ内側に位置する礎石建物である。東西約7.7m、南北約7.9mの規模を持つ。礎石の多くが失われており、平面の詳細な検討は出来ないが、西辺に、幅0.45m(1.5尺)の縁が存在したようである。また、東辺にも同様のものが存在した可能性も考えられる。内部となる東南と西北の間隔に石敷部がみられる。柱間は、約1.9m(6.25尺)が比較的多くみられ、これが基本柱間と考えられる。

SB 281 中央北寄に位置する掘立柱建物である。東西約3.9m、南北約7.7mの規模を持つ。柱間は不規則であるが、6尺とか7尺といった寸法が読み取られそうである。柱根が残らず、柱の形状等は明らか

表3 Ⅱ期の遺構一覽

遺 構		摘 要	遺 構		摘 要
種 別	番 号		種 別	番 号	
建 物	SB 280	礎石建物	ジャリ敷	SX 328	蓋段状に緑石を施す?
"	SB 281	掘立柱建物	石 敷	SX 329	
東西通路	SS 282		石 列	SX 330	
石積施設	SF 283		土 壇	SK 331	
"	SF 284		"	SK 332	
"	SF 286		ピット群	SX 333	
"	SF 287		東西通路	SS 335	SD 313と平行する
"	SF 288		建 物	SB 336	礎石建物, Ⅱの可能性あり
井 戸	SE 291			SX 341	暗渠?
"	SE 295			SX 343	
井戸屋形	SB 297	SF 291 礎石建物	ピット群	SX 349	
東西堀	SA 299	掘立	東西石列	SX 351	
南北堀	SA 308	"	ピット群	SX 353	
"	SA 309	"		SX 354	
東西溝	SD 313	石組		SX 355	礎石?
南北溝	SD 315	" SD 313へ続く	ピット群	SX 356	
東西溝	SD 317	" SD 313の一部か	"	SX 357	
"	SD 320	"		SX 359	溝状
"	SD 325	素版コ字形		SX 360	SD 323等を覆うジャリ敷

でない。(PI., 11)

SS 282 中央の東西方向通路である。幅は、1.2m (4尺) であって、両側を自然石を用いた緑石で整えており、内部は良くしまった砂利敷面である。中程は備石・砂利敷面等が良好に残る。この通路の北に沿って、Ⅰ期の溝 SD 312が引続き存続した可能性が強い。(PL., 12)

SF 284・286・287 北土塁 SA 263に接して東端近くに位置する石積施設群である。SF 284は、東西約1.8m、南北約1.5m、深さ約0.6mであって、南面石積が良く残る。SF 286は、東西約2.4m、南北約1.5m、深さ約0.7mであり、SF 284同様南面石積が最も良く残る。SF 287は、東西約2m、南北約1.8m、深さ約0.6mであり、各面の石積が比較的良く残る。これらはすべて自然石を用いて積み上げているが、若干石の大きさが異なり、SF 287が最も大きな石を用いており、2段積であり、SF 286が最も小さく、4段積となっている。(第15図、石積施設立面図参照) なお、これらは、約3m間隔で配置されている。(PL., 19)

SF 288 中央部の石積施設である。ほとんど石積は壊されているが、北面が若干残る。東西・南北共約1.8m、深さ約0.6mと推定される。なお、この石積施設の中央を東西に堀 SA 299が横切っている。

SE 291・SB 297 北土塁 SA 263の脇、中程に位置する井戸とその井戸屋形である。井戸 SE 291は、内径約0.7m、掘り方の径は約1.8mである。上方が崩れているが、この部分の径は少し大きかったようで、積み増しが行われた可能性が強い。とすれば、Ⅰ期から存続し、積み上げを行って、Ⅱ期にも使用したことになる。井戸屋形 SB 297は、礎石建物であって、東西は約3mである。南北もほぼ同様である。

う。また、南の溝 SD 313 との間には石敷が存在している。(PL. 18)

SE 295 西半南寄に位置する井戸である。内径約0.8m、深さ約1.5m、掘り方の径約2.3mである。深さに対し、掘り方の径が大きい。井戸の天端石の一部も残っている。すぐ隣の1期の井戸 SE 294 に変わるものであろう。この SE 294 同様、礎層上に土台等を用いず、直接自然石を積み上げている。(第14図、井戸詳細図参照) なお、この周囲を広く砂利敷 SX 360 が覆っている。(PL. 18)

SA 299 中央の塼と考えられる東西方向独立柱列である。一部に柱根が残り、柱は、樹皮付の栗材である。径0.12~0.15m (4~5寸) の丸太であったことが判明している。柱間は、1.5m (5尺)、3m (10尺) が多くみられることから、5尺を基本柱間としたと考えられる。中央を南北に分ける塼であると推定される。また、この柱筋には、深さ0.15m 程の溝状の掘り方が存在している。(PL. 13)

SA 300・301 中央西半の塼と考えられる東西方向の独立柱列である。SA 300は、先の東西方向塼 SA 299の西に位置し、若干柱筋が異なるが一連のものと考えられる。柱根も一部残り、SA 299と同様の樹皮付栗材である。柱間隔等も同様で、5尺を基本としたと思われる。SA 301は、この SA 300の0.3 m 南に位置してほぼ平行する。形状等は類似点が多い。いずれが先行するのか不明確であるが、造り替えによるものであろう。(PL. 13)

SA 302 西半北寄に位置する塼と考えられる東西方向の独立柱列である。柱間隔は、狭く、約1m である。

SA 306・307 中央北半に位置する塼と考えられる南北方向の独立柱列である。SA 306の柱間は、先の SA 302 同様約1m である。SA 307は、SA 306の約0.9m (3尺) 西に位置している。造り替えあるいは、SA 307の柱間隔が若干広く、SA 306と柱位置に対応関係もみられることから考えて、SA 307は SA 306の控柱列であった可能性も想定される。(PL. 14)

SA 308・309 中央に位置する塼と考えられる独立柱列である。SA 308と SA 309は約1m 離れて平行している。先の SA 306・307と同様のことが考えられる。

SA 310・311 西半北寄に位置する南北方向の独立柱列である。共に塼と考えられるが、柱間等は不規則である。独立柱建物の可能性も残る。(PL. 14)

SD 313・315・317 東半北寄の主として東西方向の石組溝であるが、先端でそれぞれ北へ折れている。SD 313とこの西の SD 317は、本来一つの溝であったものを、西半の SD 317を廃し、さらに、残る SD 313も再び西半を廃して、北へ向う溝 SD 315をつけ加えたものである。この SD 315の設け方から考え、SD 313の西端の北向の部分も西の SD 317を廃した時に設けられたものであろう。この SD 313・317の方向は、土塁 SA 263 とは若干異っている。溝の幅は、0.2m 程度であり、掘石は1段で、0.1m 程の深さである。また、SD 313の東半の北には、この溝の造り替えと考えられる溝 SD 314 が一部残されている。(PL. 12, 16)

SD 320 中央部に位置する石組溝である。一部が残存するのみであって詳細は明らかでない。この北隣の SX 341は、扁平な石を伏せ、下を暗渠のようにしている。この溝と関連する遺構の可能性も考えられよう。(PL. 17)

SD 325 西端近くのコ字形の茶掘りの溝である。幅は、0.3m、深さ、0.1m である。

SX 328 東端、中程の砂利敷遺構であって、周囲に基壇状に自然石緑石を廻している。この東北に位置する石敷遺構 SX 329もこれと関連するのかもしれない。

SX 330 土塁 SA 261 壁、北寄に位置する南北方向の石列である。径0.4~0.5m と比較的大きな扁平な石

を5石並べている。東に面があるように見受けられる。

SK331・332 東半北寄の土壇である。深さは、共に0.15m程で、比較的残いが、径は、1.5～2mと大きい。

SX333 東半北寄のビット群である。掘立柱穴と思われるものと、皿状の浅いものの2種が混在している。

SS335 東半北寄の溝SD313の南に沿う東西方向の通路である。幅は、1.5m（5尺）である。小砂利混りの良くしまった面である。Ⅲ期の井戸SF292によって分断されている。（PL、12）

SB336 東半南寄の礎石群である。比較的大きなしっかりした礎石であるが、一部が残るのみで、規模等は明らかでない。Ⅲ期の遺構の可能性も残されている。

SX349 西半中程のビット群である。深さ0.1m程と浅く、礎石の抜き取り跡の可能性が考えられる。

SX351 西端南寄の東西方向の石列である。小振りの石を横長に用いている。

SX353・354・356 西端北寄のビット群である。SX353は、6個のビットが円形状に配されている。

SX355 西端北寄の礎石群である。

SX357 西端北寄のビット群である。掘立柱穴であって、塀SA311に関係する可能性も考えられる。

SX359 西端中程の南北方向の溝状の遺構である。幅は、0.8m、深さ、0.15mであって、北に石積の一部と考えられる石が残る。

#### d. Ⅲ期の遺構（表4）

SF285 東北隅近くに位置する石積施設である。

東西約1.7m、南北約1.2m、深さ約0.6mの規模で、保存も良く、各面の石積が良く残る。長径0.4m程の自然石を横使いとして3段階積み上げている。（第15図、石積施設立面図参照）（PL、19）

SF289 中程西寄に位置する石積施設である。

東西約0.9m、南北約0.7m、深さ約0.45mと小規模である。石積の石も小振りで、2～4段階積み上げている。（第15図、石積施設立面図参照）礎石建物SB350の南面柱筋に位置しており、この建物との関係が考えられる。（PL、19）

SF290 西端中程に位置する石積施設である。

東西約1.8m、南北約1.2m、深さ約0.4mであって、比較的小きな石を用いて積み上げている。（第15図、石積施設立面図参照）（PL、19）

SE292 中程北寄に位置する井戸である。Ⅱ期の溝SD313と通路SS335を壊して造られている。径は、約1.1m、深さ約3.3m、掘り方の径約2.3mである。礎層の上に端太角材を井桁に組み、この上に石を積み上げている。角材は相欠きで組んでいる。石積は、ほぼ直であって、上部でのせり上げはほとんどみられない。下部の石が若干大きく、中程は小振りである。（第14図、井戸詳細区参照）（PL、18）

SE293 中央やや北寄に位置する井戸である。径は、約1.1m、深さ約3.5m、掘り方の径約2.3mである。

表4 Ⅲ期の遺構一覧

遺 構		摘 要
種 別	番 号	
石積施設	SF285	
"	SF289	
"	SF290	
井 戸	SE292	
"	SF293	
"	SE296	
東 西 堀	SA304	掘立・角柱・伏置石あり
"	SA305	掘立・角柱
東 西 溝	SD319	石組
石 登	SX327	
"	SX337	
	SX344	カマド?
建 物	SB350	礎石建物、Ⅱの可能性あり



構造、規模等は先に述べた井戸・SE 292と良く似ており、端太角材による井桁の上に石を積み上げている。全体的に大振りの石を用いている。大礎石も一部残る。(第15図、井戸詳細図参照) (PL. 18)

SE 296 西北部に位置する井戸である。径は、約1m、深さ約3.5m、掘り方の径約2.3mと、先の2つの井戸SE 292・293と良く似ている。やはり、端太角材の井桁を廻し、この上に石を積み上げている。

(第15図、井戸詳細図参照) (PL. 18)

SA 304 東寄に位置する南北方向の塼と考えられる独立柱穴列である。柱穴は、0.12m(4寸)程の方形を呈している。これまでに述べた他の塼のように丸太材ではなく、角材を用いていたと考えられる。また、この柱穴間には、径0.15m前後の自然石を狭間石として並べている。柱間は、北の2間が1.8m(6尺)、そして、第3間が2.3m(7.5尺)、第4～6間は1.8m(6尺)である。この南の東西方向石列までもやはり1.8m(6尺)であり、狭間石も一部みられることから、この東西方向石列まで塼は延びていたと思われる。なお、北から数えた第3間の7.5尺間には狭間石が存在せず、また柱間も大きいことから、ここに塼中門が存在したと考えられる。また、この西南に存在する南北方向1間、約1.5mの独立柱穴 SA 305も形状が良く似た方形であり、同様の塼の一部であろう。(PL. 14)

SD 319 中央南寄に位置する南北方向の石組溝である。内法幅0.25m、深さ0.2mである。大半が壊されており、詳細は明らかでない。約4m南の南北方向の石列も、東に面を持ち、この溝の西側石列と判断される。(PL. 17)

SX 327 東端南寄の石敷である。南面に縁石と思われる少し大振りで扁平な石が並んでいる。

SX 337 中程南寄の石敷である。比較的大振りで扁平な石を敷きつめている。

SX 344 中程北寄に位置する石を馬蹄形に組んだ遺構である。西半が楕円状であり、東半は、これをやや狭めた矩形である。大半は自然石であるが、一部に凝灰岩切石(笏谷石)を用いている。竈跡と思われる。また、すぐ脇には、礎石と思われる石も存在することから、この遺構は建物内に存在したものであろう。(PL. 17)

SB 350 西半中程に位置する礎石建物である。径0.5m前後の少し大振りの自然石を用いた礎石である。多くの礎石が失われており不明な点も多いが、東西10m程度、南北約5.9mの規模と推定され、比較的大きな建物である。先述したように、この建物の南面東端近くに石積施設 SF 289が存在している。

### 3. 遺物

今回取り扱う遺物の範囲は、「新馬場」と伝えられてきた武家屋敷と、その前面の東西道路・道路側溝から出土した遺物群である。整理の方法は、発掘区全体が大きくは3時期に分けることが出来るので、各時期毎に遺物を分けた。さらに溝や井戸、溜槽など遺構単位にまとまっているものについては、その遺構毎に、そのほかは整地層出土として扱った。図版もこの意図に沿って作成した。しかし、遺構内出土の遺物でも1、2点の場合は整地層として扱ったものがある。なお、写真と実測図の個体番号は共通である。

遺物の分類については、越前焼大甕・搦鉢は、「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」<sup>43)</sup>、土師質皿は、「特別史跡・乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書1」<sup>44)</sup>、染付は、「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」貿易陶磁研究No.2（小野正敏1982）を参照してほしい。なお、分類の基本はこれらの文献を踏襲したが、それらに付与した記号に付いては一部改変したものがある。その基準は、アルファベットを器形の分類に用い、ローマ数字を時期的な分類に使用した。

#### a. I期出土の遺物

I期は、溝SD312、石積施設SF288、土壇SK339等を構成する遺構面とそれを覆う整地層である。道路側溝SD266下層についても、屋敷内のI期の遺構群と并存していたと推定している。

##### SF288出土遺物（PL. 20, 第16図）

**越前焼 甕**は、口縁部を欠くが体部の成形手法や胎土に古い形態を残す破片(1)がある。壺(2)は、腰部から底部にかけて甕によるナデ成形跡が顕著である。口縁部に沈線がつくI群の鉢(3)と沈線が退化したII群の鉢(4)が2点出土した。胎土、表面ともに灰褐色を呈している。

**土師質** いわゆる手捏ねのB類(5)、親指を粘土板の中央まで、折り曲げた人差指を粘土板の端に当て起こし、そのまま時計方向に一気に回しナデ整形したC類(6-7)、C類と同様に成形した後、見込み部分を先に横ナデし、口縁外側と内面体部を挟んでゆっくりと回しナデ整形したD類(8)の各種が出土している。

**瀬戸・美濃焼** 天目茶碗(9)は、口縁部のくびれ具合から大窯初期のものであろう。灰釉は、端反りの小皿(10)と壺(11)の小片がある。

**青磁** 腰があまり張らず、口縁部が外反する無文の碗(12-13同一個体)である。釉色はややくすんだ青緑を呈し、細かい貫入が走る。

##### SD266下層出土遺物（PL. 20, 第16図）

**越前焼 甕**は11点出土したが、時期がわかる口縁部はない。細片ではあるがIV群bの搦鉢(16)と扇状の刻文がつく鉢(17)が出土した。(18)は内湾する鉢、(19)は口縁部が肥厚し、全体にやや開いている火桶であろう。

**土師質** 土師質皿は、C類、D類が多い。(20-21)は底部が丸く、口縁部の立ち上がり少ないC類で、(22)は口径が13cmあり、D1類である。

**瀬戸・美濃焼** (23)は、口縁部のくびれの少ない大窯初期の天目茶碗である。

**瓦質土器** (26-27)は口縁が外反する3足の香炉で、体部に菊の印花が走る。同一個体と見て復元実測した。

青磁 (29)は蓮弁の形をなさないほど退化した線刻の蓮弁文碗で、透明がかった薄い緑色の釉がかかる。

(30)は、見込みに印花のある淺花皿で、高台裏の中央だけ露胎である。

白磁 瓣反りの皿(31)が1点出土した。

染付 腰部に芭蕉文がつくC群の碗(32)が1点ある。

石製品 裏をえぐり脚を作りだした硯(33)のほか、火山礫凝灰岩(筋谷石)製の行火(バンドコ)やその蓋(34)が出土した。

#### I期整地層出土遺物(PL. 21~23, 第17~19図)

越前焼 甕は100点余り出土したが、時期がわかる口縁部は少ない。口縁帯がしっかりしたI群が2点(35・36)、口縁帯が退化し内側の段も凹線に変化したII群が2点(37・38)、口縁部が肥厚し始めたIV群aないしbが2点(39・40)あり、各時期のものがかなり混在している。胎土や成形手法、肩部の曲がり具合からIII群以前(41)と思われる破片数は24点、IV群以降と思われる破片数は66点あり、その比はおおよそ1:3でIV期以降のものが多し。播鉢は、III群a(47) III群b(48) IV群aが多い。鉢は、I群~IV群まで出土しているが、I群の割合が高い。(45)はI群の口縁部の沈線と片口の状態でよくわかる例であり、(43・44)は退化しつつある高台と鹿削りの例である。

土師質 皿は、C類・D類が主体である。(52・53)はC類と同じ成形をした後、底部中央を突き上げたいわゆる「ヘソ皿」である。C類については口径が6cm(2寸)を基準とするものをC<sub>1</sub>類、7.5cm(2寸5分)を基準とするC<sub>2</sub>類、9cm(3寸)を基準とするC<sub>3</sub>類に分類した。さらに器壁が薄く、底部が平坦な作りで口縁部の立ち上がりか顕著なものをa、器壁が厚く、底部が丸く立ち上がりか顕著でないものをbとする。D類は、口径が9cm(3寸)、12cm(4寸)を基準とするD<sub>1</sub>類と、それ以上のD<sub>2</sub>類がある。D<sub>2</sub>類は胎土を選良し、作りも丁寧で底部に黒斑があるもの(62)が多い。口径が30cm位と推定される皿(65)があり、成形手法はD<sub>2</sub>類である。胎土は細かく白い。底部は内外面とも黒斑化している。(67)は口径が12cm、高さ(10cm)で、一乗谷では標準サイズの土釜である。やや下に膨らんだ体部に、底部が上に反った貼付けの髹がつく。(66)は、底部がやや浅く膨らみの少ないタイプである。底部付近には煤が付着する例が多く、小型ながら実用に供されたことを示している。

瀬戸・美濃焼 天目茶碗は4点出土し、腰から高台にかけて露胎になっている大瀬川産の製品(75・76)が2点ある。(71・72)は丈が高く全体に丸みを帯び、口縁部のくびれも少ない大瀬初期のもので、腰部にはサビ釉が施されている。(73)は体部がやや直線的で、高台は削り出し内返り高台である。口径が8~9cm位になる小型の天目茶碗(74)も出土した。

(80)は灰釉平碗で、削り出しの輪高台で露胎、疊付けには輪ト子の跡が付着している。(81)は大きく開いた鉢で、表面に轆轤跡が残る。口縁部は三角に成形され、内外面とも口縁から4cm位まで施釉されている。外周栗部にはサビ釉が施されている。(84・85)は即皿でおそらく同一個体であろう。口縁の内側に返りがつき、底部には回転糸切りの跡が残る。施釉は口縁部の周辺だけでその他は露胎である。胎土はやや荒く、堅く焼き締まっている。

白瓷系の土器が2点ある。(88)の底部は回転糸切りの跡が残る、退化した付高台の疊付けには轆轤跡がある。(89)は轆轤成形の跡をよくとどめる。口縁は三角に成形されており、灰釉鉢に似た点がある。

青磁 碗は12点出土し、内訳は鹿削りの蓮弁文(90)が4点、線刻の蓮弁文(91・92)が5点、無文(96・97)が2点、小型の碗(95)が1点である。(90)は腰部から大きく開く器形で、鹿で蓮弁を刻んでいるが蓮弁にはなっていない。(98)は青磁碗の高台で、見込みには吉祥句を唐草文で飾った印花がある。全面に施

釉後、重ね焼きのため高台裏の釉を拭き取っている。青磁皿は、稜花皿が2点出土した。全体に厚手で、高台内の削りは荒い。(99)は口縁に沿って3条の櫛描文が巡り、見込みには印花文がある。(100)は酸化炎で焼成されて胎土、釉共に茶褐色である。割れ目には漆が付着しており、修繕して使用していたことを示している。他には玉帯春型の花生の口縁部(102)がある。

**白磁** B群の皿が2点出土した。内湾気味に立ち上がり外面に轆轤成形の跡を残す等、形態はほとんど同じであるが、(103)は乳白色で軟質、(104)は青白色で硬質の皿である。高台を欠くが、袂の入ったいわゆる「さくら高台」であろう。端反りの皿は4点出土した。C群としてきたものの中に、やや青味がかかった釉色で口縁の形態も少し異なるタイプ(105)がある。

**染付** 碗が2点ある。(110)はB群(XII類)である。口縁が端反りになっており、釉色も濃いコバルト色をしている。小片のため文様は断定できないが磨れた唐草文であろう。(108)は腹部に芭蕉文が巡り、見込みは蓮花が描かれたC群(I類)の碗である。皿には、蒜薹底で、見込みは草花文、外面は唐草文のC群(I類)(111)がある。

**中国製天目茶碗** 細片であるが中国製天目茶碗(112~114)が3点出土した。口縁部のくびれは少なく、全体にやや直線的である。釉は国産のものより厚く、艶がある。胎土はやや荒いがよく焼き締まっております。手取りは重い。

**金属製品** 銅銭が3枚(118~120)あり、いずれも北宋銭である。(115)は鉄銭で、本体は円錐形、茎は四角い。釘が多数出土した。すべて鍛造である。大半は折れているが(116)は原型を保っており、長さ5.3cmを測る。

**石製品** 鈔谷石製のバンドコ(行火)(124)や盤、磁石などがある。(121~123)は小形の仕上げ砥石で、表面に細かい使用痕がある。仕上げ砥石は、粘板岩系の石が多い。

## b. II期出土の遺物

建物SB281、280、通路SS282、335、溝SD313~315・317、塹299、石積施設SF283、284、286、287、井戸SE291、294などを構成する遺構面と、それを覆う整地層出土の遺物である。遺構は、屋敷全面に広がっているが、残存状況は良くない。

### 建物SB281出土遺物(PL. 24, 第20図)

柱穴と建物内の灰が詰まったピットから出土した遺物である。

**越前焼** 甕と鉢が出土した。甕(125)のスタンプは格子目が小さく縦に長い古いタイプである。鉢(126)は、口縁が薄く、垂み具合から片口がつく。

**土師質** 皿ではC類、D類が多い。C類では、口径が6cm(2寸)を基準とするC<sub>1</sub>類(128~132)、7.5cm(2寸5分)を基準とするC<sub>2</sub>類(134・135)、9cm(3寸)を基準とするC<sub>3</sub>類(136)があり、さらに底部が丸く口縁部の立ち上がりが小さいaと、底部が平坦で口縁部の立ち上がりが顕著なbに分類することができる。量的にはC<sub>2</sub>類、C<sub>3</sub>類が多い。

**石製品** 仕上げ砥石(137)が1点出土した。使用面は少し波打っており、斜め方向に数条の使用痕がある。よく使用して薄くなっている。

### 石積施設SF287出土遺物(PL. 24, 第20図)

**越前焼** 甕、壺、播鉢が出土した。壺(141)の口頸部は体部からはほぼ直立し、口縁直下に凹線が巡る。播鉢(142・143)は、播目の間隔が詰まっているところからIV群に属する。

土師質土器 皿類は、C群、D群が多い。(147)は、口径が10.5cmでD<sub>1</sub>類に属するが、底部を下から突き上げヘソ皿状に凹んでいる。

石製品 砥石が3点ある。(148)は長さ13.5cm、幅4.5cm、高さ5cmで、石材は浄教寺砥石である。浄教寺は一乗谷の奥にあり、「和漢三才図説」に刀剣用中砥の産地としてあげられている。(149)は仕上げ砥石で、表面に細かい数条の使用痕を残す。仕上げ砥石は、小型の物が多い。

#### 石積施設SF288出土遺物 (PL. 25, 第21図)

越前焼 裏B類の口縁部(153)が1点出土した。B類は、口頸部が少し外反して5cm程立ち上がり、口縁外面には稜または沈線が、内面には軽い段がつく。撫肩で、体部は卵型、最大径は胴中央部よりやや上位にある。指鉢(154)は、口縁部を欠くが指目が密であり、IV群と考えてよい。

土師質 小皿が多数出土した。やはり、C類、(155・156)D類が多い。(162)は、D類の成形過程がよくわかる例である。見込みを横撫でした後、見込みまで入れた親指と曲げて口縁部に掛けた人差指で挟み、ゆっくりと回し撫でしている。見込み中央を突き上げたD類のヘソ皿タイプである。(159)は、何度も使用されてタールがベタリ付着している。

瀬戸・美濃焼 (163)は直線的に大きく開く灰釉の平碗、(164)はやや丸みを有する大振りの碗で、体部に幅の広い寛描きの連弁文が返る。

#### SX341・SD320出土遺物 (PI. 25, 第21図)

越前焼 IV群a(168)、IV群bの裏(167)が出土した。IV群になると口縁部がかなり肥厚しており、そのため口縁の成形は、両手の親指を口縁上端部に当て2本の人差指で両側から挟むようにしてナデ整形<sup>38</sup>している。(169)は、III群bの指鉢である。口縁内側の上端部から段までの間が短くなり、見込みにも指目が入っているが、まだ指目の間隔は広い。

#### II期整地層出土遺物 (PL. 26~29, 第22~24図)

越前焼 裏は多数の破片が出土したが、時期がわかる口縁部は少ない。IV群a(174)が2点、IV群bが1点(175)、IV群c(176)が1点、I群が1点ある。III群以前と推定できる破片が30点ほどあり、II期整地層出土の裏全体の約30%を占める。そのほかB類の裏(179)やC類の裏(181)もある。壺は16片出土した。いずれも体部の破片で特徴の出やすい口縁部はなかった。指鉢は52点出土し、このうち分類可能な口縁部は18点ある。III群b(182~185)が8点、IV群a(189)が7点、IV群b(190・191)が3点ある。鉢で底部から直線的にあるいは外反気味に大きく開くタイプは、指鉢と分類基準が共通する。8個体出土した。(192)は、I群で、深い片口がつき、口縁部の沈線もしっかりしている。割合高い付高台がつき、外面の寛削りも体部中程に及んでいる。(193)は、型式が指鉢のIII群bと共通する。かるい片口を有し、内面には十字の寛記号と扇状の櫛描が3単位ある。(194)は寛記号や扇状の櫛描のないタイプである。他に深目で口縁部近くで内湾するタイプ、浅いボウル状の物などもある。(195)は火桶で、底部から腰部まで少し開き気味に立ち上がり体部から口縁にかけては直立する。内面には成形時の指の跡が、外面底部近くには寛削りの跡が残る。器壁はやや厚く、焼成はあまい。

土師質 多数の土師質皿が出土したが、その大半はC類・D類で、なかでもC類<sub>2</sub>(200・201)、C類<sub>3</sub>(204~212)の割合が高い。(196)はA類いわゆる「ヘソ皿」である。(200)は整形手法からC類に属するが、通常のC類より浅い。よく焼きしまっており、赤褐色を呈し見込みの部分は赤紫色の底紋がある。(208)は、ナデによる整形手法がよくわかる例である。(215)は、体部が直立する皿で、これを両側から強く挟んで変形させると耳皿になる。土釜は12点出土しているが、全体がわかる例は少ない。

(216)は鈎より下が浅いタイプである。(217)は、内容物が吹きこぼれて付着している。

**瓦質陶器** 火鉢、瓦葺、上釜などがあるが、いずれも細片で全体がわかるものはない。(239)は、三脚が付く土釜で、口径は6cmしかない。鈎から上は螺旋状になっており、口縁部の形態が土師質の土釜と異なっている。

**瀬戸・美濃焼** 天目茶碗は、16個体出土した。そのうち6個体は、大窯以前の製品である。(218)は、口縁部がほとんどくびれず直線的で、鉄釉は安定せず焦茶と黄褐色のまだらになっている。腰から下は露胎(220)である。大窯期の天目茶碗は10個体あるが、口縁部2個体(221・222)は、いずれも口縁下のくびれが小さく、丈が高く全体に丸みのある大窯初期の製品である。これら天目茶碗の胎土には灰色で堅く焼き締まった物と、褐色でぼそぼそしたいわゆる「もぐさ土」の物とがある。(224)は小天目茶碗の高台で、厚くサビ釉が塗られている。(223・224)は高台の円を利用して丸く再加工したもので、用途は不明。鉄釉では、ほかに丸碗、香が片?がある。灰釉碗は、11片(5個体)出土した。蓮弁文碗が1個体(226)、線刺の蓮弁は体部中央までしかなく、一部釉がとんで露胎になっている部分がある。同じ器形で蓮弁のない丸碗(227)が1個体ある。二次的な火を受けて釉がかせている。胎土は灰色であるがぼそぼそしており「もぐさ土」に近い。そのほか灰釉碗では、天目茶碗と同じ器形のもの、大きく開く平茶碗(229)がある。灰釉皿は、腰部から下が露胎、削り出し高台で、腰部から大きく屈曲して外反する腰折皿(232)と、付け高台で端反りの皿(230・231)の両方が出土している。直線的に大きく開く口径20cm程の鉢、体部がほとんど直立し、かえりが消失しつつある卸皿(235)、壺(236)などもある。そのほか白瓷系の碗(237・238)が2点ある。

**青磁** 碗は22個体ある。そのうち蓮弁文碗は15個体あり、内訳は露胎蓮弁文1個体、幅が広い蓮弁文1個体、莚による蓮弁文1個体、線刺の蓮弁文(242)12個体である。無文の碗(243)は、7個体あるが、すべて口縁が直立し端部を丸く収めるタイプである。(241)は、莚描きによる蓮弁文碗で、腰の張らない開いた器形である。見込み周辺には花卉の莚描きがある。(245)は焼成中に酸化されて釉が茶褐色を呈し、胎土も赤褐色である。(246)は、見込みに吉祥句の印花のある碗の底部である。普通の碗と比較してかなり大きい。壺付きにも施釉され、高台裏の釉を拭き取り輪トチの跡が残る。割れ目には漆が付着しており、一度割れた後も補修して使用していたことを示している。青磁皿は、4個体出土しているが、すべて桜花皿である。厚手で見込みに印花があるもの(247)とないもの(248)とがある。全面に施釉した後、高台裏の釉を拭き取っている。これらは高台の円を利用して意識的に打ち欠き、他の用途に再利用した物である。この再利用の仕方については、青磁碗にその用例が多く見られるが、用途については不明である。

**白磁** 細片ばかりであるが、端反りのC群(250・251)が多く、8個体出土している。全面施釉後高台壺付きの釉を拭き取っている。壺付きには砂が付着し、いわゆる「砂高台」になっているもの(250)が多い。B群の皿は1個体あり、轆轤成形後、高台を削り出している。胎土が軟質のタイプで、釉も乳灰色を呈する。菊皿が2個体あり、(252)は作りが丁寧で釉も厚い。なお、白磁碗は出土しなかった。

**染付** 碗は少なくとも3点だけである。(254)は高台に特徴があり、高くて内傾しており厚さも薄い。高台内は露胎で、最初から施釉していない。見込みにほねじ花が描かれている。B群の碗である。他2点はC群で口縁部に波濤文が巡るものと、体部が唐草文のものがある。皿は、15点出土しているが、そのほとんどがB群である。外面は唐草文で、見込みに十字花文(262)と玉取獅子(256)とがある。

(263)は唐草文を密に展開したものである。

**褐釉壺** (267)は口頸部と底部だけで、体部を大きく欠いている。口縁部は玉縁状で頸部と体部の境に段があり、肩部に耳の跡がある。底部は露胎で内側に大きくくぼんでいる。

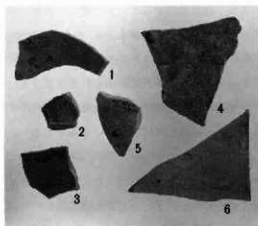
**金属製品** 銅銭の出土は少なく14枚、そのほとんどが北宋銭で明の洪武通宝(271)が1枚混じる。釘類は多数出土したが、その全てが折曲っており原形をとどめるものはない。鍛造の角釘で、釘の頭を叩いて扁平にしたもの(281)、さらにそれを巻き込んだもの(276)との2種類ある。そのほか鍔(282)や端止め(283)がある。武器類では装飾のない鋼製の小柄(284)、錆びた小刀(285)がある。

**石製品** 粉谷石製のバンドコ(行火)、盤などがあるが図化できるものはない。(281)は直径5cmのやや扁平な球状で、上部を平坦に削りそこに深さ1cm程の穴を穿っている。用途は不明。

**円盤状陶製品** (287~294)は越前焼の裏・壺の破片を円盤状に打ち欠いたもので、直径は2~8cmと様々である。用途は不明。ほかに青磁碗や皿、天目茶碗の高台部を用いたものがあり、これらとの関連についてもよくわからない。

#### 越前焼壺・壺内部の付着物並びに使用痕 挿図-5

1は裏の内側に炭化した有機物が付着したもので、裏に貯蔵していたものが炭化したものであろう。2はいわゆる「お歯黒壺」で、鉄漿が付着したものである。3は裏が割れたので、漆を塗った布テープを割れ目に張り付けて補修した跡である。4・5は溶けた金属が付着したものである。4は赤褐色をしているが種類は不明である。5は青緑をしており、おそらく緑青であろう。6は裏の内面がかなり摩耗しており、何か堅いもので何度も洗った跡と思われる。



挿図5 越前焼 付着物・使用痕

#### c. Ⅲ期出土の遺物

Ⅲ期の遺物は表土・床土を排除して検出した最上層の遺構面までの遺物を含み、かつ表面採集によって得られた遺物も便宜上、ここで扱うことにした。既に遺構の項でも触れられているように、今回の調査区は削平による開田が進み、かなり上層の遺構面が削られていた。従って、表土に含まれる遺物には最上層(Ⅲ期)の遺物以外に、下層のものも含んでいることが予想される。この状況は調査地区の西側半分のところにおいて、特に顕著であった。出土した遺物の内、Ⅲ期に属するものは越前焼1,324点、土師質土器2,808点、瀬戸・美濃焼182点、中国製陶磁器543点、そして朝鮮製陶器、金属製品、木製品、石製品、その他の陶磁器がある。

Ⅲ期の遺構として明らかなものには井戸 SE 292・293・296、石積施設 SF 285・290、柵 SA 304、溝 SD 319等があるが、比較的まとまった遺物を出土したものに井戸 SE 292・293がある。以下、この2井戸の出土遺物について報告し、後にⅢ期とした遺構面及び表土・床土の遺物を一括して報告することにする。

#### SE292出土遺物(PL. 30, 第26図)

既に『概報Ⅵ』(1975)で報告したように、この井戸からは多量の焼土・壁土と共に、井戸屋形に伴うものと見られる遺物が出土している。

**中国製陶磁器** (295)は白磁の皿である。口縁部は内湾し、高台状付を露胎とし、全面に黒ずんだ灰色を呈する釉が施される。釉調は安定しており、厚めにタツブリとかけられている。貫入が見られる。

(296) は小野分類(『貿易陶磁研究No.2』1982)のE群に属する碗で外面に飛馬文が描かれ、見込みには加意頭文が描かれる。

**金属製品** (297) は鉄製の蔓頭金具で遺存度は極めて良好である。(298) は同じく鉄製の五徳で脚の一部から推定復元を試みた。(299) も鉄製の鍵で一乗谷出土の鍵の中では比較的大型のものである。(300) は鉄鍋で、釣り手部分を欠くが口径約36.8cmを計る。

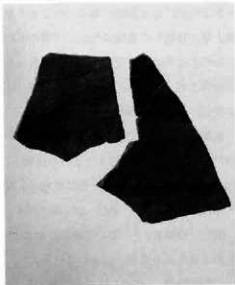
#### SE 293出土遺物 (PL, 30・31, 第26図)

この井戸は天端石と見られる石組が2個ほど残ってはいるものの、後世に削平・攪乱された痕跡が窺え、中から出土した遺物には周囲から掻き集められて、埋め戻しに使われたと見られるものが多い。周囲からの遺物が混入していることを顕著に示すのが越前焼の大甕・中甕である。大甕(303)はこの井戸内の出土99点をはじめ、門(SI 278)9点、石積施設(SF 289)4点、床土2点、その他整地層や排土からも出土しており、計118点である。中甕(301)は井戸72点、床土3点、欄 SA 310東付近のピット1点、計76点出土している。更に、中甕(302)は井戸24点、欄 SA 310西付近のピット21点、他に床土6点、整地層4点、排土3点、他2点の計60点となっている。後でも述べることになるが信楽壺(311)一個体分、計90点のうち45点がやはりこの井戸から出土しており、床土やⅢ期の遺構面、整地層、そして北接する第24次調査区からも11点出土している。これらはいずれも接合資料を対象としている。こうした遺物の拡散状況は、他の調査地区の井戸での出土遺物にも同じ例があり、筋谷石製の井戸枠が破片となって一緒に投げ込まれている場合も多い。ここでは越前焼の大甕や信楽の壺がそれぞれ井戸付近で割れて遺存していたものが、井戸の埋め戻しのために、掻き集めて投げ込まれ、残った破片が水田耕作等で攪乱され、周囲に散らばったことを推定させるものである。但し、井戸への投げ込みの時期が朝倉氏の滅亡の時期か、それともその後の開田の時期かは直ちに判断できない。

**越前焼** 大甕(303)は『泉道・調査報告書』(1983)でⅣ群としたものに属し、口縁部は最大限に肥厚し、肩の張りや胴部の段は見られない。器面の釉はかせた状態で、灰白色を呈し、ゴマ降り状でザラザラしている。肩部に「本」と「格子目」のスタンプを有する。中甕(301)は口唇部の内外にそれぞれ一条の段を有するもので、胎土、焼成共に良好である。器面の内外に2次加熱による火ハジと見られる剥離が多く目立つ。中甕(302)は口唇部内外の段は浅く、はっきりしない。これも2次加熱による火ハジが多く、剥離が特に目立つ。肩から胴部にかけて厚く自然釉が見られる。壺(307)は口縁部を欠くが、胎土、焼成共に良好な資料である。器壁が1.0cmを超す、比較的厚手のズングリした器型の壺である。(305・308)は共に口縁部が肥厚するこね鉢で、口唇部に浅い沈線を有する。堅く焼き締まり、胎土は灰色を呈する。(306)は口縁部で直角に立ち上がる小型の鉢で、器壁は薄く仕上げられる。挿図6に示した資料は漆を含ませた布を貼付して、ヒビ割れの補修をしている例である。

**瀬戸・美濃焼** (309)は口径14cmを計る鉄軸の四耳壺で、胎土は灰色を呈し、緻密で安定している。釉調は良好で、天目釉がタツブリ施される。胴部以下を欠く。

**信楽焼** 壺(311)は口径約14cm、高約54cmを計る。口唇部



挿図6 越前焼 接合・補修例



を欠く。肩部と胴部は接合しないが器高はそう大きくズレないものと見られる。胎土は白色を呈し、堅く焼き締まる。胴部以下は器厚約 1.0cm でなだらかに絞られている。長石の噴き出しが多く、特に肩部に目立つ。

**石製品** (310) は矩形の盤で、復元長約 28cm、高 11cm を計る。器面は自然風化による荒れが進み、ザラザラしている。色調は黒ずんだ灰緑色を呈する。

**その他** 瓦質の風が片、青磁壺の底部片、白磁皿の薄片、焼土塊等が見られる。

### Ⅲ期遺構面・床土・表土等出土の遺物 (PL. 32~40, 第27~36図)

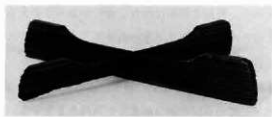
**越前焼** 小甕 (313) は胎土が暗灰色を呈し、堅く焼き締まっており、焼成も極めて良好な資料である。口縁部のみのため、全体の器型は不明である。口唇部から肩にかけて、タツリと釉が施され、光沢を遺す。(314~319) は中甕の口縁部破片で、(314) 以外は口縁部内外にハッキリした段を有する。頸部はくの字に折れ曲がり、肩部の張りはややかである。(317) は頸部は短く、肩の張りは殆ど見られない。むしろ大甕の器型Ⅲ~Ⅳ群に相似する。釉も殆ど見られず、色調は鉄分の噴き出しによって赤褐色を呈している。肩部にヘラ記号をもつ。大甕 (320) は「泉道・調査報告書」(1983) に言うⅢa群に属する。(321) はⅢb群に属する。肩部にH様のヘラ記号と陽刻の本、格子目のスタンプを有する。胎土は2例共、暗い灰色を呈し堅く焼き締まる。(322~334) はいずれもⅣ群に属する大甕である。(335) はトビ口を有する壺の口縁部破片で、胎土は暗い灰色を呈する。堅く焼き締まり、焼成良好、釉には光沢が遺る。(336~342) は玉縁状口縁の甕である。(340~342) は口縁部外側に浅い沈線を描き、有段としているもので頸部はくの字に強く折れ曲がる。器壁はいずれも 1.0cm 内外に取まる。(344~347) はそれらの底部と考えられる破片である。(343) は器壁内面に朱(若しくはベンガラ)の痕跡を遺す底部破片である。おはぐら壺の転用例かとも考えられる。2次加熱による火ハジがひどく、器面はアコボコしている。(345) は底部に+のヘラ記号を有する丸壺の破片である。胎土は黒灰色で緻密、極めて堅く焼き締まる。同様に(346)の場合も堅く焼き締められている。器壁内面には粘土の接合痕が顕著に残されており、表面調整には丁寧な縦方向のヘラミガキが加えられる。類例は29次調査区出土のものにも見られ(「概観 X」1979)、筒型の懸け花生と見られる。(348) は信楽の壺の口縁部破片である。同一個体と見られる細片が数点採集されている。

鉢は溜鉢に比べて、器型にバラツキがある。溜鉢とはほぼ同じ器型に成形し、溜鉢を省略しただけのものもあれば(349・357~362)、内湾する浅い小型のもの(351)や、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの(354)、口縁部に蓋受け様の段を有するもの(356)、更には、高台のつくもの(350)等々さまざまである。その分だけ広い用途があったことを意味しているものと思われる。しかし、出土点数の絶対量からすれば、やはり溜鉢のほうが多い。(357~362) はこね鉢、(354) は火桶と見られる。

(363) は列皿。(365) は「泉道・調査報告書」のⅡ群に属する溜鉢である。出土例は少ない。(364・366~388) はⅢ群、(389) 以下はⅣ群の概念に含まれるものである。必ずしも全点について分類しているわけではないが、図版資料からの、溜鉢の器型分類からすると大略Ⅲ群のものが中心となっている。これはやはり大甕の場合にも該当する出土傾向と言え、一乗谷の一つの特徴ともなっている。胎土・焼成はⅣ群の資料に堅く焼き締まり、比重の大きいものが多い傾向にある。Ⅲ群はⅣ群に比較して胎土が甘く、焼成も良くない。色調は明るい褐色若しくは肌色を呈し、脆い。裾日はⅢ群では9をいし10本に集中するが、Ⅳ群になると10~12本に増える傾向をもつ。

**土師質土器** 土師質土器には灯明皿、坏、盛皿、灯芯押え、土釜等がある。(394) は丸皿である。

(395)は『朝倉館・調査報告書Ⅰ』(1976)に分類されるB類に属し、手すくねによる成形のみでナデ調整は行われない。(396)は俗に言う「へそ皿」でA類に属する。比較的薄手の作りで底部の押さえ(突きこぶ)も弱い。(397~409)はC類に分類される。口径の大小によって更に細かく分類が可能である。



挿図7 灯明皿受け台

(400)の底部裏面には十様の煤痕が見られる。これは第44次調査区でも出土例のある灯明皿受け台(挿図7)の検尖によって生じた煤痕かと考えられる。(410~416)はD類に分類される。やはり、口径の大小によって細分類が可能である。このうち(414~416)の皿は3点ともビット SK339に近い灰色土からの一括資料である。口径約17.5cmを計る比較的口径の広い皿でD<sub>2</sub>類に属する。これらの資料はいずれも灯芯痕が見られず、灯明皿の使用の可能性は低い。盛り皿のような、別の用途を考えるのが妥当であろう。(417~419)はE類の皿である。成形、器面調整共にA~D類とは明らかな技法の違いが見られ、『朝倉館・調査報告書Ⅰ』で既に指摘されているように、時期的に見て新しい資料である。(418)には白粘土の化雑がけが見られる。

(420~422)は土釜である。(420)は小振りの土釜で推定復元径約5.2cmを計る。羽部の裏側に煤が付着している。(423)は灯芯押えと考えられる資料である。但、他の類例から見れば灯明皿の破片を打ち欠いて穿孔しただけの粗末な作りものが多い中で、この資料は丁寧な作りで研磨された比較的大振りのものである。表裏に煤・タール痕跡が認められる。

(425~426)は瓦質の風炉の破片と見られる資料である。(424)は器型は不明ながら、瓦質製品の破片資料で表面に朱漆が塗布されている。

**鉄軸** (427~433)は鉄軸の碗である。口径はいずれも11cm内外に集中する。釉調は灰褐色に近い柿渋色のものから給釉のものまでそれぞれバラツキがあり、一定していない。胎土にもバラツキがあり、灰色を呈して比較的密度の高い安定したものと、明るい肌色若しくは灰黄色を呈して、比較的密度の粗いボソボソしたものに分かれる。後者の胎土は灰軸のものにも見られ、いわゆる美濃のモグサ土と考えられる。(431)の碗がそれに該当しよう。口縁部の屈曲は弱く、なだらかに胴部に続く。(427~429)は前者の碗に該当しよう。このうち(429)は口縁部の屈曲がはっきりした碗である。(433)は口縁部に屈曲を持たないもので、釉調も黒緑色を呈し他の碗と区別される。(427~428・430・431)は高台以下にサビ釉が施される。(435)は高台の削り出しに伴う腰部の段が見られない例である。『江馬氏城館跡発掘調査概報』(1979)等で指摘されているように、少量ながら、一乗谷にも見られる。胎土は白色に近く、釉調は黒褐色で少しザラつく。高台部は露胎で内側のえぐりは浅く、輪高台風となっている。

(445~448)は鉄軸の壺である。(446)は表裏共厚く釉がかかっており、発色も良好である。胎土は密で安定している。(448)は竹管様の施文具による幾何学文が沈線で描かれるもので、器型は胴部径19cmを計り、大振りの壺もしくは鉢と見られる。粘土貼付による脚が付く。器面調整は粗く、ヘラ削り紙を残す。

**灰軸** (436~444)は灰軸で、このうち(436~438)は碗である。(436)は口縁部破片で原標連文が見られる。(437~438)は底部破片で腰部は丸みを持たず、直線的に開く。軸は高台裏まで施される絶掛けの平碗である。胎土はいずれも甘く、明るい肌色を呈する。(439~440)は香炉の破片である。(441)は小皿で見込みにカタバミのスタンプ文が見られる。(442)は脚皿。(443~444)は壺の底部破片。

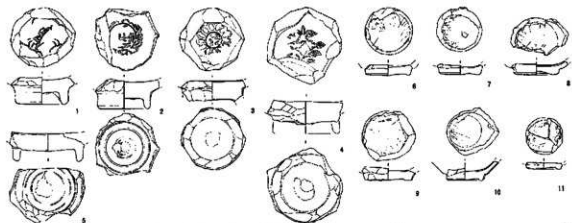


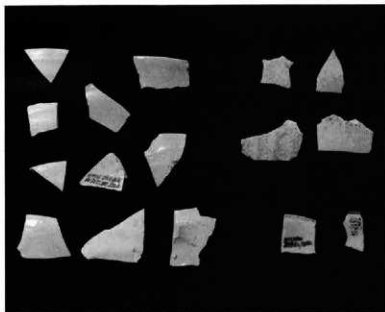
図8 天目茶碗・青磁碗底部片（海製円盤）実測図

**青磁** (449)は裏面が無釉の小皿である。推定復元径9.5cmを計る。透明な灰緑色の釉が全体に薄く施される。(450・451)は茶荷底を呈する皿で、器型には平口縁と輪花型の2タイプがある。(452)は断面に漆による補修痕が見られる皿である。(455~462)は碗で、(455~457・459・460)はいずれも線描蓮弁文碗である。(458)は内面が染付による界線、外面が青磁釉の碗で類似は少ないが、一栗谷の各調査区で出土する。釉調は気泡が多く見られ、透明な緑色を呈する。(461)はへら彫りによる蓮蓮弁文碗で、釉調は深い緑色を呈する。内面見込みに段を有する。(462)は濁った灰黄緑色を呈する碗で、高台皿付から裏面にかけては露胎部となる。外面はへら彫りによる蓮蓮弁文が描かれる。(461・462)はいずれも龍泉窯系の製品である。(464)は蓮蓮弁文をもつ、推定復元径約9.0cmの小壺である。(465)は人振りの壺破片を一括したものである。

挿図8に示した資料は青磁碗底部を打ち欠き、2次的に使用したもので、関連する資料については他の中世遺跡でも度々指摘、報告されているものである。一栗谷のものについては『県道・調査報告書』(1983)の第31次調査出土資料等で紹介しているところである。[産産陶器の鉄釉・灰釉碗にも同様な資料が数点見られるので併せて紹介する。1は見込みにへら描きによる草花文が見られる碗底部破片で、高台から底部裏面にかけてほぼ全面に釉が施され、高台内中央に小さく輪状に露胎部を残す。高台皿付部分とその内側に輪上銀痕を残す。釉調は透明な深緑色を呈し、粒溜まりがある。高台部だけを残すように体部をすべて打ち欠いている。摩耗痕は見られない。2は見込みに吉祥句と花文のスタンプ文が見られる。釉は高台内部が掻き取られる。釉調はやや黄味かった緑色を呈し、透明である。打ち欠きは1と同様である。割れ面に摩耗痕が見られる。3は体部及び高台部をも打ち欠いて円盤状としたものである。高台内を釉の掻き取りとし、全面に施釉する青磁碗であるが胎上は不安定で、肌色を呈してボソボソしている。摩耗痕はない。4も3と同様に高台までを打ち欠き、円盤状としたものである。碗資料としては比較的大振りのものである。これも摩耗痕は見られない。5は高台の一部を残して他を殆ど打ち欠いたもので、更に底部が半分に割れた状態となっている。割れ面の摩耗痕は認められない。6は鉄釉のもので、打ち欠いた部分に明らかな摩耗痕が認められる。割れ面に添って摩耗痕があり、高台部分や他の面には特に摩耗痕はない。7は高台部分に残る目跡で器体が安定しないためか、丁寧に畳付を砥石様のもので研磨しているものである。打ち欠いた部分には摩耗痕は認められない。8は半欠資料ながら、摩耗痕が認められる。9~11は摩耗痕は認められない。

**白磁** (466~470)は端反りの皿で、このうち(468)は定形で口径12.0cmを計る。保存度は極めて良好で光沢を遺す。高台は内傾し、逆三角形を呈する。高台皿付を残し、全面に施釉が見られる。高台周辺

に釉ちみが見られる。(471~473)は腰部に丸みを持たず、直線的に外反する皿である。しかし、釉調は前者の端反りの皿と異なり、くすんだ灰色を呈するものが多い。(474)は菊花型の皿である。(475・476)は底部を欠くが、腰部以下を露胎とする腰折れの小皿である。釉調は細かい貫入が見られるのが通有で、色調は透明な明るい青白色又は黄白色を呈する。後者の(476)は露胎部に墨が塗布された痕跡が見られる。



挿図9 白磁皿(鉢)一括資料

挿図9に示した資料はいずれも細片ながら時期的に見て一乗谷では古い白磁皿の一括資料である。aは(475・476)と同グループに属する一群で、割り高台風のものや、腰折れを呈せず、丸く内湾する皿も見られる。bは口縁部が露胎となる、いわゆる「口禿」口縁の一群である。第51次調査区のもった資料をはじめ(『概報XVII』1986)、いくつかの調査区でごく少量ながら出土しているものである。「中ノ御殿」跡調査区(『概報VI』1975)のように平碗もしくは鉢の器型をもち、内面にスタンプによる草花文を有するものも稀に見られる。第40次調査区(『概報XIII』1981)と併せて、これらは宋代定窯白磁に比定されている。更に、外面に銘文をもち、内面に線彫りによる草花文の暗文が描かれる皿型のものもある。器厚0.2cm足らずの薄いつくりで、釉調は緑がかかった白色を呈する。出土地点はいずれもが、耕土・床土や表採のもの、或はIII期に伴う整地層、遺構面からのもので層序関係を追うまでに至らない。

**染付** (477~481)は端反りの皿で、口径12cm内外のものと同口径15cmを越す大振りのものに分かれる。(477)は外面に宝相華唐草文、内面見込みに折れ菊文をもつ皿である。小野分類の皿B<sub>1</sub>群に属する。(478)も同様にB<sub>1</sub>群に属し、見込みに十字花文が描かれる。(479)は見込みに松竹梅文が描かれる皿で、内湾するE群の可能性もある。(480)は内外面共に無文で内面の口縁部に界線が一条見られるのみである。口唇部は鉄分の噴き出しにより褐色を呈する。(481)は見込みに玉取獅子文が描かれる。通常、この手の皿は口径12.0cm内外に収まる傾向をもつが、この玉取獅子文の皿は高台径が8.0cmで明らかに口径も上回るものと見られる。(482~484)は碗である。小野分類のD群に属する。内面見込みに丸幅が描かれる。断面に漆による補修痕が認められる。(483・484)は同じくD群に属する碗破片である。腰がやや張った状態で直線的に立ち上がる器型である。釉調は透明感がなく、くすんでいる。芭蕉文、梅月文が外面にそれぞれ描かれる。(485~488)は基筒底を呈する皿で外面にはいずれも芭蕉文が描かれる。C群に属する。(486)は見込みに無釉の粘土貼付による魚文をもつものである。釉調はややくすんだ灰色を呈し、コバルトも少し黒ずんだ青色を呈しており、他のものと区別される。(487)は内面が無文、見込みに大きく草花文が描かれる。高台部には砂目跡が多量に付着し、上かけの釉に溶け込んでいる。器体の安定のためか、疊付部分を丁寧に研磨して平滑にしている。(488)は内面に花鳥文が見られるもので、これも疊付部分を平滑に研磨している。

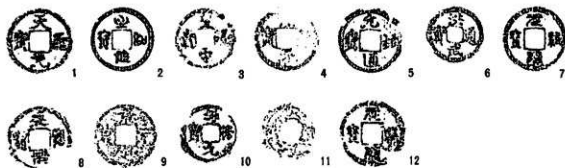
中国製天目茶碗 (490) は天目茶碗で、腰部以下を欠く。復元径約11.5cmを計る。口唇部は鋭く削られ、外傾する。胎上は灰色を呈し、通常、一乗谷の朝倉館跡等々で少量ながらも出土するものに比べると、やや甘い。しかし釉薬は安定し、口縁部が茶褐色、胴部が黒色で光沢を遺す。縦に筋状の釉流れが見られ、いわゆる木目天目と見られる。

朝鮮製陶磁器 (491) は体部を丁寧に打ち欠いて、底部のみを残す刷毛目茶碗の破片資料である。先に述べた2次活用用の陶製円盤と見られるが打ち欠き部分の摩耗痕は認められない。内面にはいわゆる白粘土による刷毛目(掻き目)状の条線が施される。見込みに4カ所の目跡が残る。胎土は赤褐色を呈し、砂分を含む。(492)は器面整形のヘラ削り痕を顕著に遺す茶碗で、内面に交線が一条横走する。見込みに砂目跡が4~5カ所付くものと見られる。釉ちみはあまり日立ない。胎上は灰白色で堅く焼き締まる。(493)は壺の口縁部破片である。胎土は緻密で黒灰色を呈す。(494)は復元径約29.4cm、高約12.0cmを計る鉢である。口縁部は厚く肥厚し、折り返し口縁となっている。色調は内面が黄白色、外面が褐色で2次加熱による火ハジが多く見られる。いわゆる焼き締め陶器で、胎土は緻密、チョコレート色を呈す。底部に焼き垂みが見られる。

金属製品 (495)は鉄製の罫り止めである。(497)は幅約0.6cmの扁平な鉄製金具で、鍵の破片と見られる。(501)は覆輪の破片と見られる。(498)は幅0.6cmの鉄製品である。向端部を欠損する。鋸かと考えられる。(499・500)は棒状の鉄製品でU字状に曲がっている。火箸の2次活用であろうか。(502~531)には大小の角釘を示した。これまでの一乗谷の調査では、第29次調査区井戸内出土のまとまった遺物が知られる(『概報X』1979)。そして、規格的に14、10、4cmにそれぞれ大きく取束するものと7、5.5、3cmにも取束する、2通りの傾向があるとの報告がある。この概数を基準に実測可能なもの30点を図示し、更に破損していない完製品16点を採り上げて見る。まず、頭部の形状については、巻き込んだものと扁平なものとの2通りがあるが、ここではほぼ全点が巻き込みのものであった。規格は幅0.3~0.4cmに取まるもの、0.5cm前後のもの、0.7cm以上のものがある。これに長さを比較すると、(505・509)を例外として、ほぼ比例しており、それぞれ3.3~4.6cm、4.7~6.2cm、8.5cmの範囲に取まる。腐食が進んでいたり、折れ曲がっていたりするものがあるので、数値上に多少の幅が認められるのは否めない。(532)は鉄鍋である。推定復元により、口径30.5cm、高15.5cmを計る。

挿図10には銅銭を示した。1は天監元宝、2・3は皇宋通宝、4は熙寧元宝、5・7は元祐通宝、6は洪武通宝で、8以下は鏽による腐食が激しく判読不能であった。

石製品 (533)は復元推定による口径39cmの楕円形盤である。底部はノミ痕を遺し、器面調整のハツリは行われぬ。脚が4カ所に付くものと考えられる。褐色を呈する。(534)は推定口径30.8cmの円形盤



挿図10 銅銭拓本図 S=4/5

である。火鉢として使用されたのか内外面共に荒れが激しく、ボロボロになっている。外面に縦方向のノミ工具による成形痕を遺す。くすんだ褐色を呈する。(535) も同じく円形盤である。底部裏面に成形痕を遺す。ノミ工具の幅は約2.2cmを計る。やはり、色調はくすんだ褐色を呈する。(536-538)は内外面に丁寧なミガキが施される、腰折れの手あぶり型の鉢である。(537)には楕円形の透かしが見られる。釉に黒漆が塗布されることがあるが、これらの資料にはその痕跡は見られない。色調は青緑色である。

(539)は口縁部が広く外方に開いたこね鉢である。外面に縦方向のノミ痕を遺す。内面はかなり使い込まれたらしく、摩耗してテラテラした感がある。(541)はD型バンドコの身部である。奥行きは約15.6cmを計る。半欠資料のため幅、高は不明である。色調は青緑色を呈する。(543)も同じD型のバンドコである。器面に煤痕があり、前方の窓付近に顕著である。色調は褐色を呈し、荒れがひどくザラザラしている。推定復元により、奥行き13.5cm、幅18.5cm、高12.4cmを計る。(540)はD型のバンドコの蓋部で半欠の資料である。表裏共に丁寧な器面調整が行われている。内面は煤を吸って黒斑が見られる。遺存度は良好で、さほどに器面の荒れはない。(542)は楕円形の小型の盤を2個並べた容器で、片方が欠損する。用途ははっきりしないが、線香立てとも考えられる。(544)は細身の砥石である。

**木製品** (545)は釣瓶桶の側板である。類例は第36次調査区に見られるが、ほぼ同型式の釣瓶桶である。最大幅25.0cm、高22.2cmを計る。

#### 注

- 1 播磨の分類については、第36次調査と第43次調査とは分類基準はほぼ同じであるが、付与した記号が異なる。ここでは第36次調査の分類を採用した。なお、本報告書は以下「県道・調査報告書」と略。
- 2 以下「硬倉館・調査報告書Ⅰ」と略。
- 3 越前産の産について、I類をA類にII類をB類にIII類をC類に、置き換えた。
- 4 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』1986によったが、小片が多いため1、2小期を初期とした。
- 5 田中照久氏（福井県陶芸館）の教示による。
- 6 群書類集に取められている「七十一番歌合」の念珠投の絵に、珠数に穴を開ける鎌の重石としてこの石のような物を使用しているように見える。
- 7 草戸千軒町遺跡では、土師質の土製円盤が多く出土しているが、一乗谷では土師質のものはほとんどない。これは時期的な差と考えられる。「菅正寺遺跡」（石川県立埋蔵文化財センター）でも200点出土したとの報告がある。一乗谷と比較すると、菅正寺遺跡の方が量的に多い。

## 4. 小 結

### a. 遺 構

前項において検出遺構について素挿し、この屋敷は、南北方向の幅約4.5mの道路に面し、間口は約45mで、西の山裾との間に在り、この西を除く東・南・北の3面に土塁を廻すものであること、そして、これらの遺構は、大きく、下層からI・II・III期に3分され、I期には、南の上塁SA 262は存在しないこと等を明らかにした。ここでは、これらの遺構から想定される屋敷の様子について若干の考察を加え、まとめたい。

#### 年代

この屋敷の成立年代を明らかにするものは現在のところ知られていない。しかし、この一乗谷の城下の終末は、朝倉氏滅亡の天正元年(1573)(朝倉氏滅亡後、織田氏の配下となった旧朝倉氏重臣前波氏が守護代として一乗谷に居を構えており、若干の復興が考えられるが、これも同3年に旧臣や一向一揆勢等に滅されておられ、ここでは、この朝倉氏滅亡時をもって、この遺跡の終りとしておく)である。道路や屋敷を計画的に配した町割を実施したのが何時であるのか明らかでないが、少なくとも、一乗谷初代孝景がここを越前支配の拠点としたといわれる文明3年(1471)以後と考えられ、道路や土塁等を造り終え、屋敷内を盛土し、造り直している点等から考え、これは短期間の変更と考えられず、一定期間の存続を想定すべきであって、この文明3年以後の比較的早い時期に、この町割の策定を考えるべきであろう。

#### 構成

まず、屋敷を区画する土塁とこの屋敷の規模をみておこう。この屋敷は、南北方向道路SS 260の西に位置し、この道路と西の山裾との間に拡がり、この山裾となる西を除く3方に土塁を廻すわけであるが、南の上塁SA 262を除き、I期からIII期まで存在する。また、南上塁SA 262は、II期に造られたもので、I期は、この約3m南に境界が存在したことが後の第54次調査で判明している。道路に面する東土塁SA 261は、大きな石が間隔を持って配されており、この石の高さやほぼ大端の残る北端等から高さは約5尺(1.5m)と考えられる。これは、もちろん屋敷を区画する塼等の基底部と考えられ、この上部には、土塼等が存在したと思われる、これらを合せた高さは、諸資料から考え、7尺(2.1m)程と考えられよう。幅は、6尺(1.8m)程とみられるが、屋敷内側には、明確な石垣を積んでいない。この土塁には、門SI 278が設けられている。これは、II・III期のものであって、I期については、明らかでないが、やはり、ここに存在したと考えられる。間口は約10尺(3m)であって、これは、この道路を隔てた東の屋敷の門SI 279と同じである。そして、ここには、もちろん門建物が存在したと思われる、薬門等が考えられよう。南北の土塁は、幅に若干の違いはあるものの、ほぼ、東土塁と同様であったと考えて良い。しかし、これらの土塁が、東土塁と直交せず、若干の振れをみせることは、いかなる理由によるのか明らかでない。これらの土塁で囲まれた屋敷は、間口約45m、奥行は若干の差はあるものの65~70m程であって、面積は、3,000㎡程と大きなものである。

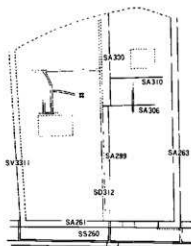
つぎに、これらの土塁で囲まれた屋敷内の様子を、各時期別にみってみることとする。

I期 この時には南境界となる土塁SA 262は存在せず、さらに3m南に境界があって、より大きな屋敷

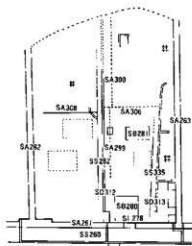
であったことはすでに述べた。この時期と次のII期の遺構面が比較的近いことなどから、必ずしも明確に区別出来ない点等もあって、不明な部分も多い。中央を東西に走る溝 SD 312 が基本となる遺構で、これによって南北に大きく2分されている。建物跡として規模等の明確なものも検出されていないが、南半中程に多数の掘立柱穴が検出されており、ここに中心となる建物が存在したのではなかろうか。また、南半には、この時期を除き、掘立柱を用いた建物は検出されておらず、礎石建物となる点との差がみられる。また、東北隅近くに暗渠 SZ 277 と石積施設 SF 361 が存在しており、このことからII期の溝 SD 313等に類したものの存在も想定される。このように、このI期は、屋敷の南境界が異なるという大きな相異点はあるものの、各所に何われる構成は、次のII期と比較的類似しているといえよう。

II期 全体の構成がほぼ知られる。屋敷の中央には東西方向の通路 SS 282 が設けられ、この通路の北が溝 SD 312 であって、この時にもこの溝は存在していたと思われる。そして、これらを通して集った水は、石積施設 SF 283 と暗渠 SZ 272 を通じて排水される。また、この通路の北には、東西の塀 SA 299・300等が、これらによって屋敷は南北に2分されている。南半には、礎石も点在しており、中程を中心に建物が存在したようであり、この西には、庭園の一部とも考えられる遺構 SD 320・SX 341 もみられる。これに対し、北半は、SA 306 等の南北の塀で区切られ、ここには、SU 281 等の掘立柱建物が存在し、土塁脇には3基の石積施設が配され、井戸も存在する。このように、北半には雑多な遺構が多い。なお、門 S1 278 が入った所に存在する建物 SB 280 については、性格等がはっきりせず、いかなる用途なのか不明であり、今後検討すべき課題の一つである。

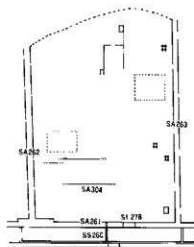
III期 最終期であって、井戸等を除き多くが削平されている。東半部は比較的良くしまった砂利敷面で覆われており、ここに角柱を用いた南北の塀 SA 304 が存在する。井戸は北半に3基検出されており、ま



I期



II期



III期

挿図11 遺構変遷略図



た SF 285等の石積施設も存在する。西寄中程に比較的大きな礎石建物 (SX 350) が存在したようである。先のⅡ期とは構成が異なるようであるが、全体の様子はあまり明らかでない。

#### まとめ

以上、この屋敷の概略をみた。最後に、これらを通して考えられる屋敷の性格等について述べ、まとめとする。

この地区は、「一乗谷古松園」や水田畦畔にみられる旧地割等から、大規模の屋敷が配され、これが重臣の屋敷と考えられてきた。そして、この第10・11次調査の対象となった屋敷は、これらの中でも最大級のものであった。第5代朝倉義景の住した朝倉館の中心となる平坦部は6,000㎡を超え、また濠を廻すものであるが、これは、例外であって、ここでみられたように、濠を持たず、土塁によって区画されるのが一般的と考えられる。そして、この館と川を隔てて相対するという中心部に位置している。また、検出された諸遺構から想定される屋敷の構成は、その内部を南北に2分し、南半は北半に比べ上質の空間を思わせ、朝倉館や当時の通例から考え、南前方を主人の生活や接客等の表向空間、北後方は、これを支える日常生活等の場としての内向空間と考えることが出来よう。こうした点を合せて考えるならば、この屋敷をこれまでの推定していた通り、重臣の屋敷と考えて良いものと思われる。なお、ここがいかなる理由をもって「新馬場」と称されるに至ったかは、不明といわざるを得ない。

#### b. 遺物

##### 出土陶磁器の組成と機能分担について

第10・11次調査で出土した陶磁器の総破片数は、11,793点で、その組成は、表(5)の通りである。すなわち、朝倉氏の領国である越前で生産された越前焼が1,747点で14.9%、灯明皿を主体とする土師質土器が8,996点で76.6%、これら双方で91.5%を占める。日本製の陶器では陶國の美濃もしくは瀬戸で焼

かれた天目茶碗を主体とする鉄釉製品が126点で1.1%、灰釉製品が123点で1.0%あり、これに畿内から運び込まれたと推定している極少量の瓦質土器と、破片数は90とやや多いが個体数は2～3点にとどまる信楽焼が加わる。日本製の陶器・土器は94.2%を占める。輸入陶磁器の大部分は中国製で664点出土し、全体の5.7%を占める。その内訳は、青磁225点で1.9%、白磁264点で2.2%、染付162点で1.4%である。このほか朝鮮製陶磁器が極少量出土している。

これら各種の生産地ごと

器種	土器			%	山土器			%			
	上層	下層	合計		上層	下層	合計				
越前焼	裏蓋	887	268	1,155	碗	4	39	80			
	茶碗	195	30	225	皿	53	13	66			
	漆鉢	193	99	292	香炉	1	1	2			
	鉢	44	21	65	鉢	12	8	20			
	他	5	5	10	他	55	2	57			
計	1,324	423	1,747	14.9%	計	162	63	225	1.9%		
土師質	皿	2,808	6,135	8,943	76.6%	碗	7	0	7		
	鉢	9	11	20		皿	237	20	257		
	土師	3	0	3		他	0	0	0		
	他	0	0	0		他	0	0	0		
	計	2,830	6,166	8,996		76.6%	計	244	20	264	2.2%
瓦質	鉄釉	76	26	102	1.1%	碗	53	14	67		
	灰釉	-	0	1		皿	74	21	95		
	他	18	5	23		他	0	0	0		
	計	95	31	126		1.1%	計	127	35	162	1.4%
	天目	24	24	48		中国	10	3	13	0.1%	
朝鮮製	青磁	23	12	35	0.3%	小計	543	121	664	5.7%	
	白磁	26	14	40		朝鮮	3	0	3		
	他	73	50	123		1.1%	他	2	0	2	
	計	14	6	20		0.2%	他	7	0	7	
	天目	82	87	269		2.3%	計	12	0	12	0.1%
瓦質	瓦	3	12	15	0.1%	合計	4,984	5,809	11,793	100%	
	他	90	0	90		0.8%	(上層はⅢ期、下層はⅠ・Ⅱ期である)				
	小計	4,429	6,688	11,117		94.7%					

表5 出土陶磁器一覽

調査してきた各地区の組成と基本的な差異はないが、土師質土器の割合がやや高く、同じ地元製品の越前焼の割合が少ない。瀬戸・美濃製品や輸入陶磁器である中国製品の割合もわずかに低いが、越前焼ほどではない。陶磁器を機能別に見てみると、貯蔵用はほとんど越前焼の罌・壺に限られ、特殊な貯蔵用として中国製の茶壺一榻壺と、これを日本で写した鉄釉壺が極少量出土する。調理用の播鉢も越前焼に限られている。瀬戸・美濃製品でも碗・皿は一乗谷に運び込まれているのに対して、瀬戸・美濃の播鉢は越前焼の播鉢があるため移入されていない。供膳用の碗皿類は、国産の瀬戸美濃製品が185点、船載の中国製品が572点あり、船載である中国製品と国産陶器との比は3:1で中国製品の方が多い。量的な変動は多少あるが、一乗谷とはほぼ同時期の全国の遺跡でもこの傾向は変わらない。碗と皿を比較すると、碗が342点、皿が304点でほぼ同数であるが、鉄釉碗のほとんどが喫茶用の天目茶碗なので、これを除くと食用としての碗の割合はかなり低くなる。出土点数を発掘面積で割った1㎡あたりの遺物点数は、4.5/㎡となり、これまでの一乗谷の調査のあり方(8~28/㎡)よりもかなり低い。この数値は、遺構の残存状況の他、調査地区の性格によって異なることが知られており、武家屋敷は低い数値が得られ、町屋地区(26/㎡~36㎡調査)は高い数値が得られる。これは、陶磁器が生活の基本に関わる器なので、単位面積あたりの屋敷数(世帯数)と関係すると考えられる。<sup>11)</sup>「新馬場」の場合、一般の武家屋敷としては最大クラスの面積なのに加えて、遺構の残存状況が良くなかったので、単位面積当りの出土遺物点数が少なかったであろう。

#### 遺物群の組合せについて

##### Ⅰ期出土の遺物

Ⅰ期については、壊れた石積施設 Sd288や屋敷中央の溝を除いては、しっかりとした遺構面を検出することはできなかった。しかし、遺物については、新旧二つのグループの遺物群を得ることが出来た。Ⅰ期の遺構群に伴う遺物群から述べる。越前焼製は、時期が推定できる口縁部の出土例が少ないが、Ⅳ群aがすでに出現していることは注目してよい。播鉢は、口縁部の沈線が消滅したⅢ群に属するものが

	Ⅲ期	Ⅱ期	Ⅰ期	合計		Ⅲ期	Ⅱ期	Ⅰ期	合計
大 罌 I	0	0	2	2	古天目茶碗	4	6	2	12
大 罌 II	0	1	2	3	天目茶碗	69	10	7	86
大 罌 III a	2	0	0	2	鉄 釉 皿	1	0	0	1
大 罌 III b	2	0	0	2	合 計	74	16	9	99
大 罌 IV a	4	2	2	8	灰 釉 碗	11	8	6	25
大 罌 IV b	4	2	0	6	灰釉平碗	13	6	4	23
大 罌 IV c	11	1	0	12	灰釉磨折皿	3	4	1	8
合 計	23	6	6	35	灰釉端反皿	18	3	4	25
播 鉢 I	0	(1)	(1)	(2)	灰 釉 壺 皿	1	0	0	1
播 鉢 II	8	0	1(1)	9(1)	白 瓷 系	14	1	5	20
播 鉢 III a	9	0	2	11	合 計	60	22	20	102
播 鉢 III b	17	11	2	30					
播 鉢 IV a	9	6	0	15					
播 鉢 IV b	4	1	0	5					
合 計	47	18(1)	5(2)	70(3)					

表7 瀬戸・美濃焼遺構面別出土一覧

表6 越前焼遺構面別出土一覧

	Ⅲ期	Ⅱ期	Ⅰ期	合計		Ⅲ期	Ⅱ期	Ⅰ期	合計
染付碗 B 群	2	1	1	4	青磁無文碗 a	0	1	4	5
染付碗 C 群	31	7	2	40	青磁無文碗 b	6	9	4	19
染付碗 D 群	7	2	0	9	青磁堙弁文碗 a	4	0	0	4
染付碗 E 群	13	1	0	14	青磁堙弁文碗 b	4	1	3	8
合計	53	11	3	67	青磁堙弁文碗 c	27	12	0	39
染付皿 B 群	29	16	3	48	青磁甞文碗	0	0	0	0
染付皿 C 群	40	0	2	42	青磁後花皿	13	10	18	41
染付皿 E 群	5	0	0	5	青磁紫皿	10	0	0	10
合計	74	16	5	95	青磁輪花皿	19	0	2	21
					合計	83	33	31	147
					白磁碗	7	0	0	7
					白磁皿 B 群	10	1	0	11
					白磁皿 C 群	190	9	6	205
					白磁茶筒皿	8	0	0	8
					白磁菊皿	39	4	0	43
					合計	244	14	6	274

表 8 染付遺構面別出土一覧

多い。土師質皿は B 類、C 類、D 類等が出土しているが各期間の量的な関係に付いては把握しきれなかった。天目茶碗は丈が高く全体に丸味があり口縁下のくびれの少ないタイプと全体に直線的になりつつあるタイプとが出土している。灰粒皿は、

表 9 青磁・白磁遺構面別出土一覧(注 7)

出土例が少ないが、これも腰部で強く屈曲して外反するタイプと付け高台で強反りの小皿とがある。

第18図で示したように古い一群の遺物を得ることが出来た。すなわち、越前焼では I、II 群に属する甕(1-5)や I 群に属する搦鉢(8-11)であり、瀬戸・美濃焼では白瓷系の碗(21, 22)、鉢皿(25, 26)である。越前焼甕については II 群の甕の口縁が、寛元 4 年(1306)銘や元享 3 年(1321)銘のある甕の口縁と類似することから 14 世紀前半を中心とする時期が想定され、搦鉢についても片口と付け高台を有するが、13 世紀後半に想定している水上窯出土の搦鉢より高台が退化しており時期的には少し下るところから、これらの搦鉢も 14 世紀前半を中心とする遺物群と考えて大過なからう。白瓷系碗については、退化した付け高台から「白瓷系 V」に相当し、その暦年代は 14 世紀中葉が想定されている。以上のように、これらの遺物はいずれも 14 世紀前半から 14 世紀中頃の時期を示している。

これまでの一乗谷に於ける発掘調査では、越前焼については I 群に属する甕が各地でわずかに出土しているだけで、I 群の搦鉢や白瓷系の碗などは「新馬場」を中心とする字平井地係以外では出土していない。14 世紀前半代の遺物の量は少ないのは、I 期の層まで掘り下げたのは 450m<sup>2</sup>に満たず面積的にも狭く、I 期の層そのものが基本的には一乗谷の町割が造られた最初の時期に相当すると考えられ、調査が 14 世紀の層まで及んでいない。

これらの遺物群とよく似た組成を示す遺跡に柚山城跡がある。昭和 52 年柚山城の麓にある「伝徳和宮跡」の発掘調査で I 群の甕、I 群の搦鉢のほか白瓷系の碗・皿、腰部が隆起した天目茶碗、灰粒の平茶碗などが出土している。ここではこれらの遺物に伴う土師質皿も出土しているが、一乗谷の「10・11 次調査」では土師質皿は確認していない。豊原寺奉藏院跡の調査でも下層からこれらに相当する遺物群が認められる。

#### II 期の遺物

基本的には I 期の新しい時期の遺物群と変わらない。越前焼では、III 群 b・IV 群 a の甕、III 群の搦鉢が主体となっているが IV 群 a の甕が確実に II 期の遺構 SD 320 から出土している点については注目され

る。土師質皿類はc類・d類を主体に各種類が出土している。土師質皿については、細片が多く各種類の量的な関係については分析できなかったが、Ⅱ期・Ⅲ期とも共通した種類が出土している。天目茶碗では、全体に丸みを帯び口縁下があまりくびれないタイプの天目茶碗が目立ち、灰軸皿は、腰部で深く屈曲し大きく外反し、削り出し高台で腰部から下が露胎のタイプと全面に施釉され端反りで付け高台のタイプとがあるが、前者は、量的にきわめて少ない。青磁皿では、厚手のいわゆる椀花皿が主で、器壁の薄い輪花皿や菊皿は認められない。白磁皿は、端反りのC群が主体を占める中に少量のB群が混じる。染付では、碗・皿ともにB・C群で構成されており、新しいタイプとされるE群は出土していない。なおB群の碗とみられる小片も出土している。B群の碗については、過去の一乗谷の調査を振り返ってみると極小數ながら各調査地区で出土している。

### Ⅲ期の遺物

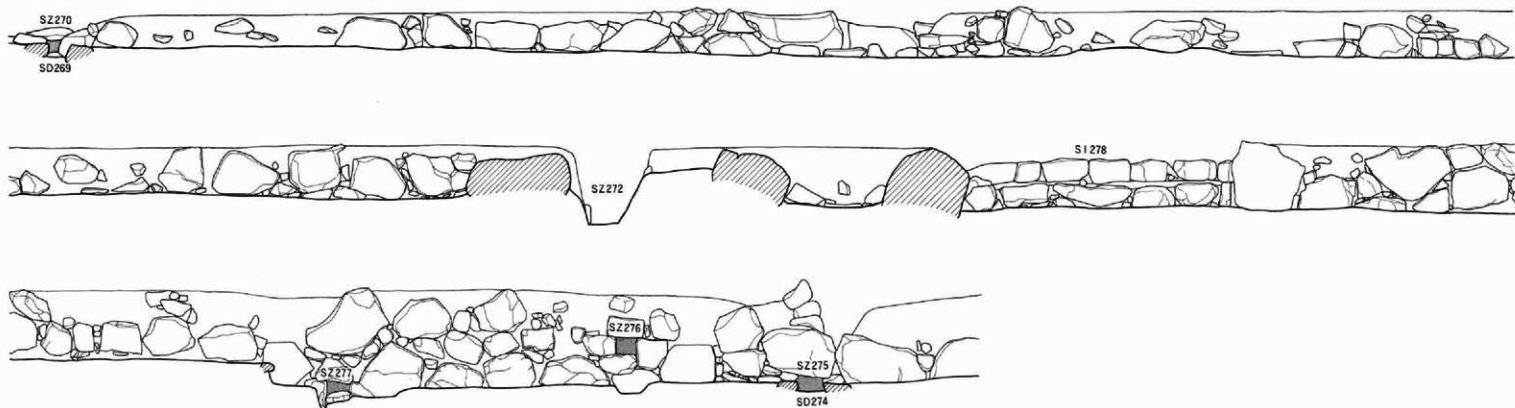
この時期の遺構面から出土した遺物は多量でかつ多様である。

越前発達は、Ⅰ～Ⅳ群まで各種類が混在しているが、主体をなすのはⅣ群b、Ⅳ群cである。摺鉢も摺目がつまり、沈線か段が口縁の直下に巡るⅣ群が主体を占める。天目茶碗は、丈が高く全体に丸味があり、口縁部のくびれの少ない大窯初期のタイプから、より直線的で口縁部のくびれが顕著な新しいタイプに比重が移って来る。灰軸皿は付け高台で端反りの皿が主体になり、さらに同じく付け高台で内湾する皿が混じる。青磁碗は、あまり変化がないが、皿はⅠ期・Ⅱ期ではなかった菊皿や輪花皿が現れた。白磁も端反り皿が主体になり、菊皿も多数見られる。染付碗については、量的に少ないこともあって、古いタイプとされるC群・D群の量は余り変化がないが、新しいタイプであるE群が高い割合を占めるようになる。染付皿もほぼ同じ様な傾向を示すが、古いB群C群が多く残り新しいE群の割合が低い。

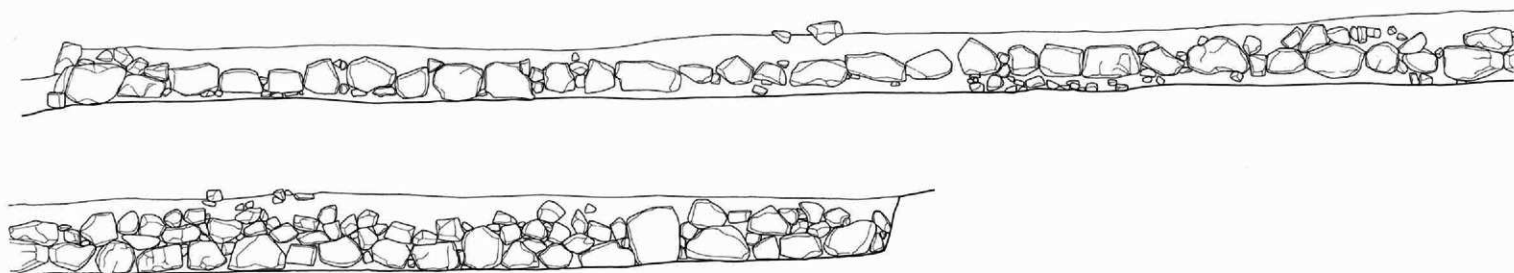
### 注

- 1 小野正敏「第4回貿易陶磁研究集會」その成果と課題 貿易陶磁研究No.4 1984
- 2 福井県立朝倉氏遺跡資料館「原通船江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」1983
- 3 水野九右衛門他「水上古窯址群発掘調査報告書」1980 宮崎村教育委員会
- 4 機崎彰一・美濃古窯研究会「美濃の古陶」編年表（井上喜久男作製）1976
- 5 小野正敏、吉岡泰英「史跡横山城Ⅱ」1972 南条町教育委員会
- 6 小野正敏、吉岡泰英「豊原寺Ⅱ」1981 九岡町教育委員会
- 7 青磁無文碗 a は端反り碗、b は内湾碗、青磁蓮弁文碗 a は隣蓮弁文・巾広蓮弁文、b はへう刺蓮弁文、c は横線蓮弁文である。

第1图 石垣立面图(1)



土壘 SA261 東面石垣立面图



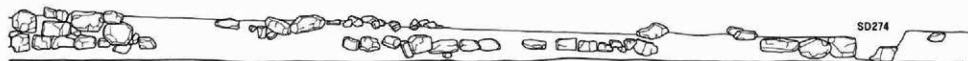
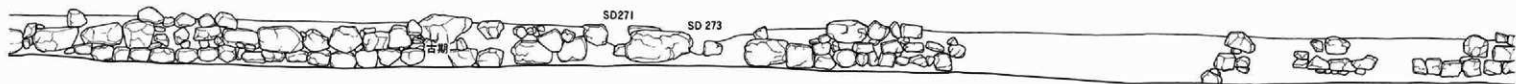
土壘 SA262 北面石垣立面图(西半)



第2圖 石垣立面圖(2)



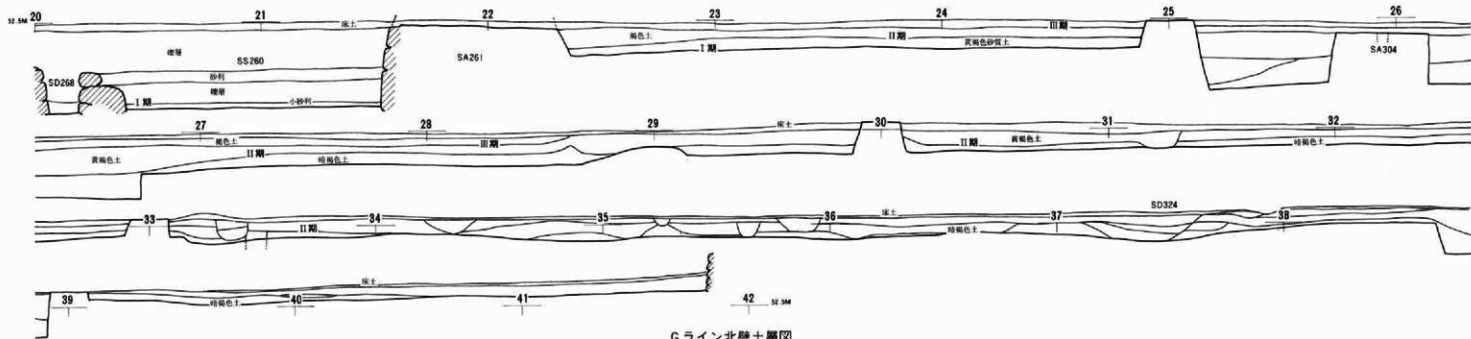
土塁 SA263 南面石垣立面圖



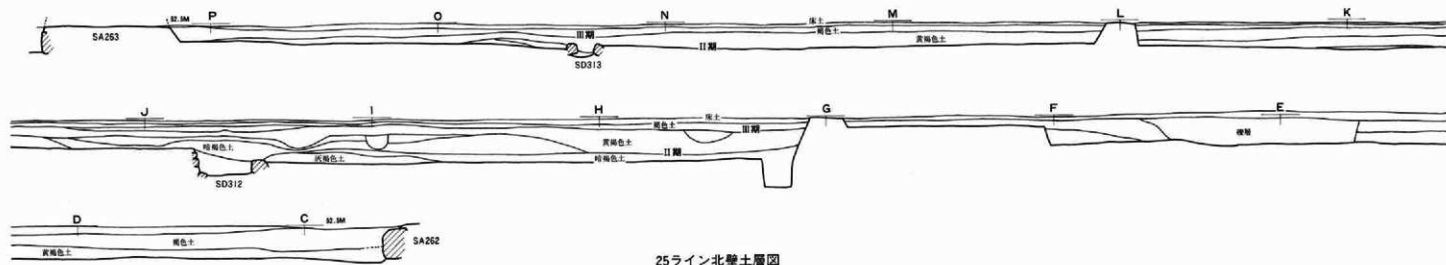
道路側溝 SD268 西側立面圖



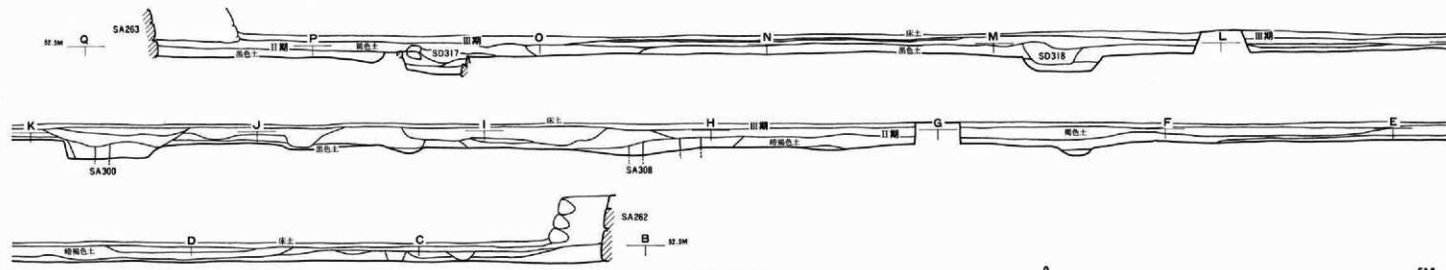
第3図土層図



Gライン北壁土層図



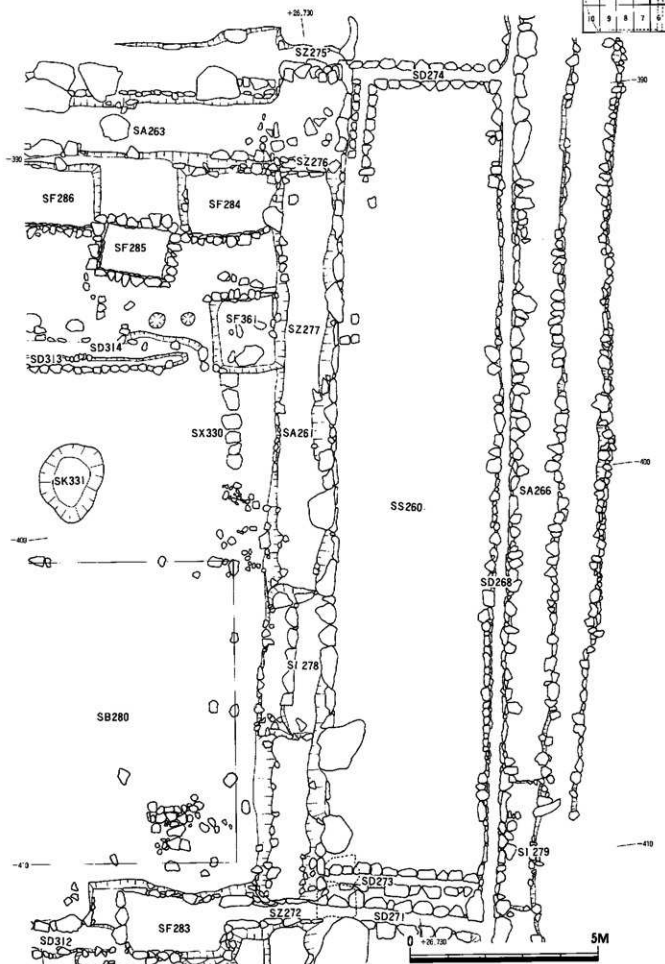
25ライン北壁土層図



33ライン北壁土層図

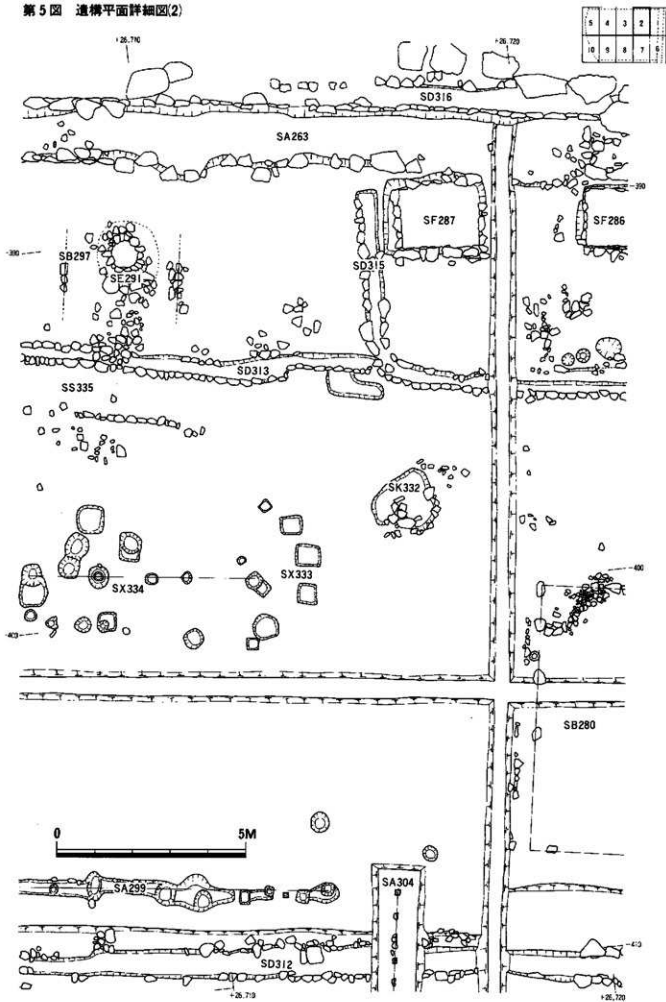


第4圖 遺構平面詳細図(1)





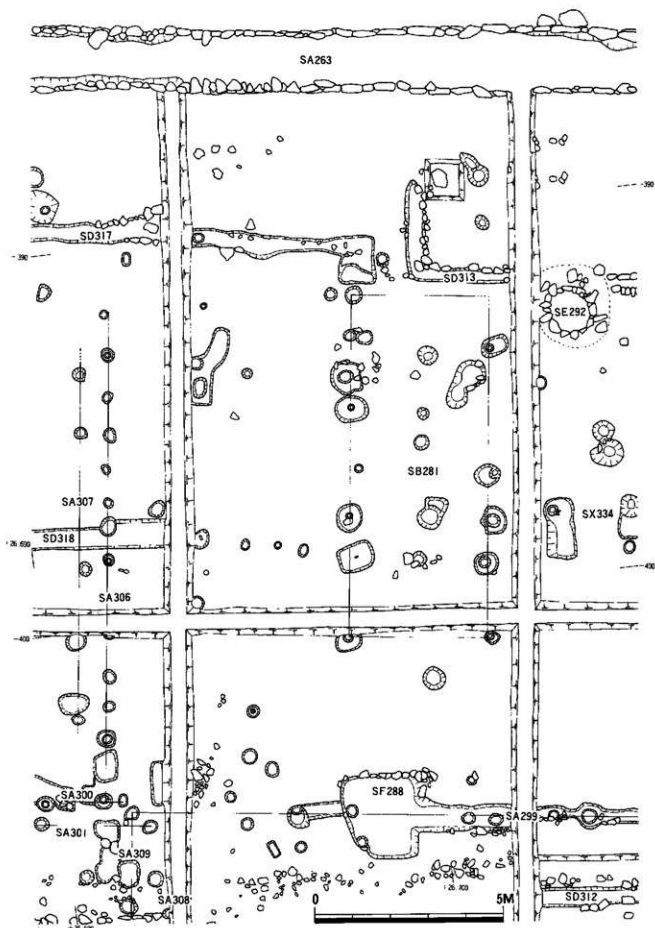
第5圖 遺構平面詳細圖(2)



第6図 遺構平面詳細図(3)

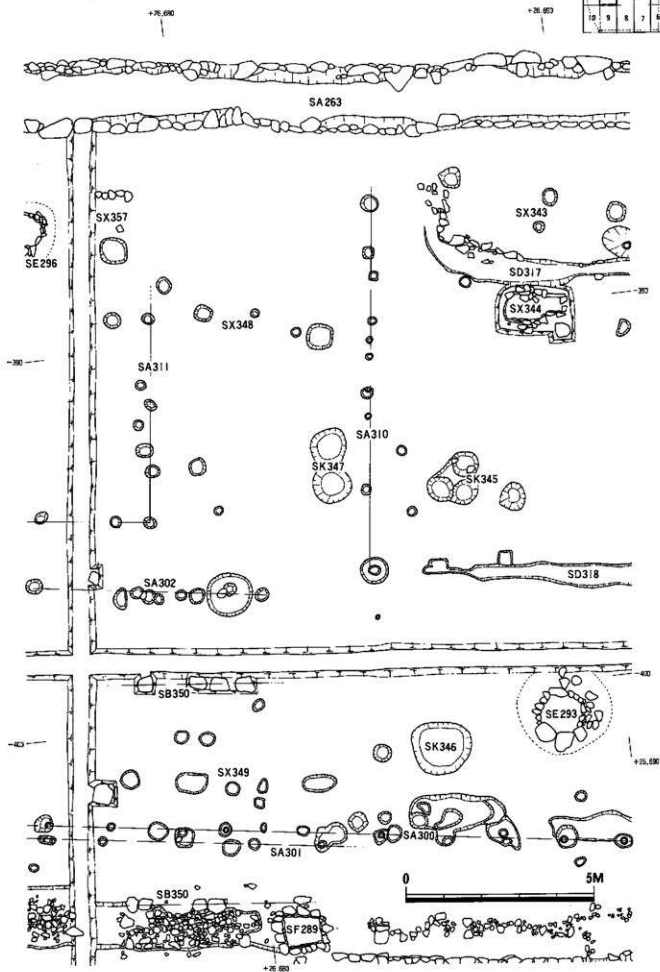
5	4	3	2
10	9	8	7

+26.70



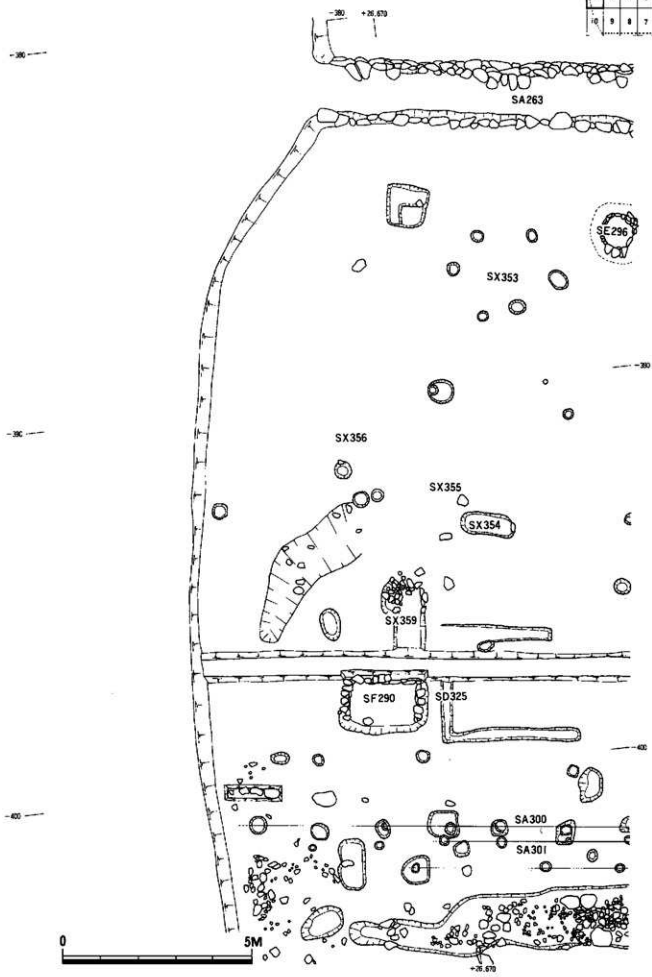
第7図 遺構平面詳細図(4)

5	4	3	2	1
10	9	8	7	6



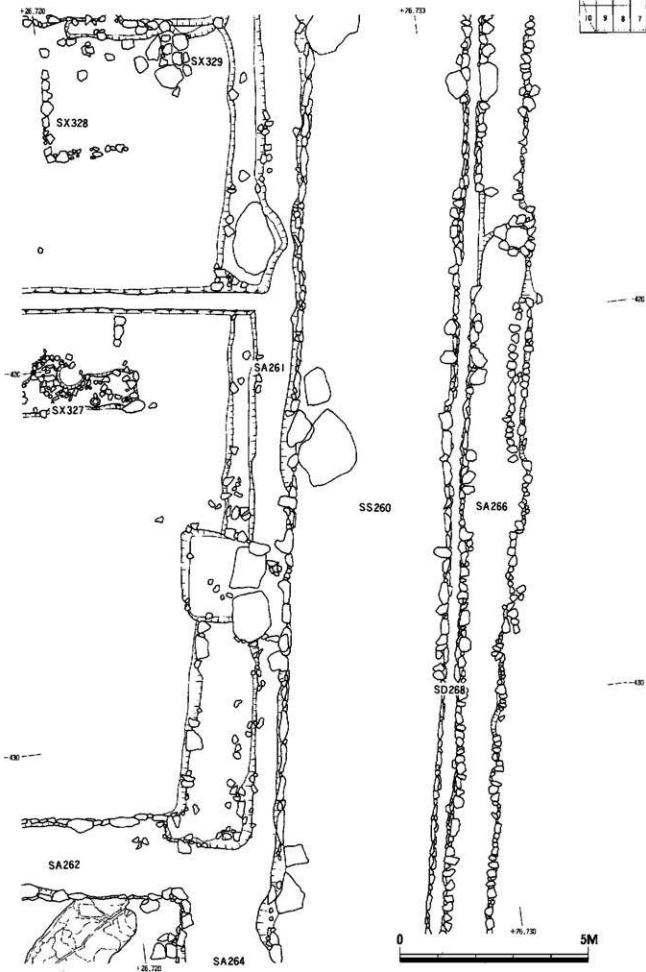
第8図 遺構平面詳細図(5)

5	4	3	2	1
10	9	8	7	6



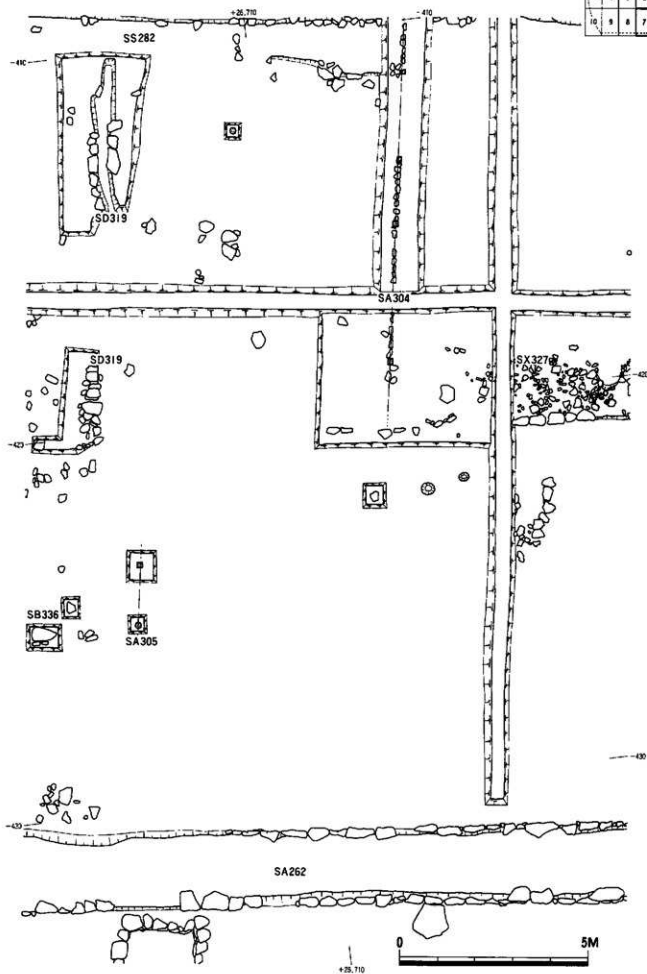
第9圖 遺構平面詳細圖(6)

5	4	3	2
10	9	8	7



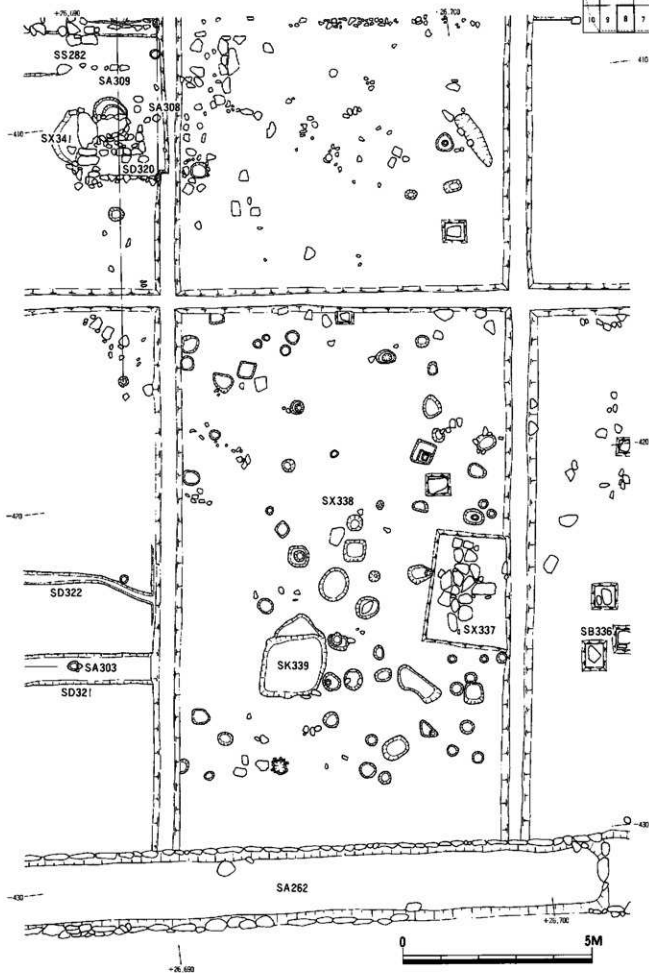
第10圖 遺構平面詳細圖(7)

5	4	3	2
10	9	8	7



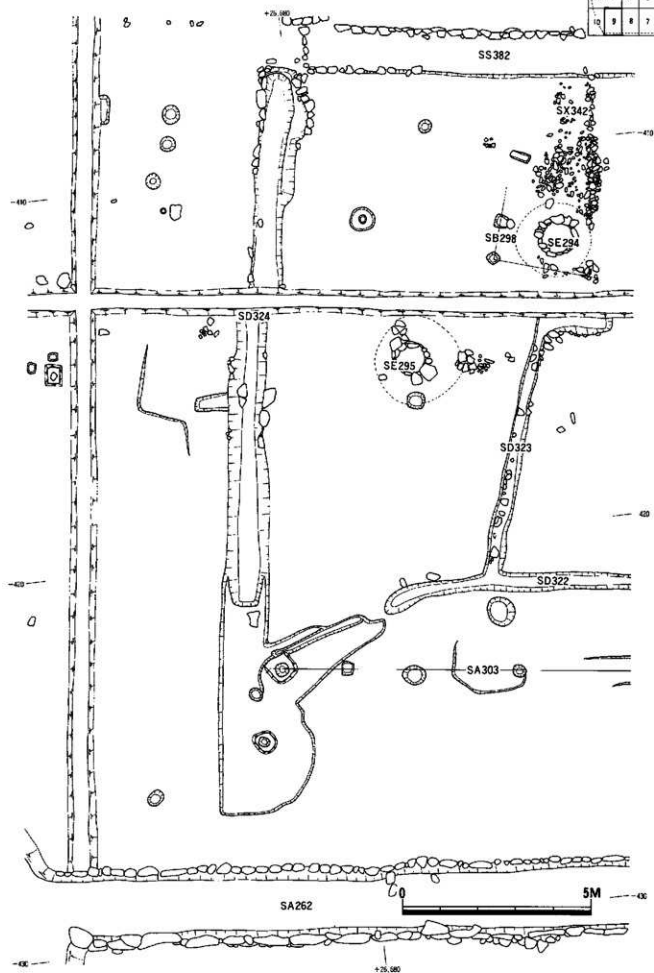
第11圖 遺構平面詳細圖(8)

5	4	3	2
10	9	8	7



第12圖 遺構平面詳細圖(9)

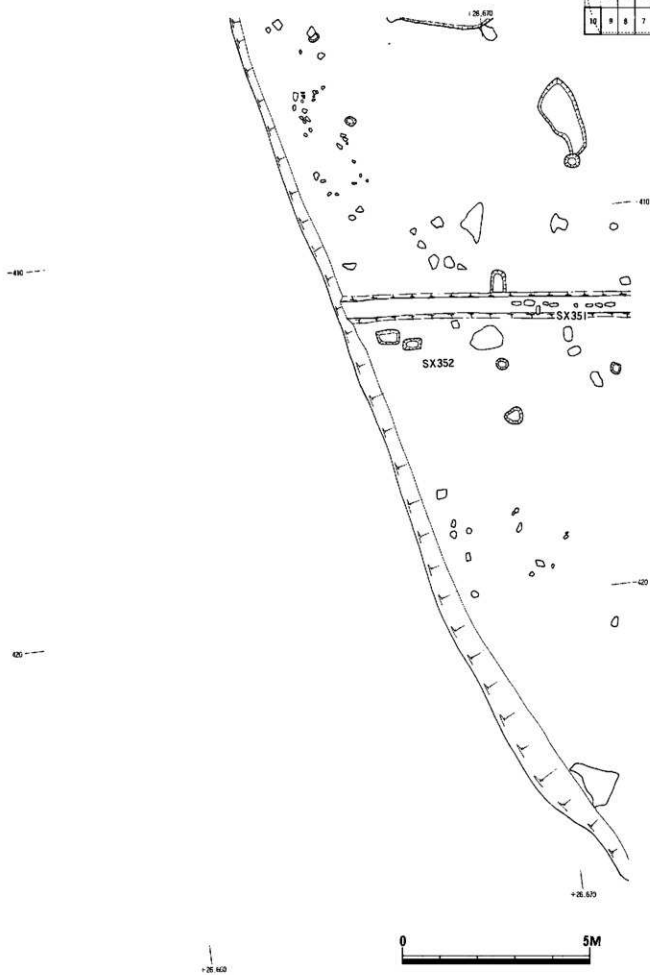
5	4	3	2	
10	9	8	7	6



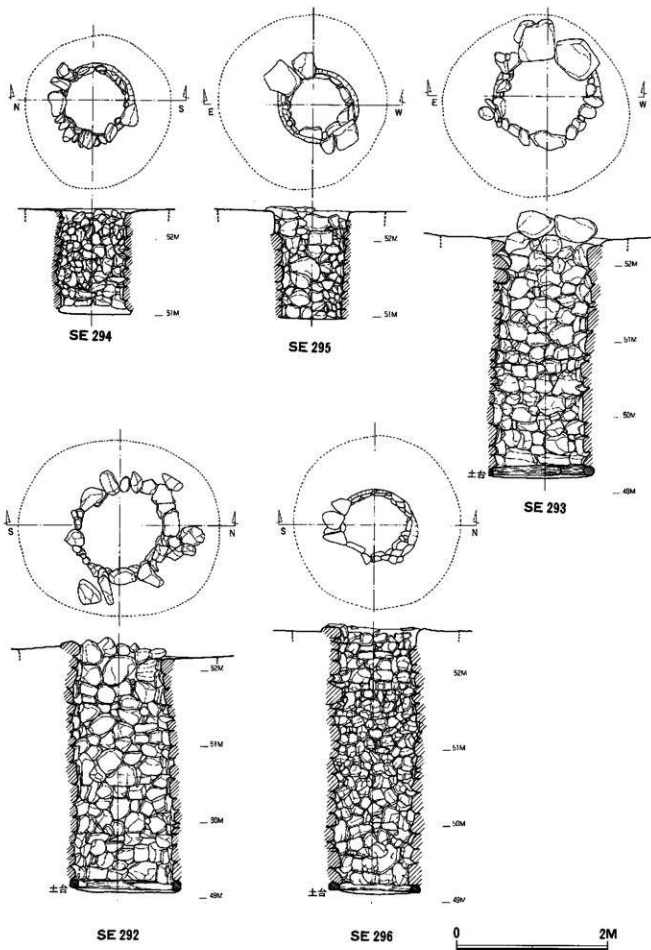


第13区 遺構平面詳細図①

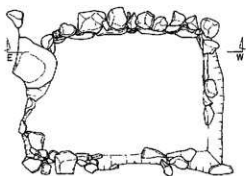
5	4	3	2
10	9	8	7



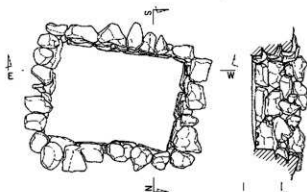
第14図 井戸詳細図



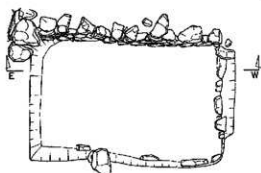
第15図 石積施設詳細図



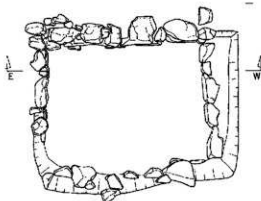
SF 284



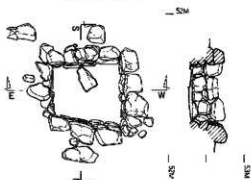
SF 285



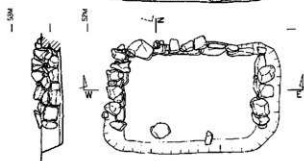
SF 286



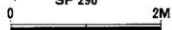
SF 287



SF 289

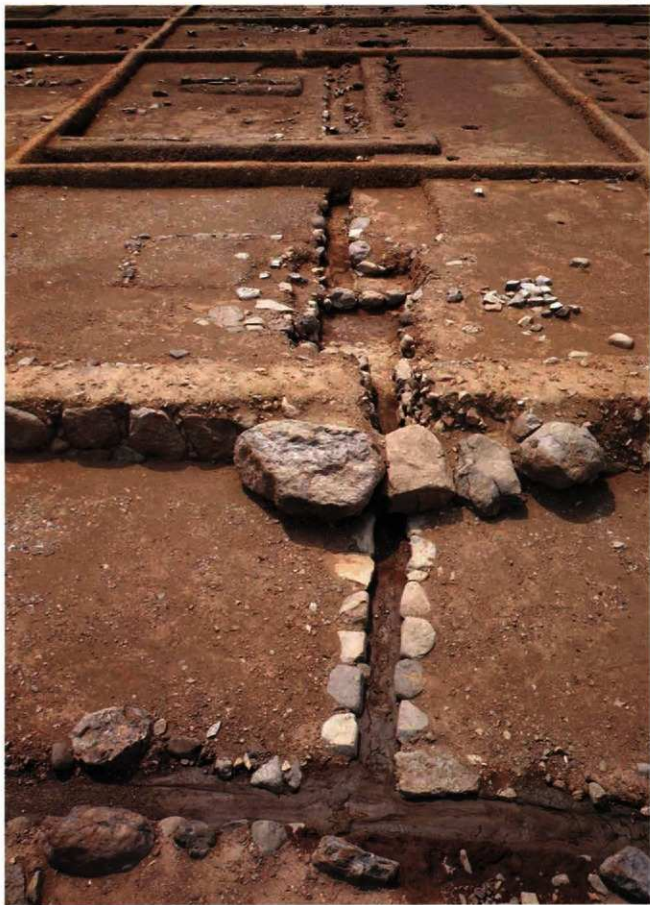


SF 290





道路SS 260と土塁 SA 261 (南から)



中央排水路 (SD312, SF263, SZ272, SD271) (東から)



10・11次調査区

54次調査区

野倉



(東から)



(南東から)



(南から)

道路SS260と  
土塁SA261

PL. 3



SS260 SA261  
SD268  
(南から)



同上  
(北東から)



SA261  
東面石垣  
(北端部)

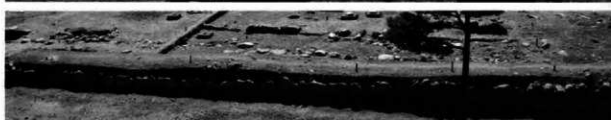




全景  
(東から)



東半部  
(西から)



北圍石垣  
(西半部)



東半部  
(東から)



南面石垣  
(中央部)



北面石垣  
(東端部)

側溝SD268他と  
門SI 278



◀ SD268中央部  
(南から)

▶ SD271・273  
(東から)



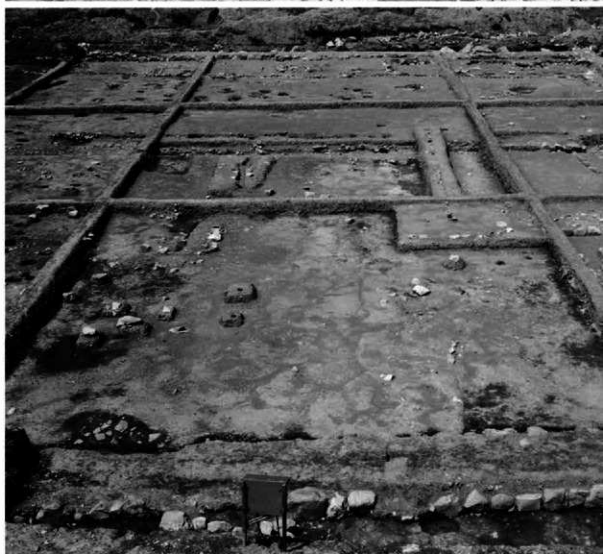
SD274  
(東から)



SI 278  
(東から)



東端部  
(南から)



中央部  
(南から)



中央寄  
(南から)



西端部  
(南から)



SB280  
(北から)



SB281  
(西から)



掘立柱群  
SX338他  
(北から)



SS 282  
(東から)



SS 335  
SD 313  
(東から)

SA299・SD312 (西から)



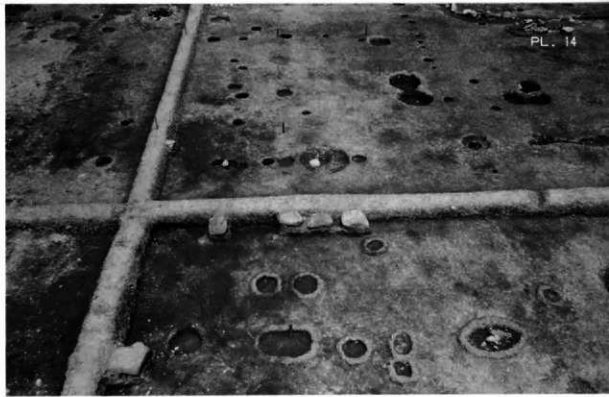
SA300・301 (西から)





堀 (2)

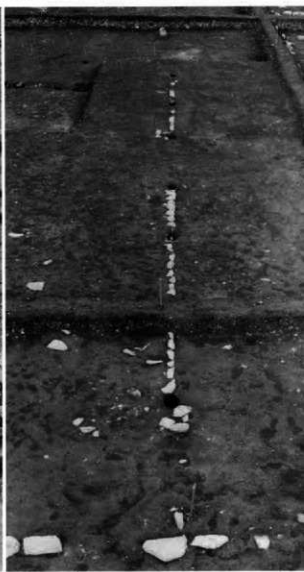
PL. 14



SA 310・311  
(南から)



◀ SA 306・307  
(南から)  
▶ SA 304  
(南から)



▶ SA 304  
(東から)







SD313・317  
(西から)



SD322~324  
(南から)

踏 遺 構



◀SZ272・SF283  
(西から)  
▶SF361・SZ276  
(西から)



SD320  
SX341  
(西から)



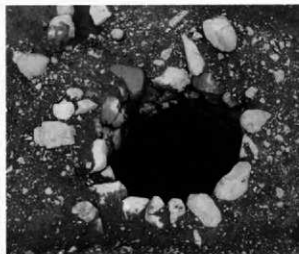
◀SD319  
(北から)  
▶SX344  
(東から)



SE291と  
井戸屋形SB297  
(東から)



◀ SE291  
(南から)  
▶ SE292  
(西から)



◀ SE293  
(北から)  
▶ SE294  
(南から)



◀ SE295  
(北から)  
▶ SE296  
(西から)



石積施設



屋敷北東隅部  
SF 284~286  
(北から)



◀ SF 284  
(北から)  
▶ SF 285  
(北から)



◀ SF 286  
(北から)  
▶ SF 287  
(北から)

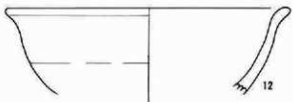
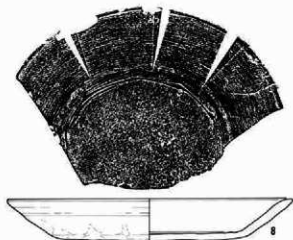
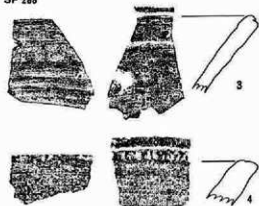


◀ SF 289  
(南から)  
▶ SF 290  
(南から)

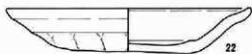
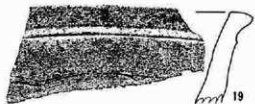
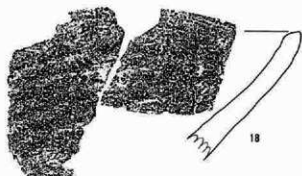
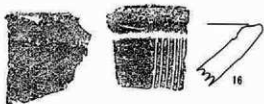


第16図 第10・11次調査・遺物1)

SF 288

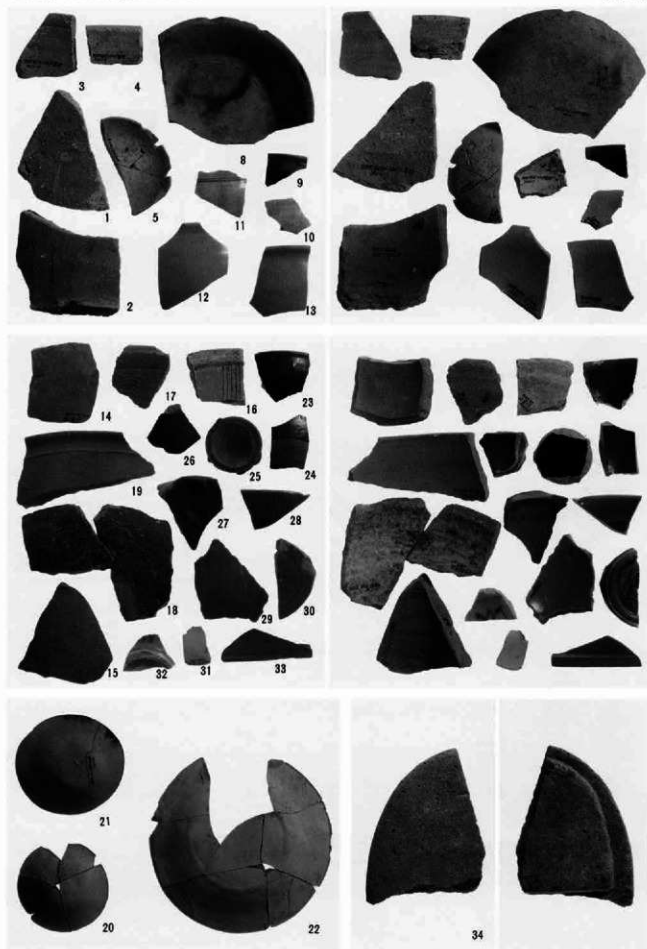


SD 266 下層



0 10cm

越前焼鉢3-4 土師質皿5-8 青磁碗12 越前焼椀鉢16 鉢17-18 火桶19 土師質皿20-22  
鉄軸碗23 瓦質土器香炉26-27 青磁碗29 皿30

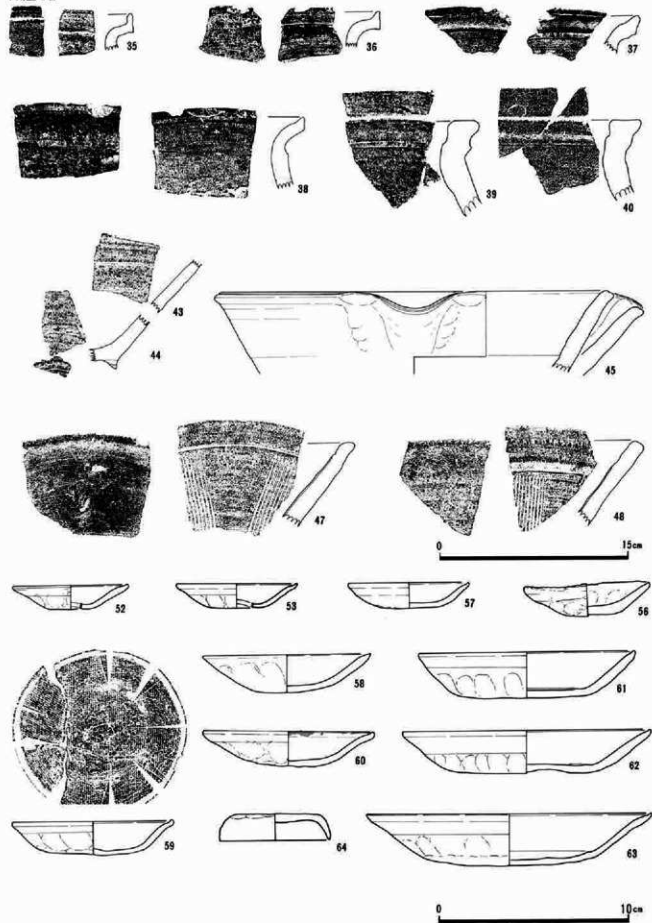


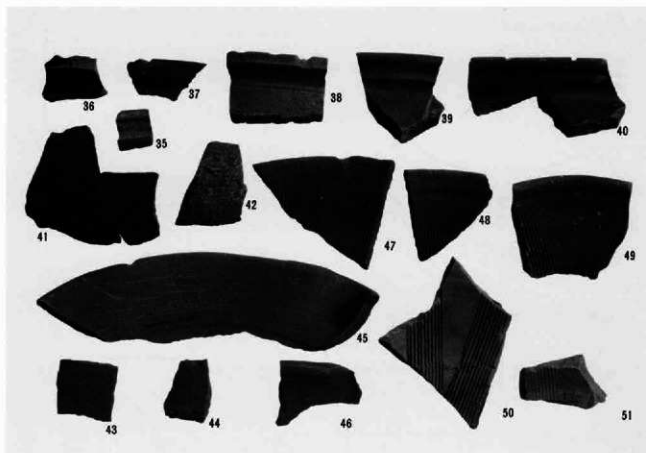
SF288 越前焼壺1 壺2 鉢3・4 土師質皿5・8 鉄軸碗9 灰軸皿10 壺11 青磁碗12・13  
 SD266 越前焼壺14・15 搦鉢16 鉢17・18 火桶19 土師質皿20-21・22 鉄軸碗23-25 青磁碗28  
 ・29 皿30 白磁皿31 染付碗32 石製品硯33 バンドコ蓋34



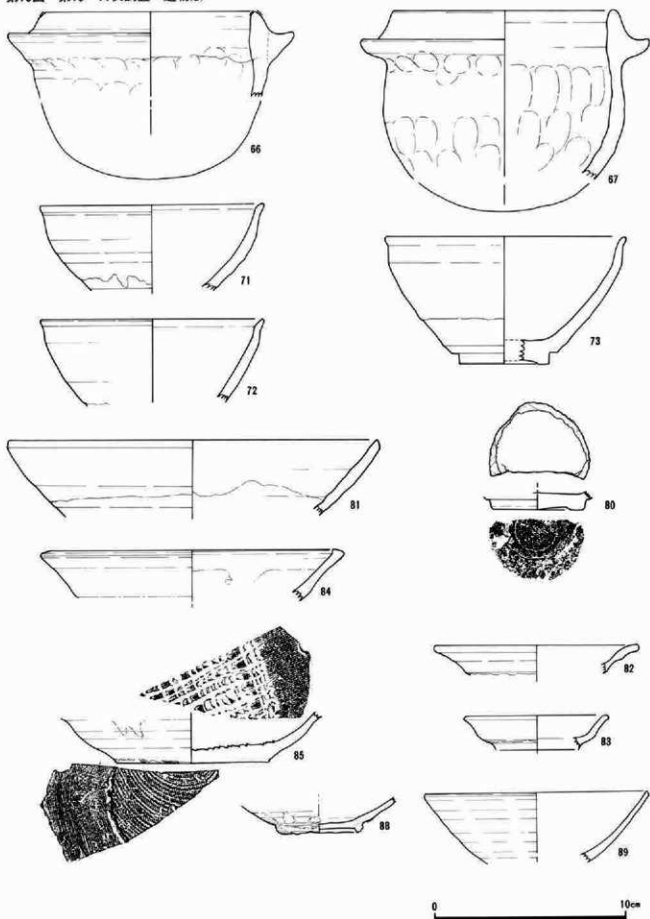
第17図 第10・11次調査・遺物2)

I期整地層

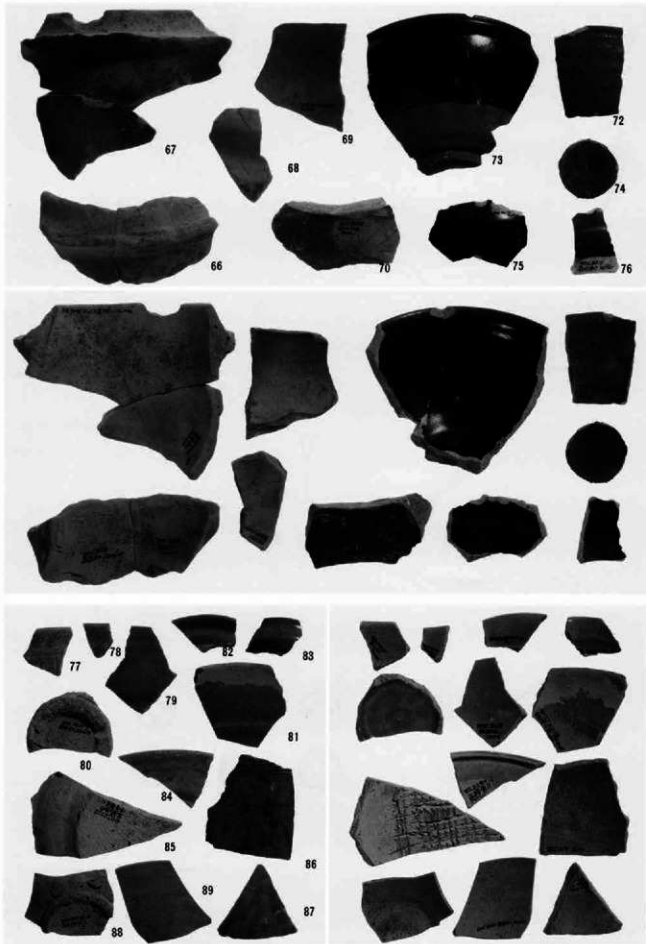




第18圖 第10・11次調査・遺物3)

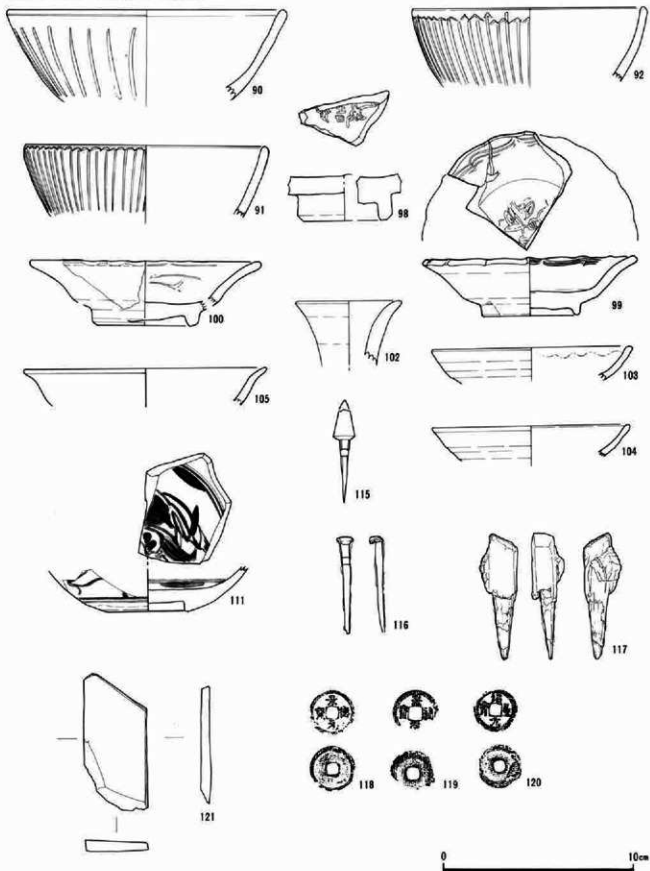


土師質土釜66・67 鉄軸碗71-73 灰軸碗80 鉢81 皿82・83 卸皿84・85 白瓷系碗88・89

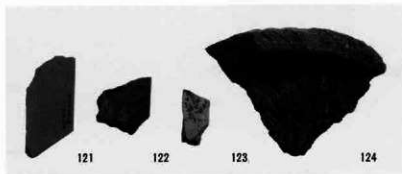
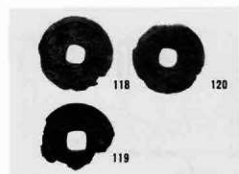
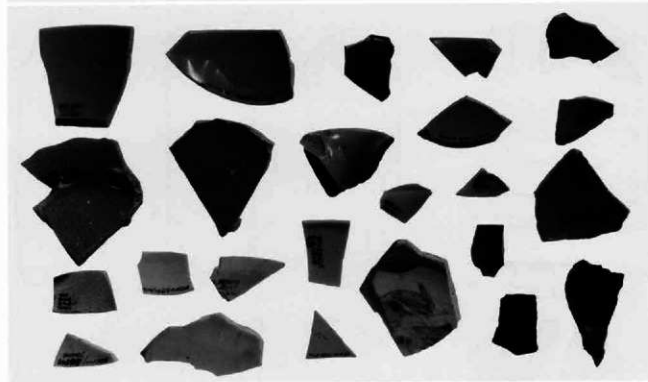
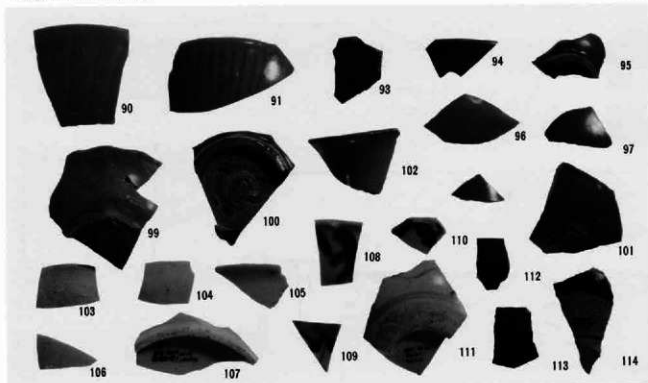


I期整地層 土師質土釜66~69 瓦質土器火鉢70 鉄軸碗72~76 灰釉碗77~80 鉢81 皿82-83  
 卍目84-85 壺86-87 白塗系碗88-89

第19図 第10・11次調査・遺物(4)



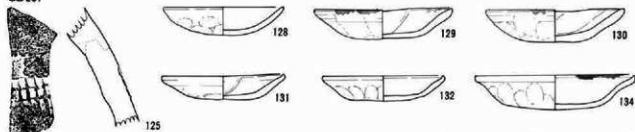
青磁碗90～92・98 皿99・100 花生102 白磁皿103～105 染付皿111 金屬製品鉄針115 釘116-117  
銅銭118～120 石製品砥石121



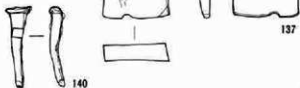
I期整地層 青磁碗90・91・93～97 皿99・100 鉢101 花生102 白磁皿103～107 染付碗108～110 皿111  
 中国製天目茶碗112～114 金属製品銅銭118～120 石製品紙石121～123 バンドコ124

第20図 第10・11次調査・遺物(5)

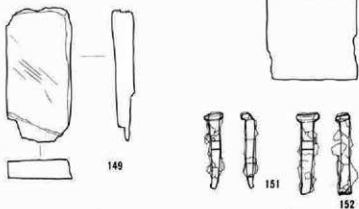
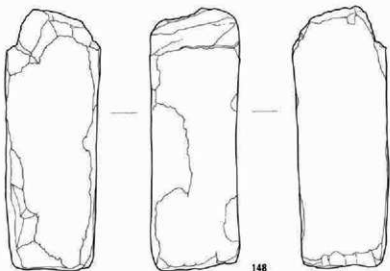
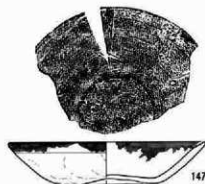
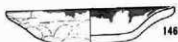
SB 281



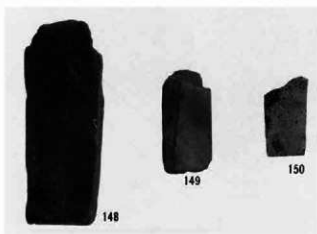
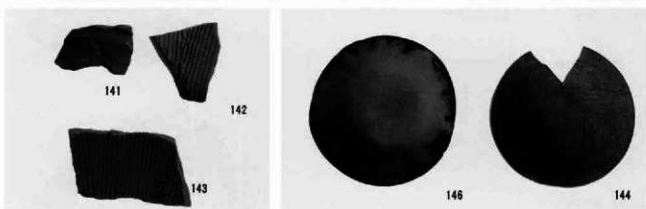
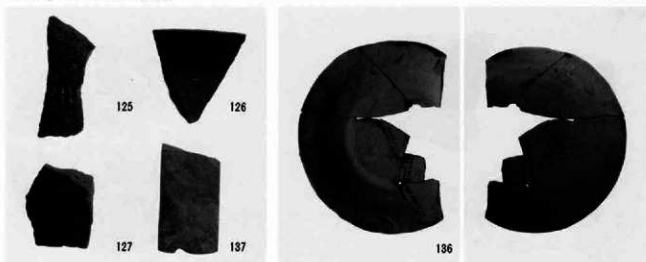
SF 284



SF 287



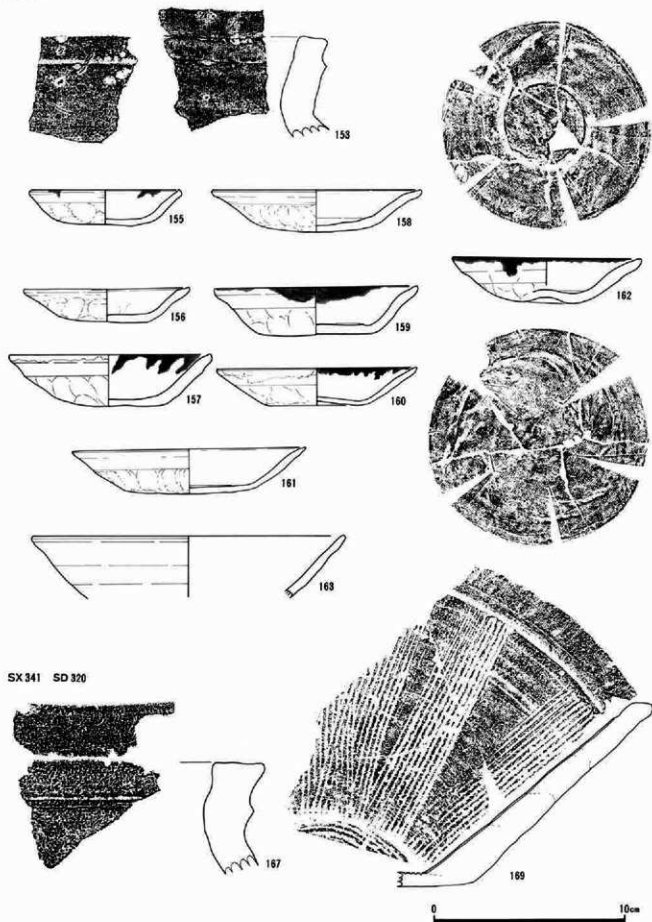
越前焼土125 土師質皿128～136 石製品砥石137 土師質皿138～139 金属製品釘140  
越前焼土141 土師質皿144～147 石製品砥石148～149 金属製品釘151～152



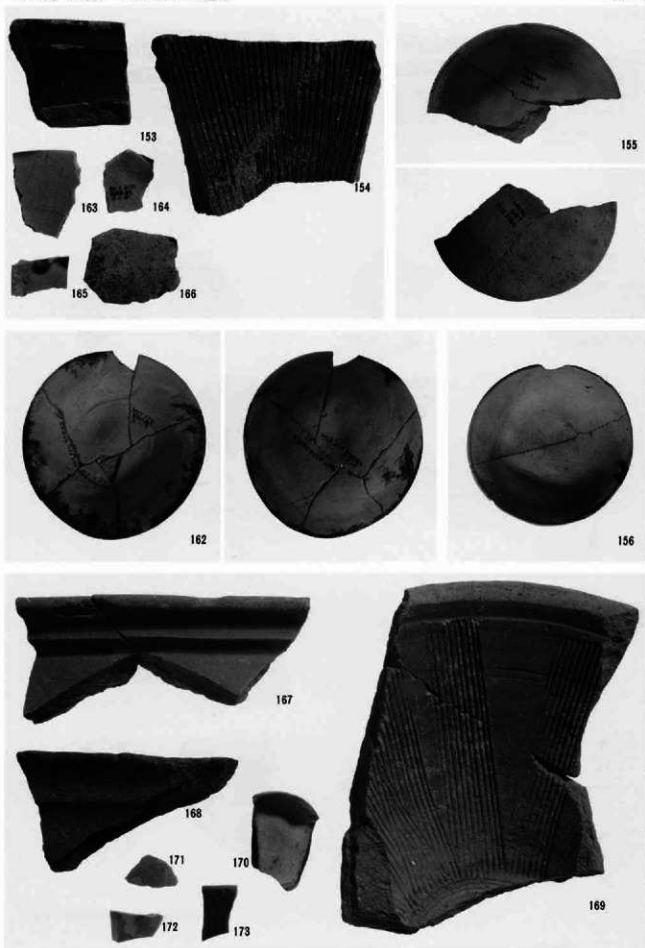
SB281 越前焼壺 鉢126・127 土師質皿134~136  
石製品砥石137

SF287 越前焼壺141 椀鉢142・143 土師質皿144~146  
石製品砥石148~150





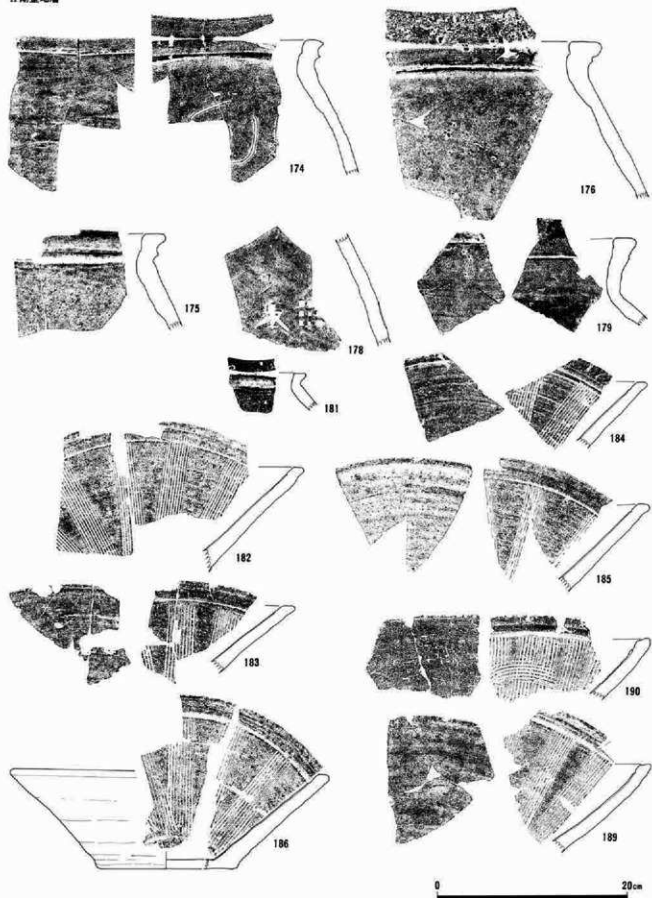
SX 341 SD 320



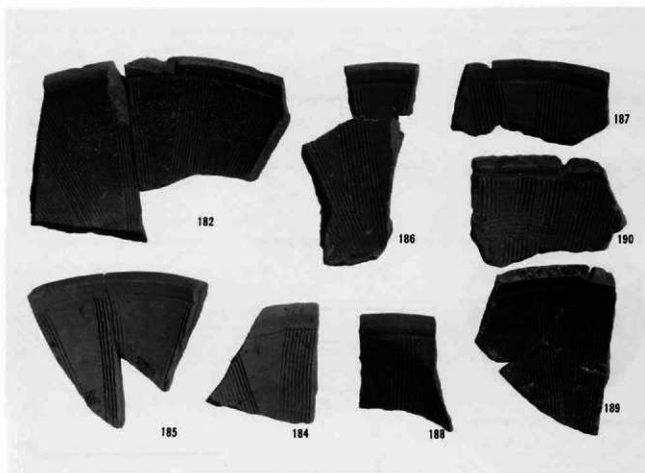
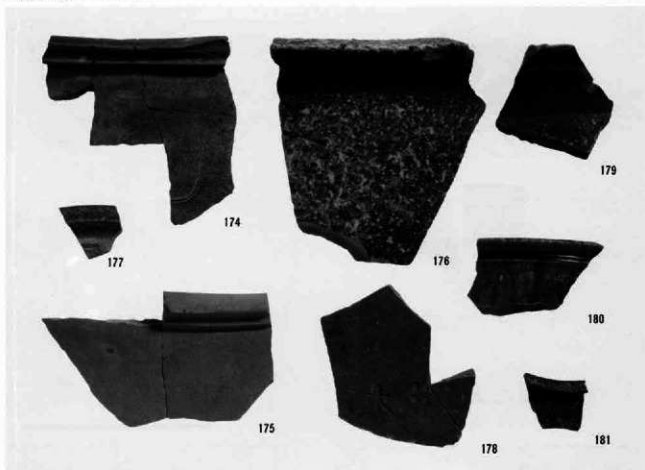
SF 283 越前焼裏153 摺鉢154 土師質皿155・156・162 灰輪碗163・164 染付皿165 石製品砥石166  
 SX 341・SD 320 越前焼裏167・168 摺鉢169 土師質皿170 灰輪碗171・172 青磁碗173

第22図 第10・11次調査・遺物7)

II期整地層

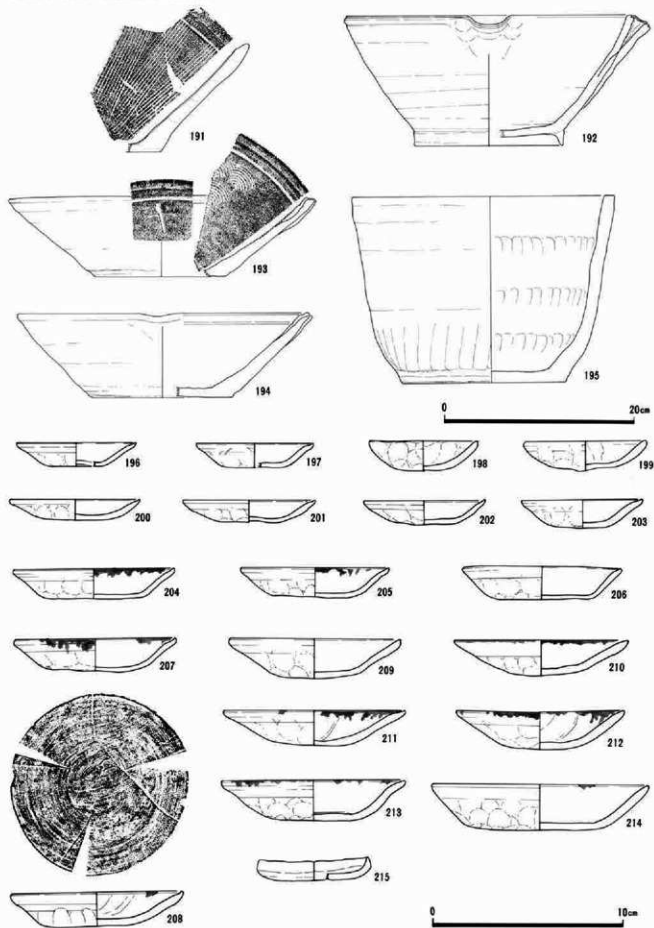


越前焼174・176・178・179・181 播鉢182・186・189・190

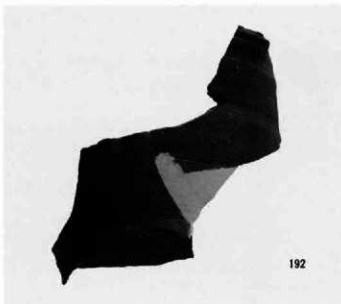
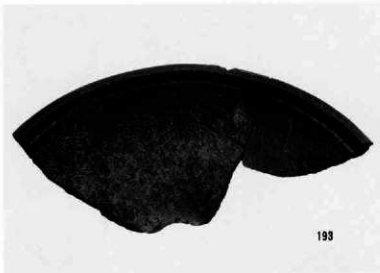


II期空地層 越前焼灰174~180 壺181 播鉢182・184~190

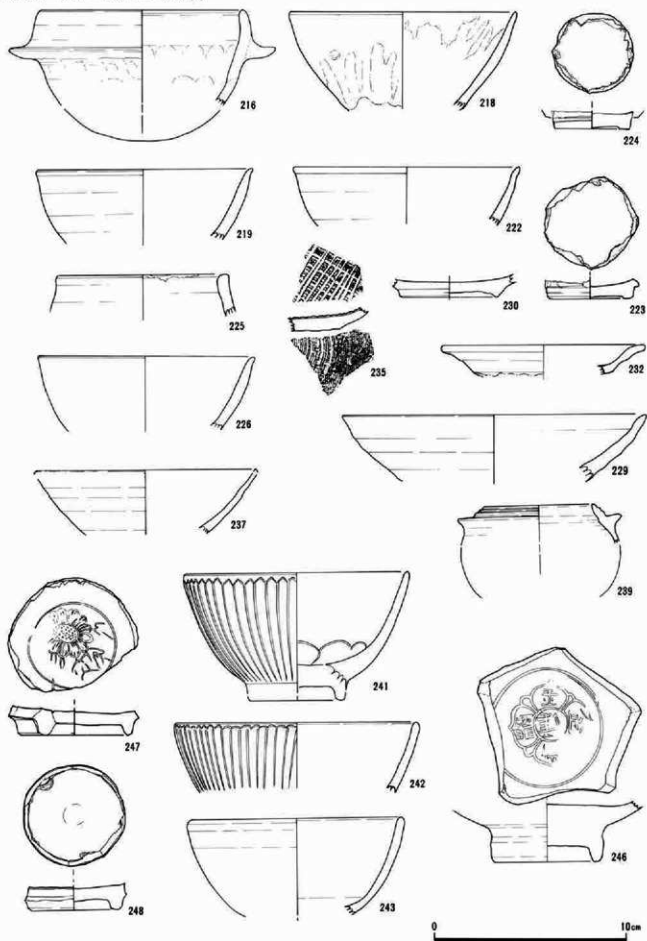
第23図 第10・11次調査・遺物(8)



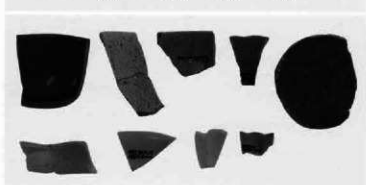
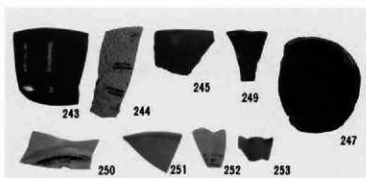
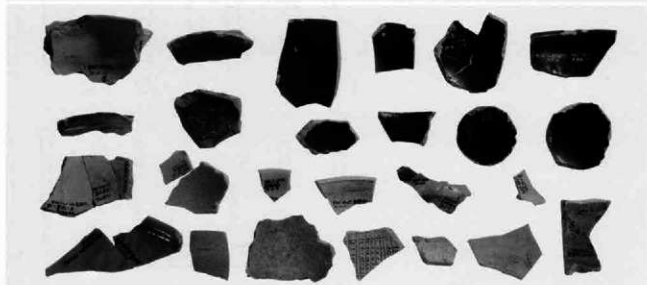
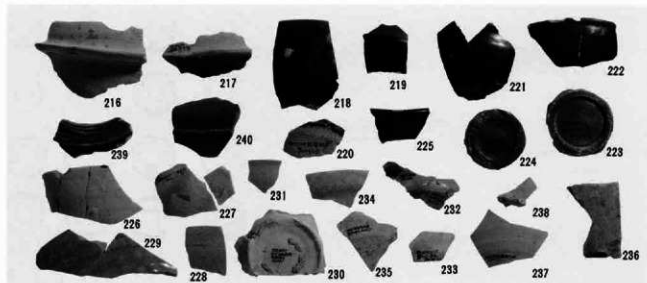
越前焼瑠鉢191 鉢192~194 火桶195 土師質皿196~215



第24回 第10・11次調査・遺物9)

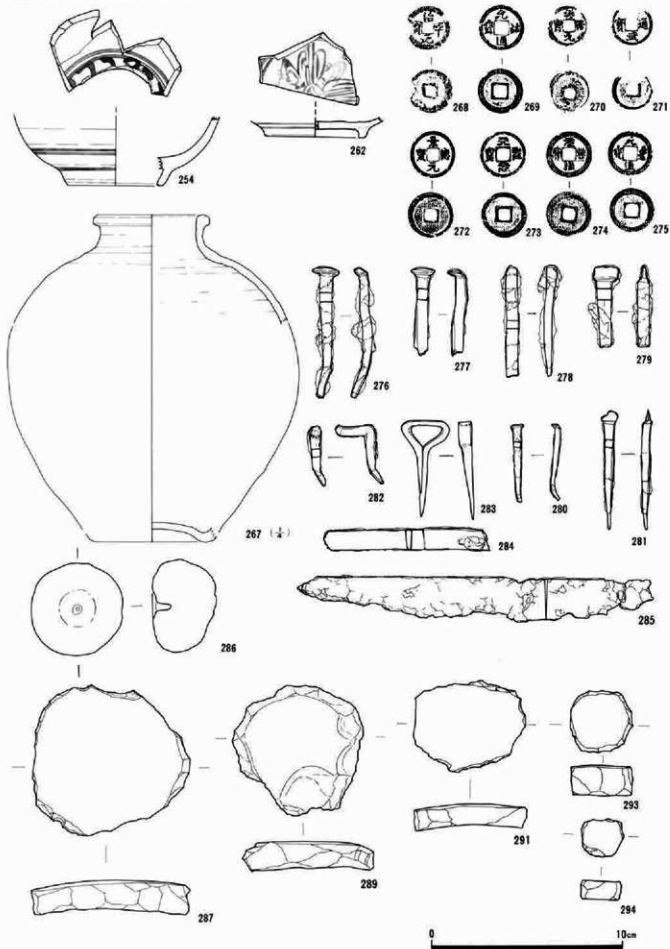


土師質土釜216 鉄輪碗218・219・222～224 壺225 灰輪碗226・229 皿230・232 印皿235  
白瓷系碗237 瓦質土釜239 青磁碗241～243・246 皿247・248

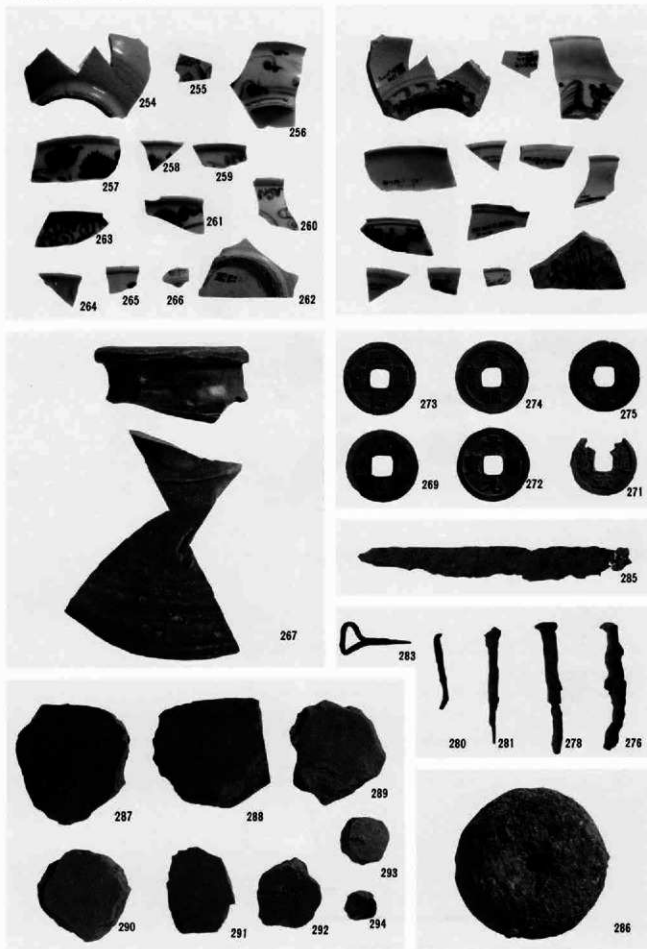


II期整地層 土師質土釜216・217 鉄輪碗218～224 壺225 灰輪碗226～229 皿230～232 壺236 卍皿233～235  
白磁系碗237・238 瓦質土器土釜239 火鉢240 青磁碗241・243～246 皿247・249 白磁皿250～253



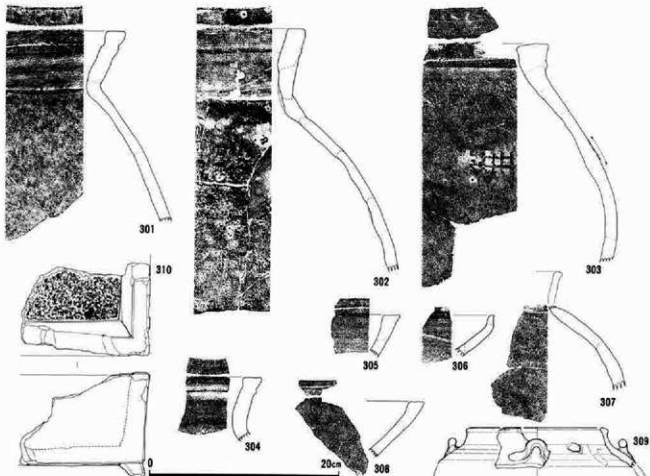


染付碗254 皿262 樽袖蓋267 金屬銅銭268-275 釘276-281 短282 短止め283 小柄284 小刀285  
 石製品球状石製品286 円板状土製品287・289・291・293・294

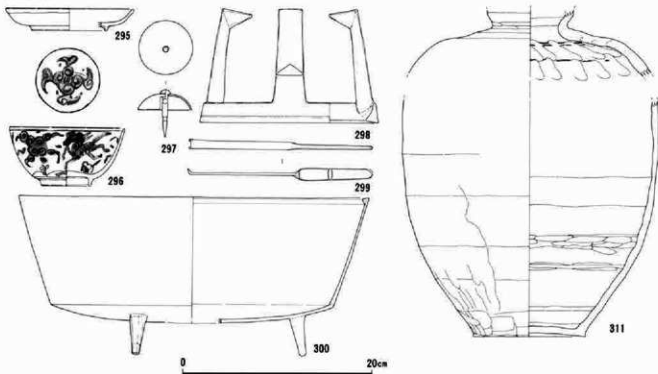


II期整地層 染付碗254-255 皿256-266 襦袢窓267 金属銅銭269・271-275 針276-278・280・281 釦止め283 小刀285 石製品球状石製品286 円板状土製品287-294

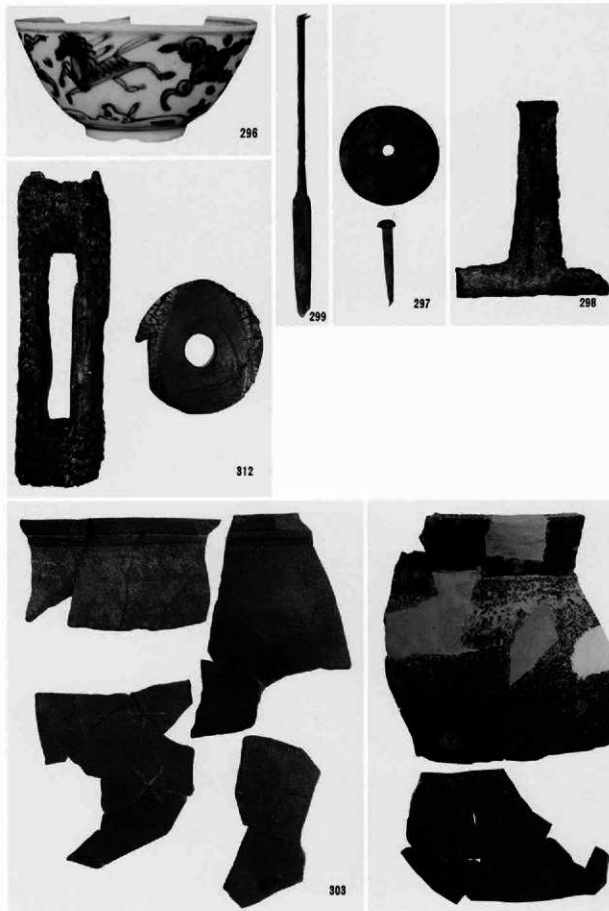
SE 293



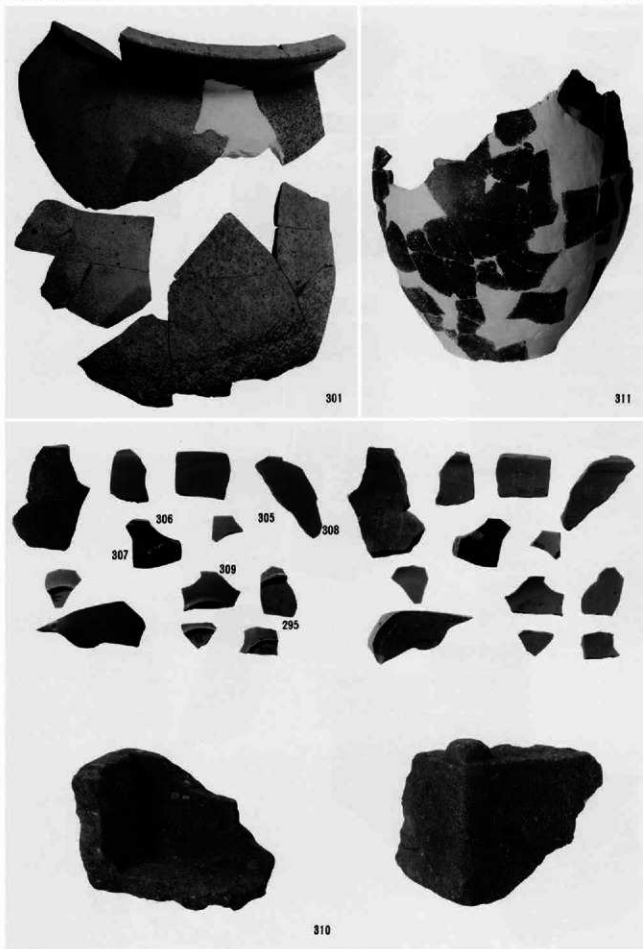
SE 292



白磁皿295 染付碗296 金属製品曼頭金具297 五徳298 鏡299 鍋300 越前焼裏301-304 壺307  
鉢305・306・308 鉄輪蓋309 信楽焼壺311 石製品盤310



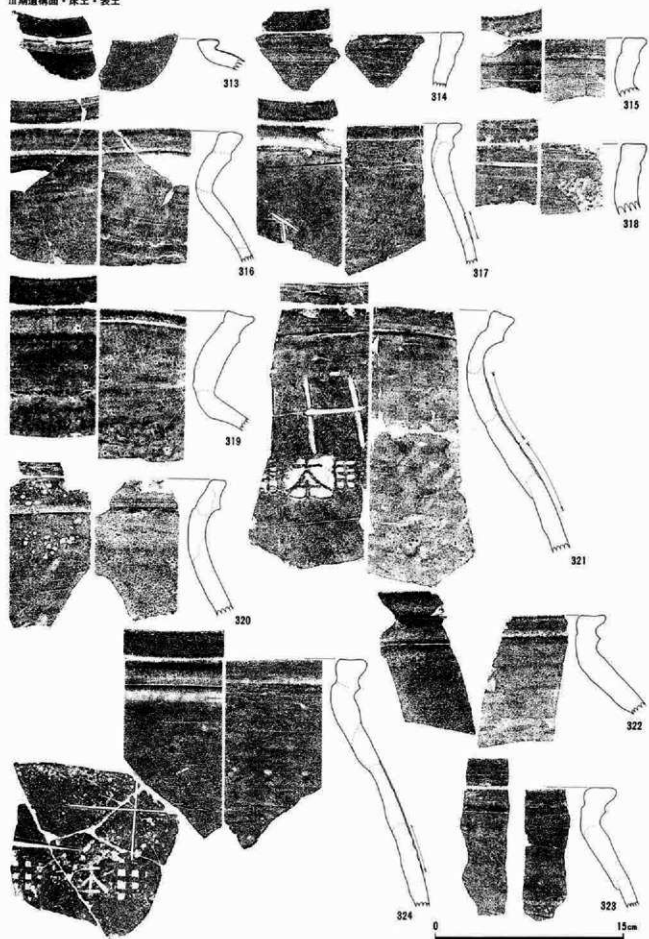
SE 292 漆付碗296 金属製品曼頭金具297 五徳298 鏡299  
 SE 293 越前焼裏302-303 木製品釣瓶312

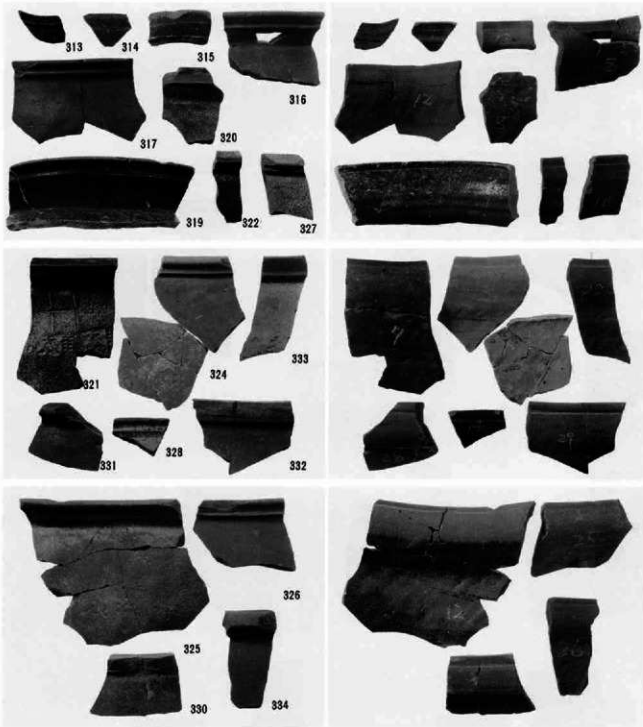


SE 292 白磁皿295 SE 293 越前焼甕301 壺307 鉢305・306・308・309 信濃焼壺311 石製品盤310

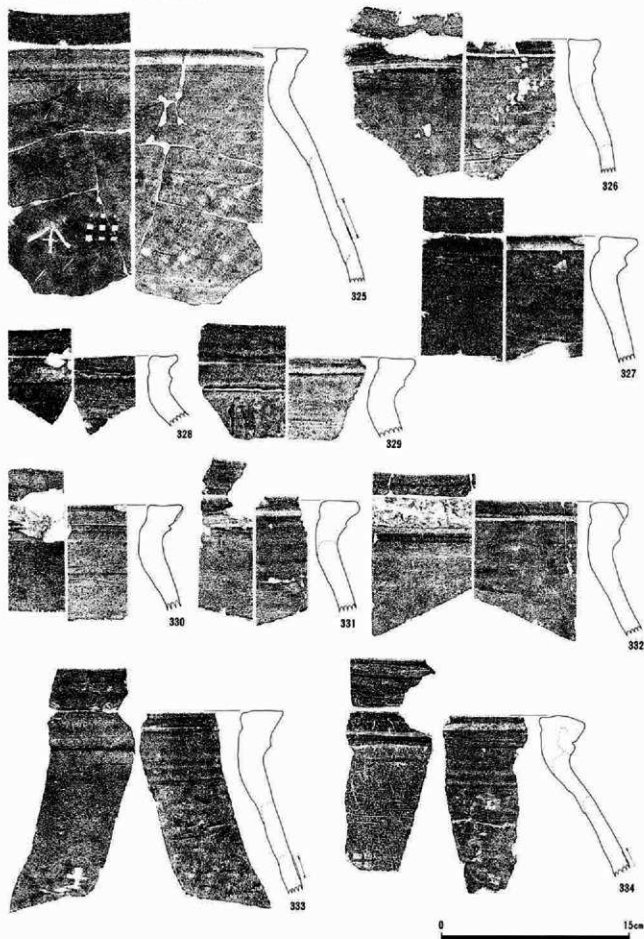
第27図 第10・11次調査・遺物12

川瀬遺構面・床土・表土



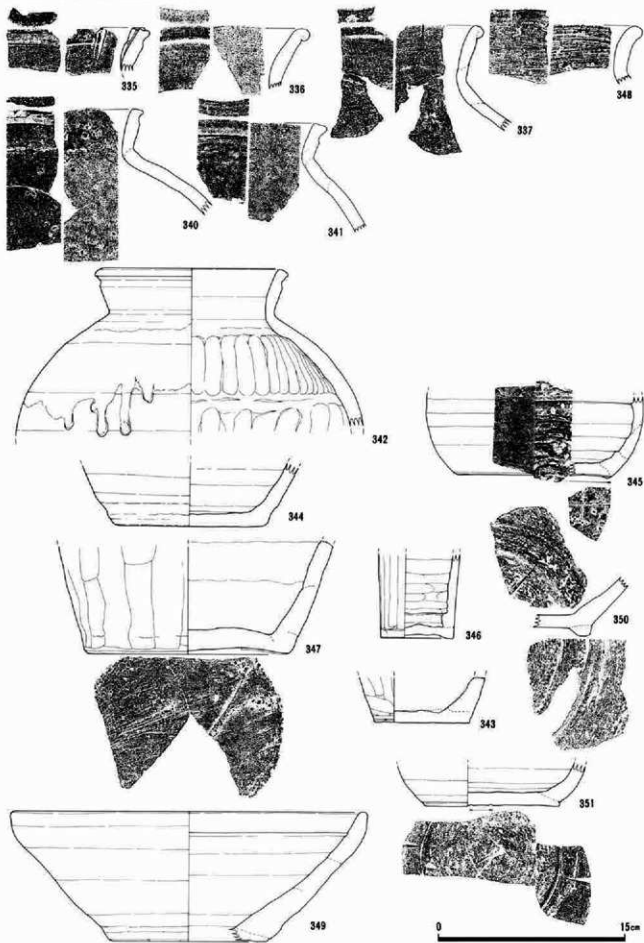


Ⅲ期遺構面・床土・表土 越前焼土313～317・319～322・324～328・330～334

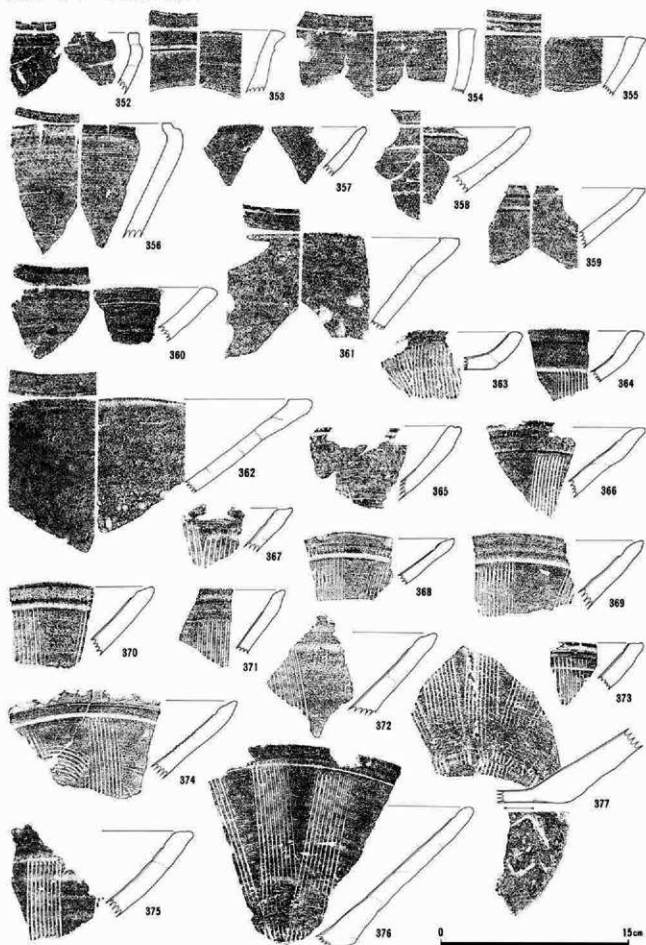


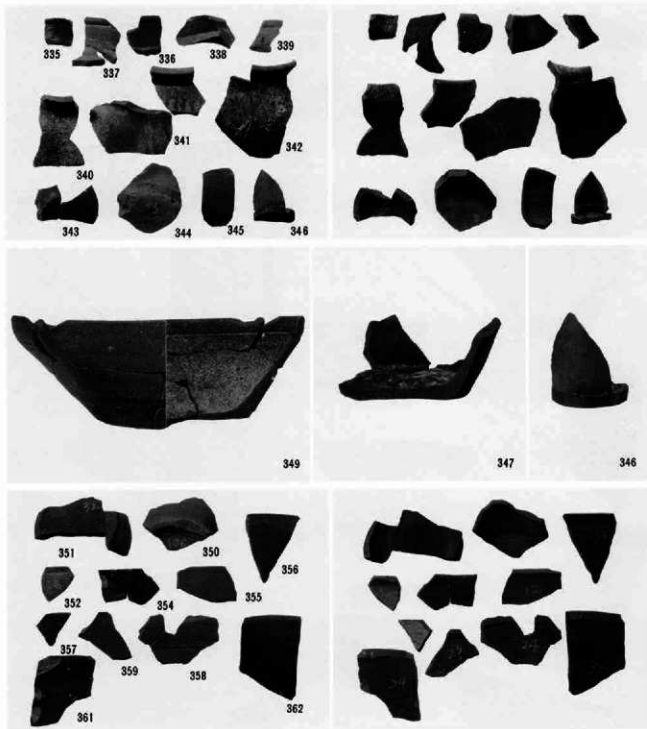


第29図 第10・11次調査・遺物14



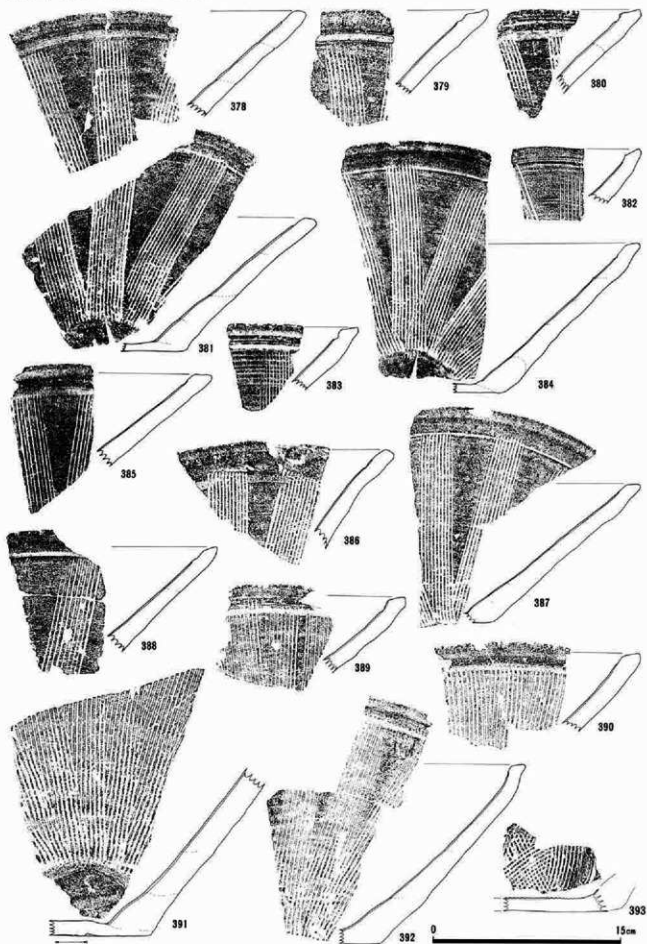
越前焼壺335-337・340-347 鉢349-351 信楽焼壺348



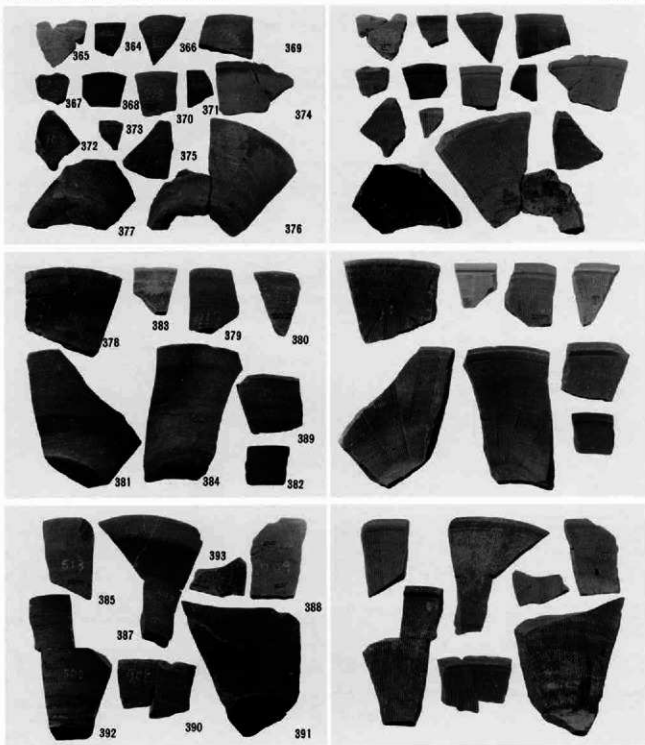


III期遺構面・床土・表土

越前焼 335～347 349～352・354～359・361・362

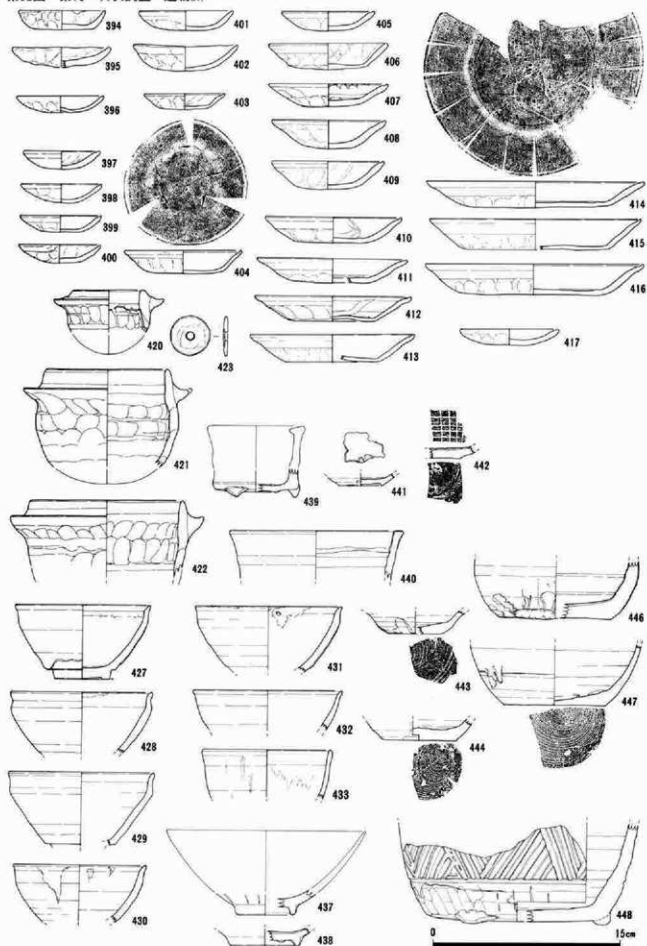


越前焼箔鉢378～393

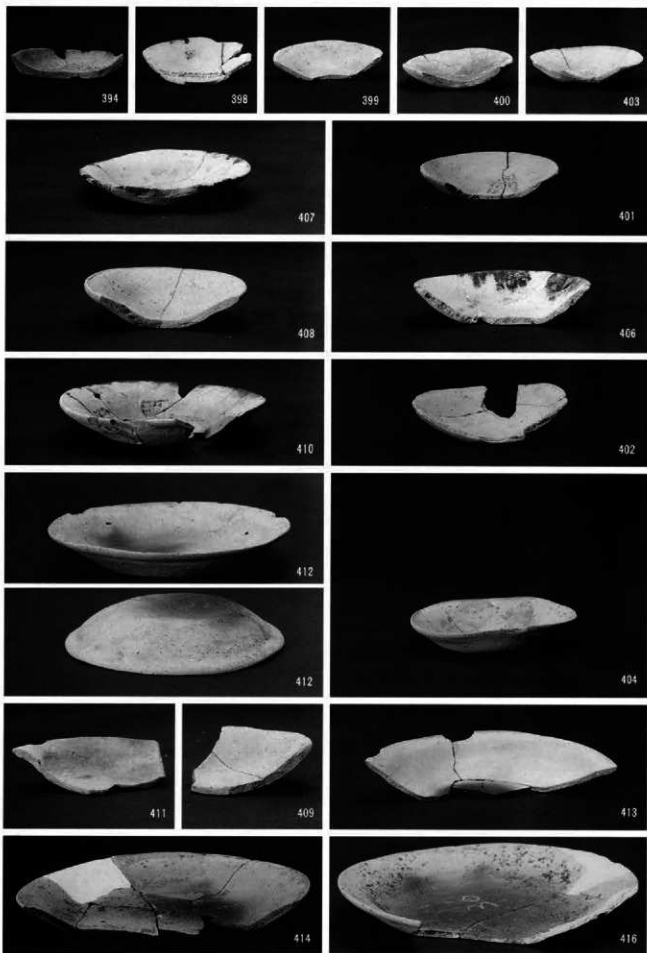


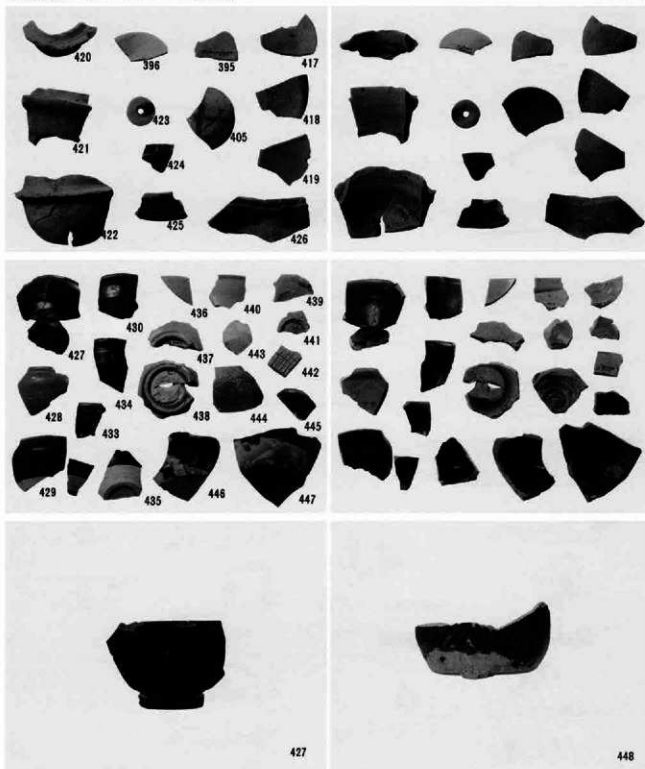
III期遺構面・床土・表土 越前焼埴鉢 364~385・387~393

第32図 第10・11次調査・遺物17



土師質皿394-417 灯芯押之423 土釜420-422 鉄輪碗427-433 壺446-448  
 灰輪碗437-438 皿441 香炉439-440 印皿442 壺444

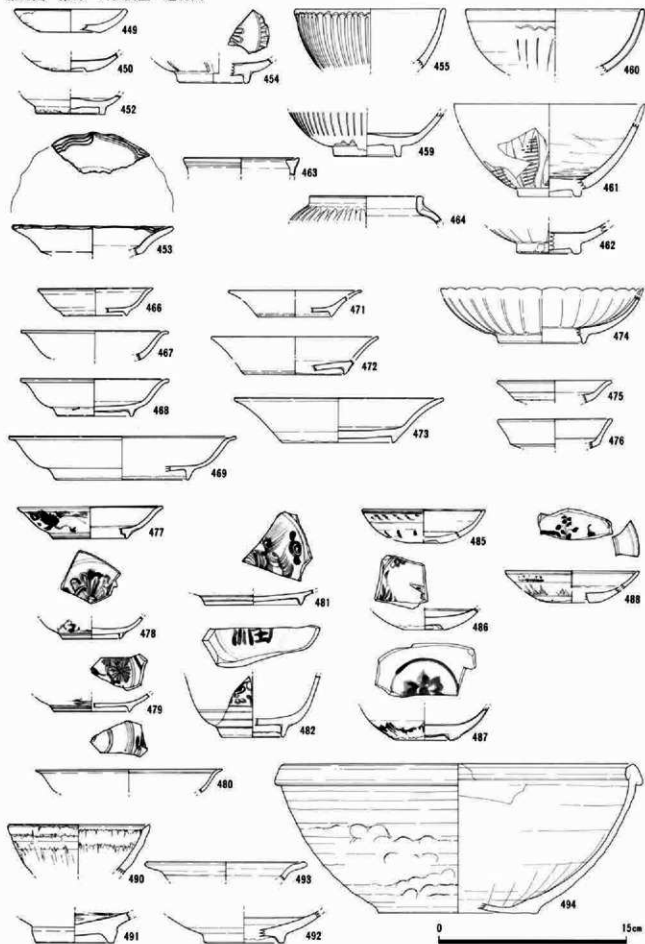




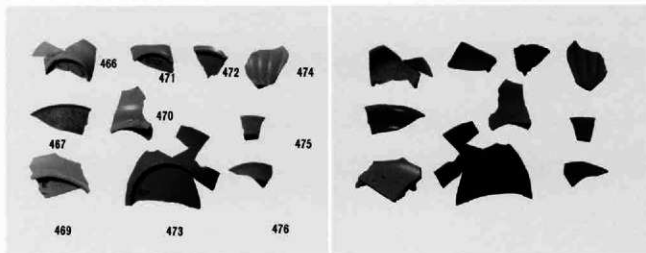
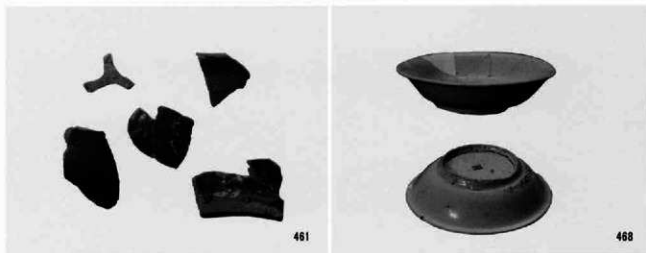
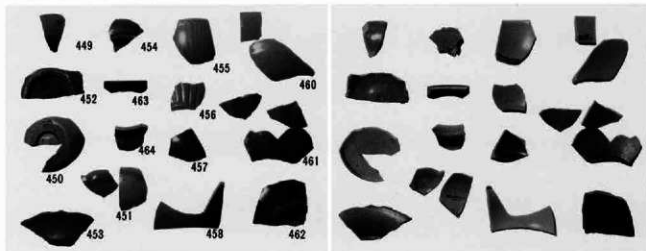
Ⅲ期遺構面・床土・表土 土師質皿395・396・405・417～419 灯芯押え423 土釜420～422 瓦質風炉424～426  
鉄輪碗427～430・433～435 壺444～447 灰輪碗436～438 香炉439・440 壺443・444 小皿441 卍皿442



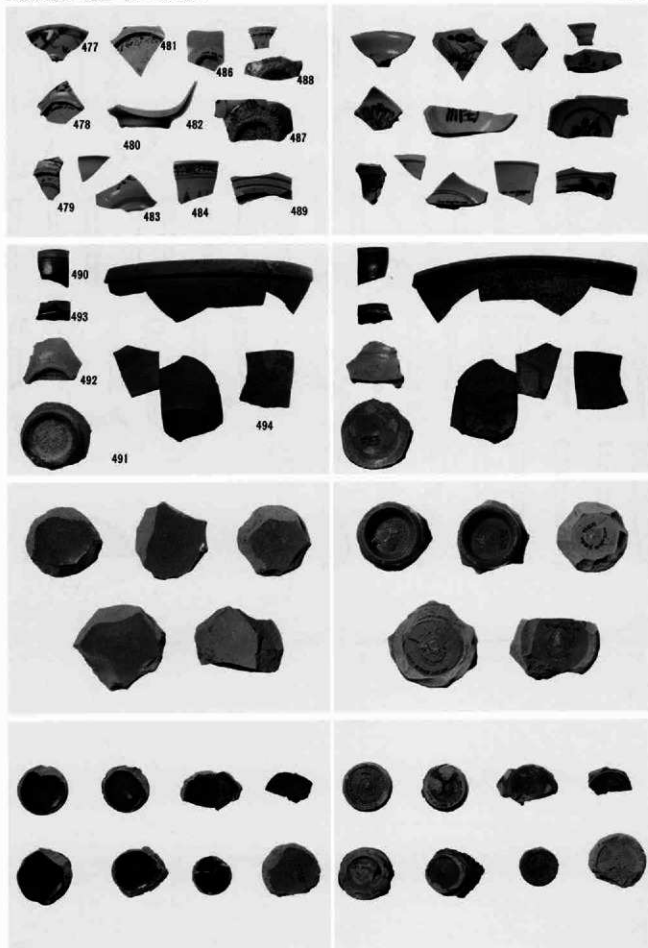
第33圖 第10・11次調査・遺物(8)



青磁皿 449・450・452～454 碗 455・459～462 香炉 463 壺 464 白磁皿 466～469・471～476 染付碗 482  
 皿 477～481・485～488 中國製天目茶碗 490 朝鮮製碗 491・492 皿 493 鉢 494

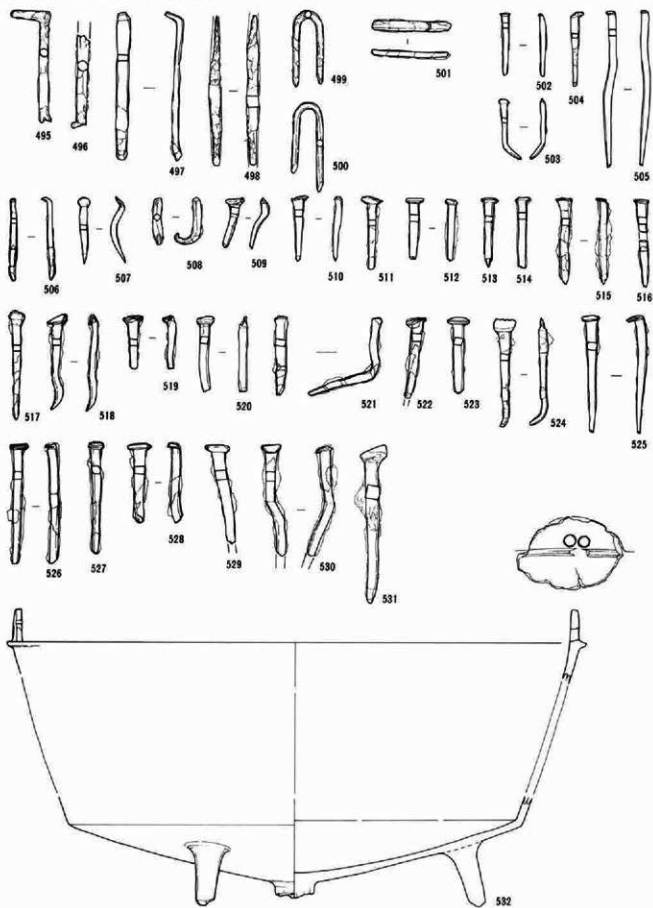


Ⅲ期遺構面・床土・表土 青磁皿449-454 碗455-458-460-462 香炉463 壺464 白磁皿466-476

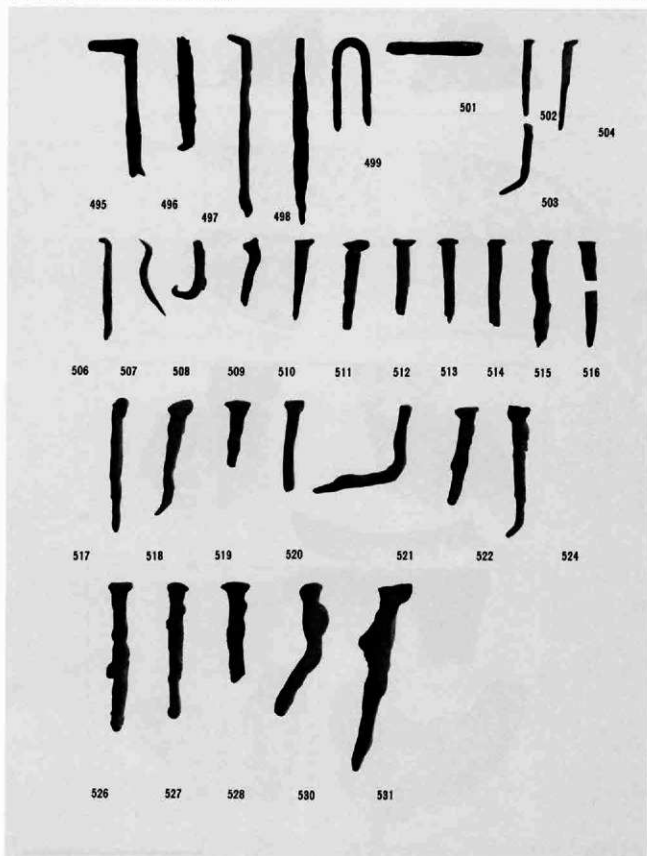


III期遺構面・床土・表土 染付碗482~484 III477~481・483・484・486~489 中国製天目茶碗490  
 朝鮮製刷毛目碗492 そば茶碗491 III493 鉢494 陶製円板青磁・天目茶碗(掉円8参照)

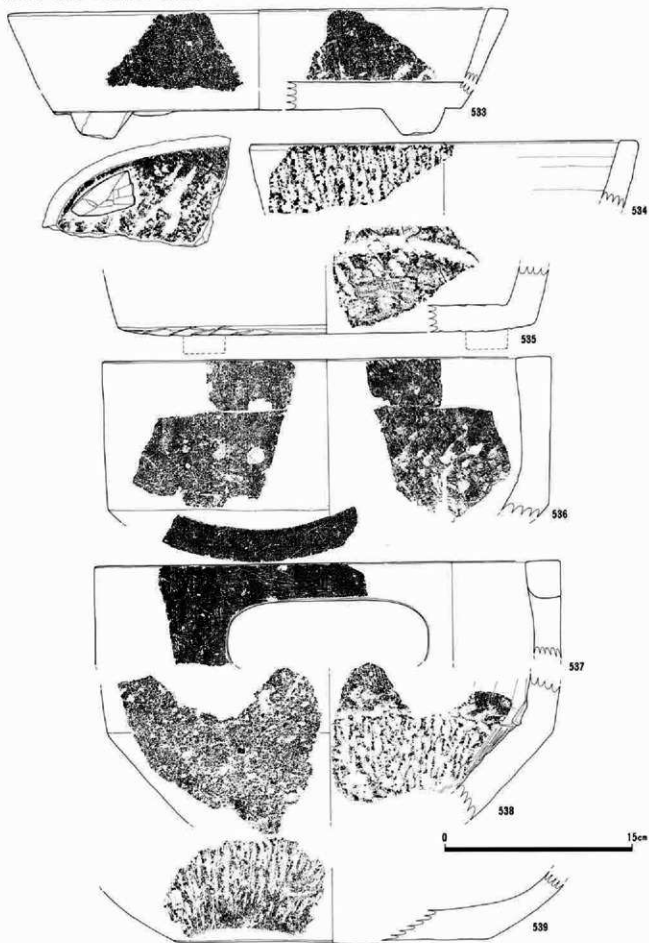
第34図 第10・11次調査・遺物19



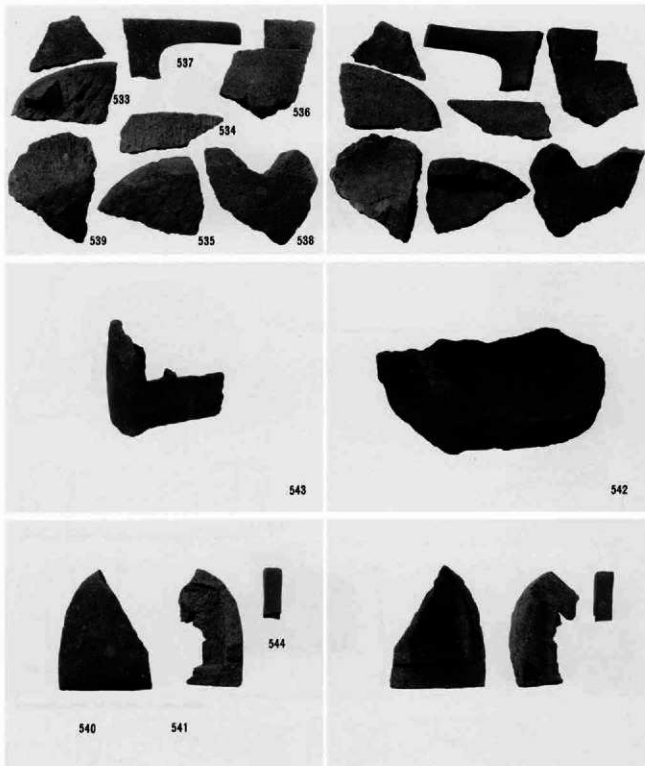
金屬製品 止 495-496 鋸 497 鋸 498 火箸(二次転用)499-500 覆輪(?)501 釘502~531 鉄鏝532



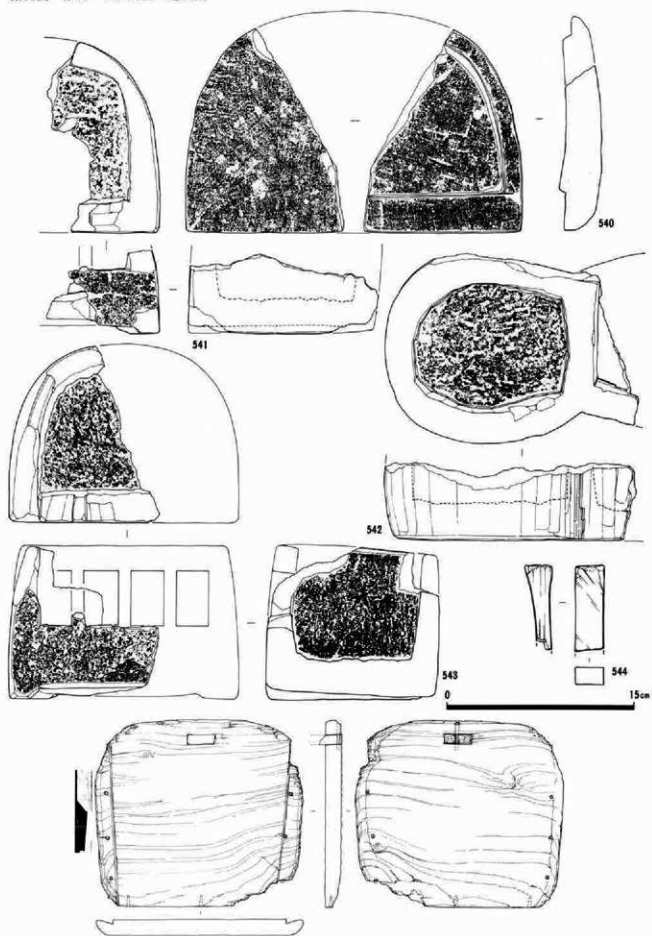
III期遺構面・床土・表土 金属製品 短止495・496 鍵497 鉗498 火箸499 覆輪?501  
 釘502～504・506～522・524・526～528・530・531



石製品型533-535 火鉢536-538 二枚鉢539



III期遺構面・床土・表土 石製品盤533～535 鉢536～538 こね鉢539 バンドコ蓋540 バンド  
コ身541・543 線香立542 紙石544



石製品バンドコ蓋540 バンドコ身541・543 椀香立542 砥石544 木製品の類545



### Ⅲ 第 54 次 調 査 報 告

## 1. 調査の経過と概要

この調査区は、城下町・乗谷の中心である上下の城戸によって区画された「城戸内」の中程、やや南寄の一乗谷川の西岸に位置している。朝倉氏第5代当主義景の住した朝倉館とは、川をはさみ、相対する位置にあって、「一乗谷古絵図」にも、有力家臣の名が多く示され、また、水田畦畔等にも、これを裏付けるように、比較的大きな屋敷跡と推定される地割も読み取られていた。昭和46年に、この谷の主要部約278ヘクタールが国の特別史跡に指定されたのを機に、以後の継続的な調査計画が策定され、すでに、当主の住した「朝倉館」の調査を終え、これを受け、谷内の主要地点を調査し、その概要を把握することを第一とした。また、同時に、県道の改修も計画されており、これが主として、一乗谷川西岸を通ることとされ、その事前調査も平行して実施した。調査の第一に計画されたのが、この有力家臣団の屋敷が想定されるこの地区であって、第10・11次調査としてこれを行い、その結果、想定通り、大規模な屋敷群の存在が確認され、さらに、これらが、計画的な道路を中心に配されていることも判明した。こうして、谷内に計画的な町造りが実施されていたことが明らかになり、この詳細な資料を得ることも新たな計画として組み入れられた。主要な各地点と、谷内を縦断する道路の事前調査の結果、この地区一帯には、大きな武家屋敷群が存在し、(ここをその中心の地籍名から、平井地区と通称している)また、北方の谷の中心部西岸には、寺院・町屋が集中し、(これを同様に、赤浜、奥開野地区と通称する)これらが良く残存していることから、この2地区を面的に広く調査することとした。この平井地区は、第10・11次調査に始めて、第15・24・25・29・30次と継続され、すでに約15,000㎡を調査している。また、赤浜、奥開野地区は、約25,000㎡を調査している。第54次調査は、こうした、調査成果を受け、また、「ショーゲドン」と通称される所であって、「一乗谷古絵図」にみえる「鱒澤将監」の屋敷跡でないかと考えられる区画の構造を解明することを目的として計画された。(第10・11次調査・PL. 3参照)

発掘調査区は、福井市城戸内町字平井、通称「ショーゲドン」である。第10・11次調査区の南、第29次調査区の西に位置する。第10・11次調査区との境は、農道となっている高まりであって、先の調査により、これが土塁跡であることが判明していた。また、第29次調査により、今回の調査区の東に南北方向道路が存在し、これに面して、土塁と門が一部確認されていた。第10・11次調査で確認されているこの屋敷の北境界となる東西方向土塁から約30m南に水田畦畔石垣が存在し、この石垣を境にして、南の水田面が約0.5m高くなっており、また、この石垣線の延長付近の道路に面する南北方向土塁石垣に、約3mの間隔をおいて2カ所の暗渠出口がみられる。こうした点から、この石垣が屋敷の南境界を伝えるものと推定された。こうして、東西約60m、南北約30m、面積約1,800㎡の調査区が設定された。

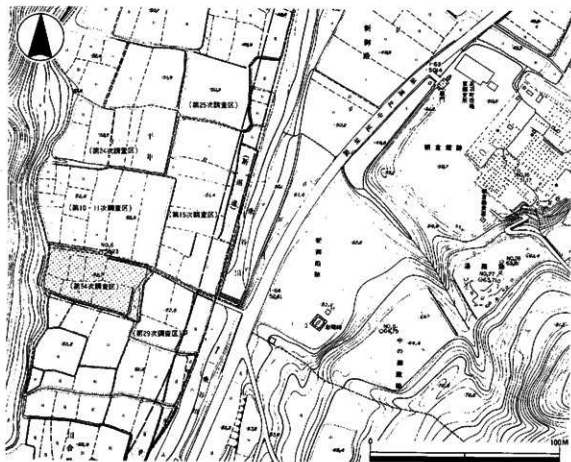
調査は、昭和61年4月2日に開始し、まず、先の調査残土や耕土を除去することから始めた。途中、5月2日からは、上城戸裏に位置する一乗小学校の校舎建設に伴う事前調査のため、6月15日まで中断した。その後、梅雨による天候不順により調査はなかなか進展しなかったが、梅雨の明けた7月後半からようやく軌道に乗り、9月30日には基本的な調査を終えた。その後、土層図等の作成を行い、同年11月19日には、続く第56次調査区(下城戸)と共に、ヘリコプターによる空中写真測量等を実施し、平面実測図、石垣立面図を得、現場作業を終了した。

調査区の地形は、先にも述べた通り、北と東に土塁跡と推定される幅2～3mの高まりがあり、南は石垣によって、約0.5mの高差がみられ、この石垣裾に水路が存在した。西は、山裾であって、この裾

線に沿って水路と農道が設けられており、これらは、水田面より約1m高い位置に存在している。これらに囲まれた、一屋敷と推定される区画内は、南北に大きく2分割され、さらに南半は3分割、北半は4分割されていた。この細分化された水田は、西の山裾間が小さく、東が大きい。全体としては、南から北へ、西から東へ、若干傾斜している。

調査は、まず、先の調査の残土と耕土を除去し、第10・11次調査で一部検出されていた北の東西方向土塁を基準として、3mグリッド方眼を設定した。次いで、屋敷を区画する土塁を明確にすることとし、東、北、南の順にこれを進めた。その後、東から西へ、順次、水田床土を除去し、遺構の検出を目指した。東半では、門建物と掘立柱穴を除き、大半が削平されていることが判明した。西半では、北半を中心に、井戸や建物礎石等が検出された。東半を中心に、再度、下層へと調査を進め、上層の門建物からは、約0.4m下層で、礎石建物を中心とする遺構群を検出し、また、北半で、前身土塁石垣と推定される石列等を検出した。なお、水田化による削平は、2度実施されていることも明らかとなった。こうしてほぼ、遺構の検出を終え、最後に、土層のチェックのため深掘トレンチを設け、調査を終了した。

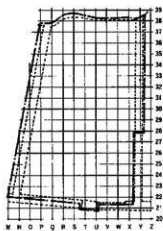
以上、調査の結果、遺構の残存状況は、良好とはいえないものの、土塁位置の変更を伴う屋敷の改変や、屋敷内の基本構成を知る資料を得る等の成果を上げることが出来た。ここでは、こうした成果を、土塁で囲まれた屋敷について報告する。そのため、一部、調査区とは若干相異なる点もあることを了承願いたい。



挿図12 周辺地形図

## 日 誌 抄

第54次調査 昭和51年4月2日～5月1日、6月20日～10月2日、11月16日～11月19日。



挿図13 グリッド設定図

- 4・2 調査開始。発掘器材等搬入。第10・11・29次調査機上および積土除去から着手。
- 4・16 残土・積土除去終了。
- 4・17 東土塁 SA 979西面石垣の検出。
- 4・18 北土塁 SA 262石垣の検出。(→21日まで)
- 4・22 南土塁 SA 3310 北面石垣の検出。(→23日まで)
- 4・23 地区杖の設定。床土を除去し、遺構の検出を始める(東から)。門建物 SB 3319礎石検出。
- 4・30 東土塁北平 SA 264西面検出。
- 5・2 緊急調査(一乗小学校校舎建設に伴う事前調査)のため中断。(→6月19日まで)
- 6・20 調査再開。雑草の除去。当初設定したセクションラインは旧水田畦畔に当たるため北へ1グリッド変更する。
- 6・27 第10次調査後復元してあった石積施設 SF 326を再発掘。梅雨による天候不順のため、以後約1カ月調査停滞。
- 7・25 梅雨明け。第一層遺構検出終了。西北部を中心に井戸 SE 3323、越前焼大甕埴埴様 SX 3333等が検出される。
- 7・28 石積施設 SF 3327検出。木製遺物等を伴う。
- 7・29 東部から再度下層遺構の検出作業を始める。
- 8・1 午前は資料館開館50周年特別展「一乗谷と中世都市」のオープンセレモニー。
- 8・2 井戸 SE 3322検出。
- 8・6 下層梁 SA 3315検出。石積施設 SF 3324の

掘り下げ。土師質瓦が多く出土。

8・7 2基の井戸掘り下げ完了。SE 3322は深さ3.4m、銅製水指等出土。SF 3323は深さ4.4m、越前焼壺等出土。

8・9 シンボシウム「一乗谷と中世都市」開催。(→10日)全国から百名を超す参加者で谷内は活況。

8・11 礎石建物 SB 3317検出。

8・13 建物 SB 3317内より、地構具かと思われるセットの土師質瓦4カ所で出土。また瓦質大甕出土。

8・18 礎石建物 SB 3316検出。

8・22 旧土塁石垣 SV 3311検出。

8・25 石積施設 SF 3325・3326検出。南面上土塁 SA 3310の南石垣および溝 SD 3332検出。

8・31 特別展盛況の内に終了。

9・1 展示終了。(→3日)

9・5 南土塁に沿う石積施設群検出。

9・20 基本的発掘調査終了。

9・22 写真撮影のため遺構清掃。(→24日まで)

9・25 遺構写真撮影。(→27日まで)

9・29 補足調査(断ち割等)実施。

9・30 発掘調査終了。

10・16 上層図作成。(→17日まで)

11・16 写真測量のための清掃。

11・18 写真測量対空標識設置。石垣立両地上写真測量実施。

11・19 ヘリコプターによる空中写真測量実施。

## 2. 遺 構 (PL41~51, 第37~44図)

検出した主な遺構は、上屋3、溝2、門1、堀3、礎石建物5、井戸2、石積施設8、大塚埋設遺構1、壕渠4等である。これらは、層位等から、大きく2時期に分けることが可能である。これを、下層をI期、上層をII期と呼ぶこととする。I期は、この地区の道路や土塁と共に、この屋敷が造成された時である。そして、II期は、これを廃し、北の屋敷境界となる土塁を約3m北へずらし、屋敷を拡大し、I期の遺構に対し、東で、約0.3~0.4m上層に造られる。なお、深掘トレンチによって、I期の遺構群に先行する遺構面が一部検出されているが、小範囲の調査であって、明確な遺構が確認されておらず、また、町割等との関係も明らかでない。ここでは、I・II期の検出された遺構を中心に報告する。なお、北隣の屋敷(第10・11次調査)の遺構との関係は、その境界となる上層の変更が共に、II期となる。第10・11次調査区では、さらにIII期の遺構が区分されているが、この屋敷には、この時期の遺構が存在しないのか、それとも、II期の遺構がそのまま存続するのかが明確でない。

遺構は、町割等に係る土塁等と、屋敷内の諸遺構に分け、屋敷内は、さらに、I・II期の時期別に分けて述べる。なお、ここで使用する方位は、通例にならない、谷地形を重視し、谷の入口を北、奥を南とするが、これは、地図上の方位とは若干異なる。北の東西方向七畷と地図上の東西線は、土塁が、西で北へ約5°振れている。また、遺構平面図等の外方へ示した数値は、第VI座標系に基くものである。他の調査の報告等と合せ、町割解明の基本資料として活用願いたい。

### a. 町割関係(表10)

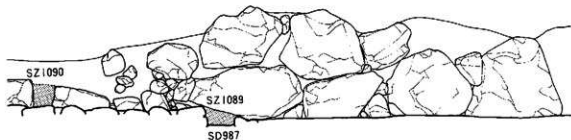
これまでの各調査により、第10・11次調査で検出された南北方向の道路SS260は、この屋敷の中程、やや北側の門SI1082近くで、東西方向の道路SS975とT字に交わり、ここで、少し方向を変え、SS976として南進することが判明している。また、これらの道路は、これを横断する溝や、その割溝等から、新旧2時期あることも明らかとなっている。道路等を含む東の区画については、別に報告を計画しているので、ここではふれない。

SA262 屋敷の北境界となる東西方向の土塁で、

すでに第10・11次調査によって東半が検出されていた。この土塁と、東の境界となる南北方向の道路に沿う土塁SA264との内角は約91°である。幅は、約2.1m(7尺)であって、農道として、水田内に少し高く残されていた西半が保存が良く、高さは約1mである。この土塁によって、北の第10・11次調査により確認されている屋敷と分けられるのであるが、上部の構造を示す遺構は検出されていない。下部の南面石垣は、北の隣屋敷に面する北面石垣同様、径0.5~1.0m程度の自然石を横使いとして、1~2段積み上げている。(第37図、土塁石垣立面図参照)この土塁の石垣基部と他の遺構の関係から、この土塁は、II期に築造されたものであることが判明している。西の山裾部は未調査であって、検出長は、約51mである。(PL45)(第10・11次調査参照)

表10 町割関係遺構一覧

遺 構		摘 要
種 別	番 号	
土 塁	SA 262	II 期
土 塁	SA 264	I・II期
土 塁	SA 979	I・II期
土 塁	SA 3310	I・II期
石 瓦	SV 3311	I期(→II SA 262)
門	SI 1082	I・II期
礎石建物	SB 3319	II 期



挿図14 土塁 SA 979 東面石垣立面 (南半) (1/50)

SA 264・979 南北方向の道路 SS 260・976に沿い、屋敷の東境界となる南北方向の土塁である。中程、やや北寄りに門 S1 1082が設けられており、これを境に、北を SA 264、南を SA 979とする。ここでは、東西方向の道路 SS 975も取り付いており、町割軸の変換点と考えられ、南北の2つの上塁の間には、約6の違いがあって、内へ折れ曲っている。また、SA 264と北の屋敷の東土塁 SA 261の間にも約3の違いが生じている。SA 264は、中程の暗渠 SZ 270を境にして、北は約2.7m (9尺)、南は、約2.1m (7尺)と幅が異なる。これは、後に述べるように、I 期には、ここに北境界の土塁が取り付いていたものを、II期にSA 262に変更したことによると思われる。なお、この SA 264は、大半が削平されており、基部の石列を残すのみであった。これに対し、南半の土塁 SA 979は、水田内にも、よく跡をとどめており、屋敷内側の西面石垣や、道路に面する東面石垣の南端部は、良く保存されている。高さは、道路側で約1.5m、屋敷内側で約1.2mである。しかし、他の土塁同様、上部構造を示す遺構は検出されていない。また、石垣の石は、屋敷内の西面で径0.6m前後、道路に面しては1~1.5m前後の大きなものを使用している。(第37図、土塁石垣立面図、および挿図14参照) 幅は、約2.1m (7尺) であって、I・II期を通して存在する。(Pl., 45)

SA 3310 屋敷の南境界となる東西方向の土塁である。崩れた所も多く、幅、方向とも一様でない。もっとも保存の良い中程で、幅は、約1.2m (4尺)、高さ、約1.2mである。東の南北方向の上塁 SA 979との取り付け部あたりは、約1.8m (6尺)の幅となっている。方位は、中程を基準に考えると、南北方向土塁 SA 979との内角は、約85°であり、そのため、北の境界となる土塁 SA 262との間に約アのずれが生じ、屋敷は、西の山裾へ向って狭くなる。なお、この南北の2つの東西方向の土塁の間は、道路側の南北方向の土塁との取り付け部で約33mである。山裾部は未調査であって、検出長は、約45mである。石垣の多くは崩れており、不明な点もあるが、中程の石垣基部から考え、I・II期を通じて存続したと考えられる。なお、この土塁によって分けられる南隣の屋敷とは約0.4mの高低差である。(Pl., 45)

SV 3311 屋敷の北境界となる東西方向の土塁 SA 262の約3m南に位置する東西方向の石列である。I期の遺構であって、比較的大きな石が、南に面を持って連続している。この石列に沿って、南には、2つの石積施設 SF 3325・3326が検出され、また、この石列の延長線上の南北方向土塁 SA 264には、暗渠 SZ 270が存在し、これを境に、この土塁幅も異っている。こうした点等から、この石列は、土塁石垣の基部と推定される。すなわち、I 期には、この石列によって、北の第10・11次調査で検出された屋敷が分けられ、II期に至って、この土塁を廃し、約3m北へ位置を変え、土塁 SA 262を築造したと判断される。(Pl., 50)

S1 1082・SB 3319 南北方向の道路に面する東土塁 SA 264・979に設けられた門とその建物である。2段の構成で道路から屋敷に至り、そこに門建物 SB 3319を設ける。門 S1 1082は、少し外開きになっ

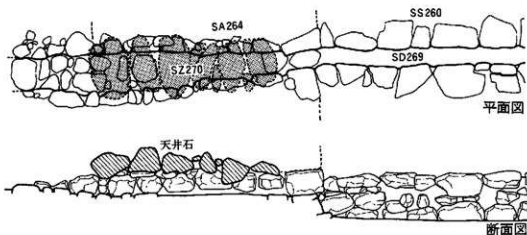
ており、道路に面する側で、間口約3.8m (12.5尺)、屋敷内で、約3m (10尺)である。第1段の石列は、新期の道路面とはほとんど差がなく、この下層に古い時期の道路面が存在することも知られており、また、他には、門跡の痕跡がみられないことから、I期から存在したと考えてよい。すなわち、I期には、1段構成であったものを、II期に2段構成に改めたと判断される。第1段は、径0.4~0.5m程度の偏平な自然石を用いるのに対し、第2段は、長径0.8m前後の大振り石を用いている。この第2段は、第1段の石列の内側、約1.3mにあって、約0.25m高くする。これによって、II期の遺構面上昇を処理したものであろう。また、このため、II期の門建物 SB 3319は、この第2段の石列の内側に設けられ、少し屋敷内に入りすぎの観がある。この門建物 SB 3319は、径0.6m前後の硬質の偏平な自然石4個を礎石とするもので、この礎石上面に、柱据付け位置を示すと考えられる除刻線があって、南北(正面)2.42m (8尺)、東西(奥行)1.52m (5尺)である。このことから考え、薬師門、あるいは高麗門形式の建物と推定される。(PL, 49)

#### b. I期の遺構(表11)

SZ 270 屋敷の北端近くに位置する南北方向の上屋 SA 264に設けられた暗渠である。幅は、入口で0.5m、出口で0.3mである。備石は一石で、暗渠の高さは、約0.3mである。入口近くの底には、偏平な石を敷き並べている。蓋石も良く残っている。この暗渠から出た水は、外の南北方向の道路 SS 260を横断する溝 SD 269を経て、道路側溝 SD 268へ向う。この外方の2つの溝 SD 268・269には、道路の改修に従って新旧2時期があることが知られているが、暗渠が直接取り付く SD 269は、そのまま位置を変えず積み増されておられ、いずれの時期とも決定しがたい。この暗渠の設けられている土塁 SA 264が、この暗渠を境に幅を変え、また、ここに、I期の旧土塁垣 SV 3311が取り付くと考えられることから、

表11 I期遺構一覧

遺 構		摘 要	遺 構		摘 要
種 別	番 号		種 別	番 号	
暗 渠	SZ 270			SX 3345	
"	SZ 1089			SX 3346	
塀	SA 3315			ピット群	SX 3351
建 物	SB 3316			"	SX 3357
"	SB 3317			"	SX 3358
"	SB 3318			"	SX 3359
石積施設	SF 3325			"	SX 3360
"	SF 3326			"	SX 3363
溝	SD 3331			"	SX 3365
その他	SX 3334	SB 3316関連?		"	SX 3367
"	SX 3335	"		"	SX 3368
"	SX 3336	"		"	SX 3369
"	SX 3337	" 炉跡?		土 成	SX 3371
石 列	SX 3338	SB 3316・3317を繋ぐ			SX 3373
	SX 3339			暗 渠	SZ 3374
	SX 3344				



挿図15 暗渠 SZ.270詳細図 (1/50)

I期に造られ、II期にも存続したと考えられるよう。なお、この暗渠が受けるべき屋敷内の溝は検出されていないが、旧土塁石垣裾に集った水を排水したのであろう。(PL. 50)

SZ 1089 屋敷の南端の南北方向の土塁 SA 979に設けられた暗渠である。入口の大きさは、幅0.35m、高さ0.35mであり、出口は、小さく、幅0.3m、高さ0.2mである。この暗渠を通った水は、南北方向の道路 SS 976を横断する溝 SD 988を経て、道路側溝 SD 986へ流れる。また、この暗渠は、屋敷の南境界となる東西方向の上塁 SA 3310の東端部に設けられた暗渠 SZ 3374と繋っており、南隣の屋敷からの水を排水している。しかし、この暗渠の存在する屋敷内には、この暗渠と繋がる溝等は検出されていない。なお、隣屋敷のこの暗渠を通じて排水する溝は、後に直進して新たに設けた暗渠 SZ 1090を通じ、直接屋敷外へ排水されている。これに応じ、道路横断の溝 SD 988も改修され、また、土塁石垣に沿って南の新たな暗渠 SZ 1090まで延長されている。この改修は、道路の改修に伴っている。なお、この暗渠 SZ 1089はII期にも存続した可能性も残されている。

SB 3316 屋敷内中央部やや東寄りに位置する礎石建物である。東西約7.5m、南北は不明な点も多いが、北寄の石の集まり SX 3334・3335がこの建物と関係しそうで、このあたりまでの、約11m程度であろう。礎石は南半を中心にかなり検出されているが、大きさや、そのレベルに若干ばらつきもあり、また、不規則であって、基本となる柱間寸法を読み取ることは出来ない。幾度かの小改造を経て、このようになった可能性も考えられる。なお、礎石配置から、東に幅約0.9m(3尺)、南に幅約1.2m(4尺)程の底的な部分が読み取られる。縁と推定される。この建物内に存在する SX 3336は、周囲に、外に面を持って石を並べ、内部は、他に比べ若干高くし、小礎で埋めているが、用途等は明らかでない。また、西南部の SX 3337は、内側に面を持つ石組であって、その構造等から、囲炉裏の基部の可能性も考えられている。(PL. 46・48)

SB 3317 屋敷内東半、南寄りに位置する礎石建物である。先の礎石建物 SB 3316とは、約2.4m(8尺)の間を置いて存在する。北西隅部の礎石群が残るのみであって、これらの礎石は、約0.94m(3.1尺)間隔で配されている。このことから、この建物は、一乗谷では一般的な柱間寸法である6.2尺を基本柱間としていたと推定される。また、これまでの調査例から、建物の外周部は、ほぼ半間毎に礎石を配している例が多いことから、これが建物の北西隅部と考えて良いと思われる。なお、この建物の西辺には、北の建物 SB 3316と連絡する縁が存在したようで、この繋部の石列が SX 3338であろう。建物の規模は



明らかでないが、後述する堀等から考え、東西4間(約7.5m)、南北3.5間(約6.6m)程度と推定される。また、この建物の礎石脇3カ所から、口径9cmの土師質皿(分類ではD類とされる)が、2枚重ねの状態出土しており、地鎮等に関係するのかも知れない。(PL. 48)

SB3318 屋敷のはば中央に位置する礎石建物である。礎石は、一部が残るのみであって、規模等は明らかでない。先に述べた、東の礎石建物SB3316に接するように存在したと推定される。

SA3315 屋敷の東南部に位置するコ字形の掘立柱を用いた場である。礎石建物SB3316の東南隅礎石の東に接して掘立柱穴が存在し、ここから東へ約4.2m、そして、南へ折れ、約9.3m、再び西に折れる。柱穴を中心に、幅0.3m弱の黄色土の帯が検出されている。この黄色土は薄く、また、柱穴の側面にはみられず、北辺の柱穴間の狭間石を覆うように張りついている。こうしたことから、この黄色土は、堀の土壁の痕跡と考えられる。柱穴の間隔は、東辺は、約3m(10尺)、南辺は、約1.5m(5尺)、北辺は、西が1.8m(6尺)、東が2.4m(8尺)である。また、柱穴から、柱は、丸太と考えられる。門を入れて正面に位置する礎石建物SB3316の東辺には雨落しの溝が存在し、この東側(正面)は、比較的良くしまった砂利の多い面であって、この砂利面と溝が、堀の北辺で止まっている。また、この北辺の東寄り6尺間は、当初から狭間石が存在しなかったと考えられること、そして、柱間も、他の東、南が、5尺あるいは、これの2倍の10尺間とするのに対し、6尺間としていること等から、ここに堀中門を設けていたのではなかろうか。南辺の黄色土は、ほぼ、SB3316の東辺の延長線付近まで延びている。西の礎石建物SB3317の東南部が明らかでないで、不明な点も多いが、この堀の西南隅柱は、建物SB3317の東南隅柱に取り付き、中庭を形成していたと判断される。

SF3325・3326 旧土塁石垣SV3311に接して設けられた石積施設である。SF3325は、北壁をこの石垣で兼ね、東西約1.8m、南北約1.8m、深さ約0.7mの規模を持つ。比較的大きな石を用いている。また、SF3326は、このSF3325の西にあつて、旧土塁石垣からは少し離れる。規模は、東西約2.4m、南北約1.2m、深さ約0.5mである。(PL. 50・51)

SD3331 礎石建物SB3316の東辺に沿う南北方向の石組溝である。幅は、0.3m、深さ、0.15mであつて、堀SA3315の北辺、建物SB3316の東南隅から始まり、北へ流れる。北部は、後世の削平があつて、不明となる。おそらく、旧土塁石垣SV3311まで延び、この石垣に沿って暗渠SZ270へ向つたものであろう。(PL. 50)

SX3339・3344・3345・3346 いずれも比較的多くの石が集まるものであるが、明確な面等は見られず、詳細は明らかでない。

SX3351 中程、やや北西寄のピット群である。深さは、0.1~0.2mと比較的浅い。木炭・焼土等で埋つていたが性格等は明らかでない。

SX3371 南土塁SA3310の跡、やや西寄に位置する土坑である。北に一部石積面らしき石もみられるが、詳細は明らかでない。

なお、他にも石が集中する所やピット等が若干存在するが、性格等不明である。

### c. II期の遺構(表12)

SV3312 屋敷の北境界となる東西方向の土塁SA262aに平行し、この南約3mに存在する石列である。扁平な自然石を、南に面を持って、一石並べたものであつて、積み上げはなかったと考えられる。この石列を境にして、北の土塁との間は、少し高くなつていたようである。そして、ここには、若干礎石的な

表12 II 期 遺 構 一 覧

遺 構		注 要	遺 構		注 要
種 別	番 号		種 別	番 号	
石積地敷	SF 326		ビット	SX 3347	
石 列	SV 3312		#	SX 3348	炭・焼土だまり
塼	SA 3313		#	SX 3349	
#	SA 3314		#	SX 3350	掘立柱穴
種 物	SB 3320		#	SX 3352	炭だまり
#	SB 3321			SX 3353	
井 戸	SE 3322			SX 3354	
#	SE 3323			SX 3355	
石積施設	SF 3324			SX 3356	
#	SF 3327			SX 3361	
大塼垣設	SX 3333			SX 3362	
炭ビット	SX 3340			SX 3364	
	SX 3341	溝?	ビット	SX 3366	掘立柱穴 SX 3343 と一連?
	SX 3342	SB 3319 関連	#	SX 3370	掘立柱穴
ビット	SX 3343	掘立柱穴	#	SX 3372	# SX 3370 と一連?

石もみられることから、土塁から差し掛けるような建物が存在した可能性も考えられる。(PI., 47)  
 SA 3313 屋敷内東寄の中程に存在する東西方向の掘立柱穴列であって、塼と推定される。一部には柱根も残されている。これは、径0.12~0.15mの皮付の雑木を用いた丸太である。柱穴の深さは、約0.6mである。東土塁 SA 979の西面石垣際から約7.6mの間に7個の柱穴が検出されており、その間隔は、東から順に、1.4m、1.2m、1.5m、1.5m、1.0m、1.0mであって、多少ばらつきがみられる。(PI., 48)

SA 3314 先の東西方向の掘立柱列の南、約0.7mに位置する同様の東西方向の掘立柱列である。柱穴の径は、約0.15mであって、その形状、深さ等、SA 3313に類似している。検出された柱穴は3個であって、その間隔は大きく、東が約5m、西が約4mの計9mである。土質の関係から、検出出来なかったが、やはり、SA 3313同様、もう少し柱配置は密であったものと考えられる。また、SA 3313との対応関係がみられないことから、この2つの掘立柱列は、同時に存在したのではなくて、いずれかがその造り変えであろう。(PI., 48)

SB 3320 屋敷の西半北寄に位置する礎石建物である。北西隅部を中心に礎石が残っており、他を欠くため、規模は明確でないが、礎石に沿う石列等から考え、東西は10m前後、南北は5mを超えると考えられ、大きな建物である。基本となる柱間寸法等は明らかでないが、北辺の西端部に、幅約2.4m(8尺)出約0.3m(1尺)の張り出しがあったようである。しかし、間取等は、明らかでない。この建物内と考えられる SX 3352は、東西約1.2m、南北約1.1m、深さ約0.1mの浅い土坑であって、この内部は木炭・焼土で埋っていた。炉跡であった可能性も考えられるが詳細は不明である。(PI., 47)

SB 3321 屋敷の西南部に位置する礎石と考えられる扁平な石群である。点在はするが、建物の規模や基本となる柱間等は明らかでない。

SE 3322 この屋敷の門 SI 1082に入って、すぐ北脇に存在する井戸である。内径は、約0.7m、深さ約

3.4mであって、井桁土台等はいらず、礎層上に直接自然石を円形に積み上げている。上部へ行くにしたがって口径を若干小さくするせり上げがみられ、底部の径は約1.0m程である。井戸の脇の比較的大きな扁平な石は踏石かとも思われる。石積の上部1m弱が若干みだれており、I期から存在したものをII期に積みかした可能性も考えられている。(PL. 51)

SE 3323 屋敷の北西寄りに位置する井戸である。口径は、約0.9m、深さ約4.4mと、先の井戸 SE 3322 に比べ少し規模が大きい。また、SE 3322同様、井桁土台等はいらず、礎層上に直接自然石を積み上げており、底部の径は約1.2m程であって、上部に向かって少し径を小さくしている。また、この井戸も、上部の石積が少し異り、I期のものを積みかした、II期にも使用した可能性も考えられている。現状の天端石は非常に大きく、径が約1mもあって、踏石を兼ねていたであろう。(PL. 51)

SF 326・3324 屋敷の北境界となる東西方向の土塁 SA 262に沿って存在する石積施設である。東に位置する SF 326は、石積面も良く残り、東西約1.8m、南北約1.2m、深さ約0.8mである。これから約3m西に位置する SF 3324は、東西約2.7m、南北約1.2m、深さ約0.9mである。共に石は2～3段に積み上げている。この2つの遺構は、I期の石積施設 SF 3325・3326に位置が良く対応しており、土塁位置の変更に伴い、これらの遺構も造り直されたものであろう。(PL. 51)

SF 3327 屋敷の南西隅近くに位置する石積施設である。東西約1.7m、南北約1.5m、深さ約0.4mであって、他の同様の遺構に比べ若干浅い。割石は1～2段である。(PL. 51)

SX 3333 屋敷の西半中程に位置する越前焼大甕を埋設した遺構である。この大甕は、胴部の径約0.9m、高さ約0.9mと大きなものであって、これの下方約0.6mを地中に埋め込んでいる。地中部はほぼそのまま残り、地上部であった口縁等は、打ち砕かれてこの中に大半が入っていた。周辺に礎石らしき石もみられ、建物内と考えられるが不明な点も多い。水甕等の用途が考えられよう。(PL. 51)

SX 3340 屋敷の中程南寄りに位置する、0.02～0.05m程度の非常に浅い灰溜りである。

SX 3341 屋敷の中程南部にあつて、先の灰溜り SX 3340の南に位置している。石の配列は、溝のようであるが明らかでない。溝とすれば、幅約0.2m、深さ約0.1m程であろう。南北方向に3石並ぶが、北端に小さな石が南に面を持って存在しており、ここで行き止まりか、あるいは東へ向っていたのではなからうか。

SX 3342 門建物 SB 3319の南脇にみられる東西の石の並びであつて、この門建物に関係すると思われる。また、この石の延長線で、東土塁 SA 979の西面石垣が少し様子を変えている(第37図、土塁石垣立面図参照)ことも、関係があるのかも知れない。

SX 3343・3350・3366 いずれも掘立柱穴である。先述した堀 SA 3313・3314の柱穴に形状は良く似ているが、断片的な検出であつて、詳細は明らかでない。

SX 3348 屋敷の北境界土塁 SA 262の脇、中程に位置する土壇である。長径約1.5m、短径約1.0m、深さ約0.25mで、炭・焼土で埋っていた。

SX 3362 西の山裾の東西の石列である。径0.3m前後の扁平な石が並んでいる。

SX 3364 屋敷の中程、やや南寄りに位置する遺構である。付近には礎石と考えられる石もあつて建物に関係すると思われるが詳細は明らかでない。

SX 3370 屋敷の中程、南寄りに位置する掘立柱穴である。径も小さく、杭のようなものであろう。

この他、石が集中する遺構等が若干存在するが、本来の遺構の形状等は何えず、不明な点が多い。

### 3. 遺物

第54次発掘調査は、一乗谷城下町のやや上城戸寄り、朝倉館跡からは一乗谷川を隔てて西南約120mの所で実施した。このあたりは『一乗谷古絵図』では朝倉氏の有力家臣である山崎長門守、斎藤兵部人輔をはじめとして、市原、平井、野洲将監、朝倉角三吾、河合安芸守などの屋敷名が書かれており、近世城下町という「侍町」を形成していた所といえよう。地形の観察結果からも、土塁を巡らした1,000から2,500mの広い屋敷割が、12区画以上整然と並んでいる様子が復元できる。しかし、絵図と地形からだけでは、どの武将がどの屋敷地に配置されていたのかを特定することは困難といわざるをえない。

そのような状況の中にあつて、遺構の項でも述べたように、第54次調査地は土塁で囲われた内部の田が、古くから「ショーグデン（将監殿）」と呼ばれていたことから、野洲将監の屋敷地の有力候補となっていた。野洲氏は、『越前国古城跡々館屋敷蹟』・『朝倉始末記』・『朝倉記』の鎌ヶ崎越前川滋賀合戦之条などの記事を総合すれば、九頭竜川の北岸、吉田郡永平寺町下津法寺に本拠を置く土豪であり、いざ合戦の時には、300余騎をひき連れて杉津口を守備する任務をもった中程度の大將とすることができよう。天正元年8月、刀根坂の合戦で野洲将監吉広は戦死したが、朝倉氏の信任もこの外厚かったようであ

器種	54次		器種	数量	割合	器種	数量	割合			
	数量	%									
日本製陶器	越前地	壺	900	10.8	中国製陶器	磁器	107	1.0			
		壺	537			磁器	24				
		鉢	46			磁器	1				
	鉄	鉢	200	0.4		磁器	18		0.17		
		鉢	3			磁器	4				
		鉢	3			磁器	4				
	鉄	鉢	43	0.4		磁器	76			0.7	
		鉢	1			磁器	82				
		鉢	13			磁器	6				
	灰	鉢	2	0.02		磁器	1				0.01
		鉢	3			磁器	6				
		鉢	3			磁器	1				
瀬戸	鉢	62	0.5	磁器	171	1.5					
	鉢	27		磁器	11						
	鉢	23		磁器	224						
土師	鉢	10	0.02	磁器	19		0.17				
	鉢	8		磁器	5						
	鉢	7		磁器	259						
瓦	鉢	4	0.02	磁器	588			5.3			
	鉢	7		磁器	1						
	鉢	79		磁器	15,638						
土師	鉢	2	0.02	磁器	34				0.3		
	鉢	2		磁器	7						
	鉢	13,061		磁器	6						
瓦	鉢	9	0.02	磁器	17	0.15					
	鉢	47		磁器	12						
	鉢	8		磁器	3						
瓦	鉢	8	0.02	磁器	1		0.01				
	鉢	9		磁器	35						
	鉢	13,134		磁器	115						
瓦	鉢	16	0.02	磁器	1			0.01			
	鉢	44		磁器	7						
	鉢	16		磁器	1						
瓦	鉢	1	0.02	磁器	1				0.01		
	鉢	7		磁器	2						
	鉢	84		磁器	21						
瓦	鉢	84	0.5	磁器	33	0.3					
	鉢	84		磁器	33						
	鉢	84		磁器	33						
計	15,049	96.22	計	33	0.3						

り、一乗谷城下町の中では一等地ともいえるこの地に、屋敷地を拝領していたものと思われる。

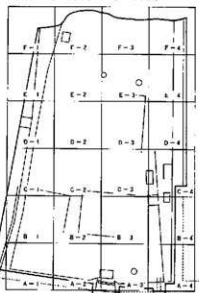
さて、発掘調査の結果、この屋敷地の遺構の残りは、かなり悪いことが判明した。とくに敷地の東半分では、II期の遺構面がほとんど削平され、外の一乗谷川の方へ掻き出された状態が明らかとなった。例えば、青磁壺(779)に照準をあてて考察を加えてみると、この壺はS13316のI期整地層から1片、

表13  
出土遺物一覧

SB 3319門跡のすぐ南側で2片、SB 3319門跡を出た所の「T」字、道路面から、第29次発掘調査の際に1片が出土し、同一個体として接合された。扉敷のほぼ中央付近で放棄された青磁蓋が、後世にI期整地層が削平された際、敷地の唯一の出入口 S I 1082から、道路へ掻き出された様子がよく知られるであろう。

さて、第54次調査で出土した遺物は、総数16,084点(表13)であった。陶磁器だけの構成比を調べてみると、越前焼10.8% (一乗谷での平均値は約30%)、瀬戸・美濃焼0.92% (同1.5~3.5%)、土師質土器84% (同55~65%)、中国製3.8% (同6~13%)であり、一乗谷の平均値よりも土師質土器が極端に多く、越前焼と中国製の青磁・白磁・染付の少ないことが判る。ここから出土した遺物は、土層で開かれていることから、他所から運び込まれたものや、掻き出されてきた遺物とは考えられず、武家屋敷、強いていえば鯉淵将監という武将の、日常生活用具の全てとみなしてさしつかえない遺物とすることができよう。

本報告では、擾乱が著しいため、遺構に確実に伴う遺物を抽出する作業は非常に困難であるといわざるをえないが、このことを念頭においた上で、遺物を①深掘トレンチ出土の遺物(遺構面の存在は不明であった)、②I期各遺構出土の遺物、③I期整地層出土の遺物、④II期各遺構出土の遺物、⑤II期整地層出土の遺物、⑥耕土・床土・擾乱層出土の遺物の合計6期に大別して記述を進めていく。



挿図16 第54次調査区グリッド名

グリッド	越前焼				瀬戸・美濃焼				土師質		瓦		青磁		白磁		染付	
	壺	甕	鉢	香炉	鉄角碗	茶碗	碗	灰皿	質皿	香炉	大鉢	瓦壇	碗	皿	碗	皿	杯	碗
A-1	48	6	2	4	1	1	1	77	-	-	-	1	-	2	2	4	-	-
A-2	186	47	2	3	2	-	-	96	-	-	-	2	1	17	-	4	3	-
A-3	25	37	1	4	2	-	-	86	1	-	-	2	1	-	16	1	4	5
A-4	-	-	-	-	-	-	-	41	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1
B-1	13	10	4	11	-	1	2	223	-	-	-	2	1	1	8	2	2	2
B-2	24	79	1	34	-	3	-	583	-	-	-	4	1	-	19	-	2	7
B-3	12	87	5	16	7	1	2	534	-	-	-	1	-	2	17	2	6	11
B-4	6	6	2	5	3	-	-	745	-	5	1	3	-	1	8	-	1	5
C-1	7	6	1	6	-	-	1	347	-	18	-	3	2	-	7	-	2	3
C-2	17	9	-	3	1	-	-	1,861	5	-	4	18	6	1	26	4	-	3
C-3	45	8	1	16	1	9	1	1,214	-	7	-	8	1	-	23	-	-	3
C-4	17	9	-	6	-	-	1	1,437	1	-	1	3	-	-	5	-	5	6
D-1	32	17	1	35	2	-	3	630	2	-	-	5	-	2	14	-	3	4
D-2	51	22	7	13	1	5	1	1,291	1	2	-	16	2	1	19	3	6	2
D-3	57	43	8	11	10	2	1	1,044	2	-	7	13	2	-	21	5	4	5
D-4	34	10	-	7	3	-	-	344	1	-	-	2	2	-	-	-	5	1
E-1	13	-	-	2	1	-	1	360	-	-	-	3	2	1	2	-	-	6
E-2	21	10	2	4	1	2	2	361	-	-	-	7	-	1	4	-	2	4
E-3	214	110	7	7	3	-	2	370	-	-	-	5	-	-	6	-	1	4
E-4	9	9	-	1	1	-	-	142	-	-	-	1	-	-	2	-	2	-
F-1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F-2	9	2	2	5	1	1	-	863	-	-	3	3	3	-	1	-	2	2
F-3	7	1	-	-	-	-	-	222	-	-	-	2	-	-	2	-	7	1
F-4	7	4	-	-	-	1	1	22	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2

表14 グリッド別遺物出土数(障層数は省く)

a. 深掘トレンチ出土の遺物 (PL. 52, 第45図)

調査区のはほぼ中央部に設けた南北トレンチで、I期遺構面より深く掘り下げた際に出土した遺物である。確実な遺構面は検出できなかったが、礎石らしい河原石や、炭・焼土混り土などがみられたことから、広く調査すれば、I期より古い時期の遺構が確認されるかもしれない。

**越前焼 罎** (601) は、Ⅲ群に相当するもので、肩から胴部にかけての屈曲は強い。スタンプは、深い格子と、凸字の「本」とみられる。摺鉢 (602) は、14本の摺目が間隔をあけて施されている。摺目は、底部よりかなり上方で終わっている。鉢 (614) は、溜餅 SF3325の底をさらに掘り下げた際に出土した。丸味のある口縁の先端に、1本の沈線を巡らしており、Ⅱ群に分類される。

**瀬戸・美濃焼 灰釉皿** (610) は、口縁部付近にのみ釉薬を施した小皿である。

**瓦質土器** (611) は、瓦質の火舎あるいは火鉢と思われる。底から胴部にかけて残存しており、復元すれば、直径25~30cmぐらいのものと思われる。全体に明るい褐色を呈しているが、底部内面と、獣脚の先端は焼成時に黒く変色している。脚の作りや、指での押え、突帯の貼りつけ方、細部にわたるへらの使い方などみても、無難作な仕上がりの中にも、作り慣れた職人の様子がうかがえてくる。この製品は、奈良の火鉢座などから購入したものと考えてよいかもしれない。

**中国製陶磁器 青磁碗** (612・613) は、14世紀後半から15世紀頃の古手のものである。とくに (613) は、口縁外面にくずれた富文帯を描いている。

b. I期出土の遺物

I期の遺構としては、建物 SB3316・3317・3318、溜餅 SF3325・3326、SX3371などがある。

**SB3316出土遺物** (PL. 52・53, 第45・46図)

**越前焼 摺鉢** は3個体分出土した。(615) は、摺目12本で、片口がみられる。口縁は丸味をもち、少し下った所に沈線が巡る。底部見込にも摺目があり、Ⅲ群に相当する。

**土師質土器** (621) は、口径6.2cmの小さな罎釜である。下方に脚が付くのか、また、実際に使用されていたものか、ミニチュアとして製作されたものかは不明である。類例の少ないものといえよう。

**瀬戸・美濃焼 灰釉罎** (622) は、復元径約30cmという大きなもので、鉢ともいえよう。口縁内側に突帯が回り、蓋受けのようにになっている。全体に2次の大火を受けてかせており、灰釉は黒い漆状のものとして、外面と内面の口縁部付近に付着しているのみである。鉄釉小皿 (623) は、内面全体と、外面口縁部付近に釉が施されている。底部には糸切痕が明瞭に認められる。

**中国製陶磁器 青磁碗** (624・626) は、線描蓮弁文碗、(625) は、線蓮弁文碗である。皿(627) は、口縁が折線になっており、内面見込に印花文がみられる。外面には蓮弁の削り出し文様があるが、かなり雑に作られている。外面底部は、中央部を残して、釉が拭きとられている。壺 (629) の口縁は、折線となった椀花形式で、内面は、蓮弁文様を意識したへらの押えがみられる。白磁八角杯 (631) は、口径7.5cmの小さなもので、8面きれいに面取りがなされている。白磁釉は、透明度が悪く、胴下部から高台にかけては釉薬は施されていない。この杯の胎土は、少々ボソボソの土を使っている。(632) は、靴釉の壺と思われる。器壁は、0.5cmと薄く、茶壺に使用された褐釉四耳壺の破片であろう。同一個体としては (657) が上げられる。

**金属製品** (633) は、刀で、長さ21.5cmが残存している。幅2.8cm、鋒の厚さ0.5cmである。(634) は小

柄、(636・637)は鉄製の小札である。

**石製品** (638)は、茶臼の下臼である。軸穴は方形に穿たれており、直径は20cmである。楕目の溝は、8分歯12本で構成されている。受け部は、復元すれば直径40.5cm程度となる。

**SB 3317出土遺物** (PL. 54, 第47図)

**土師質土器** 図示した7枚の土師質皿(639~645)は、特長ある出土状況であった。建物SB 3317の西辺礎石列に沿って、南から(645)が1枚、その北約0.9mの所から(643・644)の2枚が重なって、また、それより北約1mの所から(639・640)の2枚が重なって、さらに、北辺礎石列のはは中央付近で(641・642)の2枚が重なって検出された。土師質皿そのものにはさほど特長もなく、灯芯油痕も(640・645)の2点については認められなかったが、他の5点には明瞭に認められ、灯明皿として使用されていたことが判る。建物の周辺で2枚づつ重なった状態で出土したことから、地鎮具と考えることも出来そうである。他に上蓋の鈔の部分も1片出土している。

**瓦質土器** (647)は、瓦質の火鉢であり、直径27.5cm、高さ18cmを計る。口縁部は肥厚するとともに内側に折れ曲っており、その上面は、突帯と、波状の突帯の2本が装飾として巡っている。側面にも両側から交互に押えつけて波状にした突帯が2本めぐっており、その間には、14弁からなる菊花文様が貼りつけられている。この菊花文が、2単位あるいは3単位であったかは、欠損部が多くて不明である。底部は、厚さ0.5cmと非常に薄く、内湾している。

**中国製陶磁器** (648)は、線描蓮弁文様の青磁碗である。破片の断面に、漆が塗られており、当時の補修の跡がよく知られる資料である。

**SB 3318出土遺物** (PL. 54, 第47図)

**瀬戸・美濃焼** (650)は、灰釉の卍皿である。口縁は卍皿特有の肥厚化がみられ、この付近のみに釉薬が施されている。口径は15.1cmで、口縁の2cm程度下った所から内面見込にかけて、1本1本へらで卍目が刻まれている。底部は、回転糸切痕が明瞭に残されており、15世紀の卍皿といえよう。

**瓦質土器** 図では示さなかったが、この建物から瓦葺の臺の窓の部分が1片出土している。

**中国製陶磁器** 青磁の碗は7点出土している。(651)は、蓮弁文を削り出した碗であり、(652・653)は、線描蓮弁文碗である。白磁皿(654)は、口径12.8cmの端反りのものである。高台の底部には、コバルトブルーの吉祥句あるいは字款が描かれているが、崩れて描かれているため、その内容については不明である。白磁皿(655)の見込の界線や唐草文様は、白磁釉に上絵付をしたものであろうが、その手法は判然としない。(656)は、透明度の悪い白磁釉を施しているが、胴下部から高台にかけては無釉の坏である。この露胎部は黒くなっている例も多い。高台の三方は、浅く削り込まれた切高台であり、内面見込には2個の目跡が認められる。15世紀前半頃の遺物といえよう。(657)は、襦袢(四耳)帯の破片と思われる。(632)と同一個体であろう。この破片は、帯の肩部付近のもので、文様がスタンプされているようであるが、何かは不明である。

**金属製品** (658)は、鉄製の小札で、残存状態はかなり良い。残存する長さ約7cm、幅2.5cm、厚さ0.2cmで、2列×8個の円形穴のうち、左の6個は0.4cmと大きく、右の7個は0.2cmと小さく穿たれている。また、右端が緩く湾曲している。(659)は、用途不明の鉄製品である。強いて考えれば、鼓前の鍵になるかもしれない。(660)は、銅製小杯の口縁部破片である。(661)のような釘も10本以上、それに鍍手金具のような鉄製品も図示できなかつたが検出されている。

**SF 3325出土遺物** (PL. 55, 第48図)

**越前焼** 越前焼では、甕2片、播鉢も(662)他1片が出土している。

**土師質土器** 50頁の所で一括して述べるつもりであるが、この溜煎からも多くの土師質皿が出土している。灯芯油漬が、口縁部にべっりと付いているもの、ほんの少ししかみられないものなどさまざまな皿が出土している。(663)は手づね、(666)は、白い胎土を用いて器壁を非常に薄く成形している。(667)は、円孔が穿たれた土師質土器で、そのすぐ横に、もう1孔穿とうとした跡も認められた。

**瀬戸・美濃焼** 灰釉の即皿片が1点出土している。

**瓦質土器** 瓦焼の蓋は、2点ある。(668)は、火壇窓の部分であろう。瓦質火鉢の底も検出されている。

**中国製陶磁器** (669)は、線描蓮弁文碗で、(670)は、無文の青磁碗である。

**金属製品** (671)は、銅製水筒で、底が欠損しており非常にろくなっている。円形で、中央に頸部が取りつけられている。(672)は、不明銅製品、(673-675)など、鉄釘片も15点ほど出土している。

**石製品** (676)は、砥石で4面とも平滑である。小口面は、斜めに切断され、直径0.3cmの円孔が、深さ0.6cmまで穿たれている。

**その他** (677)は、魚の骨片であるが、その種類や部位は不明である。

#### SF 3326出土遺物 (PL. 55, 第48図)

**越前焼** (679)は壺の頸部破片、(678)は、鉢もしくは播鉢の破片で、他に甕が5点出土した。

**土師質土器** 土師質皿は、多く出土している。(683)は、口径10.3cmを計る土釜である。

**金属製品** (686)は、嘉祐通宝銭である。他の銅銭は、第61図に拓本でまとめておいた。

#### SX 3371出土遺物 (PL. 55, 第48図)

石列を伴った土塚で、埋土の粘質土中から多くの土師質皿が出土している。

**瀬戸・美濃焼** (693)は、黄天目茶碗である。約3分の1が残存していた。鉄分の多い泥漿を化粧がけした茶地と、かせた軸薬との対比があざやかで、しっかりと落着いた茶碗といえよう。瀬戸で焼かれたものであろう。

**中国製陶磁器** (694)は、内面見込みに玉取獅子の文様を描いた染付皿で、(695)は、外面に草文の描かれた苜蓿底の染付皿である。

**木製品** 朱漆塗りの碗が出土している。しかし、木部は全く腐蝕して欠損してしまっており、朱漆のみになっている。

**その他** 梅の種子が数個採取された。

#### I期整地層出土の遺物 (PL. 56-59, 第49-52図)

ここからの遺物は、I期の遺構を埋め、II期遺構面を作る際に整地した土層からの出土であり、屋敷全体を一括してとりあつかっている。

**越前焼** 大甕は、胴部片が多く出土している。(696)は、口縁帯をもつものと思われ、古手のI群に分類される。(697)は、口縁帯が退化しつつあり、内面の凹線が少した位置にあることなどからII群に分類できる。(698-699)は、口縁上面が平坦かつ肥厚しており、IV群に分類できる。大甕の記号は、(700)が「H」、(701)が「中」をへらで描いている。(702)は、胎土や格子目スタンプなどを詳細に検討した結果、深掘トレンチ出土の(601)と同一個体であった。

壺(704)は、底部破片である。黒漆が、内面と外面底部に付着していた。(706)は、口径15cm程度の壺で、口縁端部を、外方へ少しつまみ出している。口縁の少したった所に1本の凹線を巡らしている。



(709)は、特徴として外面肩部付近と思われる所に、櫛縞の文様が刻まれている。

鉢(710)は、丸味のある口縁部に1条の凹線を巡らした古手のものである。外面には、黒くなった粒子が斑点状にみられた。胎土中に含まれている可燃性の物質が、2次的な火を受けて煤化したものと思われる。(711)は、口径13cm、深さ5.5cmの小形鉢である。口縁は少し内湾しており、蓋受けのような形を呈している。

櫛鉢(714・715・718)は、口縁が丸味をもち、皿群に分類される櫛鉢である。(714)は、片口でざらざらした砂粒を多く含む胎土である。(718)は、片口であるが、痕跡程度にしか認められない。櫛目は9本であり、同じ櫛を使用して半円弧状の文様を2個描いている。内面見込みには櫛目は認められない。(719)は、口縁が内傾して切られており、内面には沈線や段は認められない。櫛目は8本である。器高は8.8cmと全体に小ぶりである。なお、外面にも6本の櫛で描かれた文様が1カ所にみられた。

**土師質土器** 土師質皿は、表15のようにこの層で多く出土している。(721~744)の土師質皿のうち、いわゆるヘソ皿と称されるA類は(724)、手づくねで製作されたB類は(722・723)、粘土円盤を皿状にし、口縁部を親指・人差し指ではさみナデ、口縁内側の段または凹線をつけ、口縁を整え、次に器体を逆に回しつつ正方向のナデを行ない、1周した位置でナデ抜くC類は(721、725~729、731~733、735~738)、広い見込と平坦な底部をもつ1群のうち、口径12.5cm以下のD<sub>1</sub>類は(730・734・739・740)、口径13.5cm以上のD<sub>2</sub>類は(741~744)であった。さらに、図示しなかった完形に近い土師質皿16点も任意に抽出して各類に分類すると、A類1点、B類4点、C類21点、D<sub>1</sub>類7点、D<sub>2</sub>類7点の計40点であった。次にA類(724)の重さを計ると26.3g(約1%)、B類の重さは83.6g(4%)、1点平均20.9g、C類は888.3g(40%)1点42.3g、D<sub>1</sub>類は491.4g(22%)1点70.2g、D<sub>2</sub>類は714g(33%)1点102g

であった。土師質皿の総重量から推定を試みれば、A類は、 $45,645 \times 1\% = 456.5 \text{g}$ 、 $456.5 \text{g} \div 26.3 \text{g} = 17$ 個となる。

以下同様に、B類は1,826g、87個、C類は18,258g、432個、D<sub>1</sub>類は10,042g、143個、D<sub>2</sub>類は15,063g、148個であった。この層からは最低827個の土師質皿が検出されたことになろう。また、A類は(724)1点だけであるが、灯芯痕は認められず酒坏もしくは盛皿と考えられた。B類は4点中1点のみが灯明皿として使用されている。C類は21点中13点か灯明皿として、D<sub>1</sub>類は7点全てが灯明皿として使用されていた。D<sub>2</sub>類は、7点全てが盛皿と考えられる。(741・742)のD<sub>2</sub>類皿は、SX 3371のすぐ東側で発見されたものである。2枚の口縁を合せた状態で出土した。遺構には伴っていなかったようであるが、八王子城跡では、扁平な板石の下に、楕円形のピットが発見され、その中に同大同形の素焼の鉢形土器を合せ口に重ねて埋納した例が報告されている。土器からはかなり磨り減った墨が1片発見されたことから、男子出産後(女子の場合は、針など)のエナ処理用の土器とみられている。(741・742)の土師質皿がこれに該当するかどうかは不明であったが、注目してよ

出土地	重量
深掘トレンチ	1,745 g
SB 3316	3,330 g
SB 3317	995 g
SB 3318	1,700 g
SF 3325	2,585 g
SF 3326	1,530 g
SX 3371	1,535 g
I期整地層	19,240 g
SA 979	20 g
SA 3310	840 g
SB 3319	5 g
SB 3320	1,225 g
SB 3321	200 g
SE 3322	20 g
SE 3323	40 g
SF 3326	260 g
SF 3324	2,475 g
SF 3327	2,090 g
SX 3333	90 g
SX 3348	70 g
SX 3352	170 g
SX 3364	260 g
II期整地層	50 g
横土・床土・攪乱層	5,170 g
合計	45,645 g

表15 土師質皿の総重量

い遺物といえよう。

**瀬戸・美濃焼** 天目茶碗は7点出土した。(754)は、小さな破片であるが、大海茶入である。

灰釉は、皿が4点、碗が9点出土した。(756)は、線描蓮弁文碗で、青磁碗の写しである。(758)は、鉄釉天目茶碗と全く同じ作りの灰釉碗である。器壁も非常に薄く焼かれており、胴下部は露胎のままであるが、なかなか丁寧な作りのものである。(762)は、灰釉鉢で、他に2点出土している。卵皿(760)の底部には、糸切痕が明瞭に認められる。

**瓦質土器** 瓦質火鉢は4点ある。(763)は、頸部破片で、外面に15弁の菊花文様が押印されている。(765)も火鉢の頸部とみられる。香炉(776、他)は、8点出土している。いずれも、口径7cm、高さ5cm程度の小型のもので、外面には縦方向のへらみがきか施され、「S」字状のスタンプが巡っている。(769)は、瓦椀(乗燭ともいう)の蓋である。瓦燈は、釣鐘状の蓋部(769)と、台部(後で述べるが、(920)は口径を小さく復元しているが、(769)とセットで使用されたものかもしれない)とから成っている。台部中央と、蓋の頂部には、灯明皿を乗せる受け皿が作りつけられている。また、台部の口縁から上方に延びる目隠板と、蓋部の側面に開けられた窓とのスリットの兼ねあいで、光量が調節できるように工夫されている。蓋部の受け皿は、穴が穿たれており、灯明の油が少しでもたまらないようになっている。瓦燈の使用法は、まず夜常には蓋の頂部の受け皿に灯明皿をのせ、昏か寝静まった時にも使用したい時には、灯明皿を台の中の受け皿に移し、蓋をし、目隠板と窓とで光量を調節したものであろう。江戸時代の遺跡からは、よく出土例が知られるようになってきたが、室町時代の瓦燈としては、一乗谷の例があるのみである。また、江戸時代には、浮世絵などで、貧しい人々や遊女達の灯火具として描かれている例が多く、行燈や燭台に比べれば粗末なものとして扱われてきているが、一乗谷出土のものは、室町時代のものであること、作りや外面の縦方向のへらみがきなどが非常に丁寧であること、寺院や武家屋敷などから主として出土していること、出土量が非常に少ないことなどから、江戸時代の瓦燈の概念をストレートに導入して述べることは出来ない。

**中国製陶磁器** (770-777)は、青磁碗である。(771)は、無文であり、口縁は端反りになっている。(772)も無文の碗であるが、内面見込みには花文様が押印されている。(770・773・776)は、線描蓮弁文碗。(774)は、古手の蓮弁文を削り出した碗で、鑄はみられないが、弁端などは丁寧に削っている。(777)は、蓮弁を深く削り出した碗で、内面には片彫りの草花文が描かれている。(778)は、青磁水注の注口部破片である。断面に黒漆が付着しているので、当時破損したのを接合して使用していたことが判る。(779)は、青磁の蓋である。外面は型押しで製作されているため、内面には指による押圧痕が顕著である。外面には、亀甲文や卍文などが装飾としてみられ、把手も付いていたものと思われる。(780)は、青磁盤で5破片同一個体のものが出土している。

白磁皿(781・782)は、口充タイプのもので、底部は少し上げ底になっている。高台は、萐箭底状になっているため、あまり目立たない。内面見込みには単文などが刻まれているものと考えられる。皿(783)は、内面見込みに印花文が施されている。外面胴部までは釉薬がかけられているが、胴下部から高台にかけては、露胎のままである。高台底に描かれた、黒漆の3本線については、文様か文字かは判然としない。(784)は、釉薬の発色も良い腰折れタイプの白磁皿である。白磁環は、25片以上出土している。(788)のような白磁環と、(794-796)のような、外面が8面に面取りされた白磁八角環とがみられる。いずれも白く濁った釉薬が施されており、胴下部から高台にかけては露胎である。八角環の高台台付は、浅く切り込まれた切高台となっており、内面見込みには、目跡が残されている。また、(793)

のような、胎土も良く、釉薬もあざやかに発色した白磁八角坏も若干出土している。

染付については、小野正敏氏の「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会）に基づいて記述していく。染付碗は（799～803）がある。（799・800）は、B群の口縁部が端反りになった碗で、外面には唐草文が描かれている。（801）は、C群に、（802）はE群に相当する。染付皿は（804～811）がある。（806・811）は、外面に渦状に裝飾化された唐草文が、内面にはアラベスク文様が描かれたB群Ⅱであり、（808）は、外面に唐草文、内面見込みに下取獅子文を描いたBⅠ群Ⅱで、（809）は、内面見込みに十字花文を描いたBⅠ群Ⅱである。（812）は、水注、壺、あるいは瓶などの頸部破片である。外面は、8面に面取りされており、ラマ式蓮弁ではないかと思われる文様、七宝文、雲文などが、界線で区画された中をそれぞれ巡って描かれている。内面は露胎であり、ログロ目がよく残されている。明時代でも前半頃に相当しよう。

（813）は、黒釉の犬目茶碗である。

**金属製品**（814）は、長さ26.5cmの鉈である。（815）は、銅製紅皿であるが、上から押えつけられてつぶれた状態出土した。（816～818）は、小柄であるが、（818）は、柄部とみられる所に、木質が付着しているので、小刀とみることもできよう。（819）は鉄製小札である。

**石製品**（821）は、長方形の石製碗である。（822）は、福井市の足羽山から産出される凝灰岩（笏谷石と地元では呼ばれている）製の火炉（火箱またはバンドコと呼ばれている）の蓋である。

**木製品**（823）は、長さ19.8cm、方形の柄穴が前・後2カ所ずつ穿たれた露下駄である。前壺穴が少し右に寄っているが有足用の下駄と思われる。歯は、後歯がよく残っていた。高さ4.8cmで裾穴がりになった「銀杏歯」と称されるものである。上部は針葉樹、歯は広葉樹である。

### c. II期出土の遺物

II期の遺構としては、土塁 SA 979・3310、溝 SD 269、暗渠 SZ 270、建物 SB 3319・3320・3321、井戸 SE 3322・3323、溜井 SF 326・3324・3327、SX 3333・3352・3364などがある。

#### SA 979出土遺物（PL. 60, 第53図）

**越前焼**（824・825）は、越前焼B類で、この土量から、ほぼ1個体分が出土している。頸部は、胴部から明確に垂直ぎみに立ち上り、口縁部は、ほぼ水平で平坦になっている。大塚分類では口縁が肥厚しはじめつつある所がIV群aの特長となっており、この製もほぼその時期に相当する。底径は23cmを測る。窯の熱を片方から強く受けたため、壁の一方は、自然釉がかけて灰白色に変じている。肩には、「↑」のヘラ記号がみられるが、格子目のスタンプは認められなかった。（826）は、お南黒である。（828～830）は、鉢であるが、（830）については、火鉢あるいは、火桶である可能性もある。

**石製品**（831）は、珍しい石製の風炉である。口縁は、高さ2cm立ち上っており、この部分のみ、内面も丁寧にみがかれている。胴部には、窓が穿たれている。（832）は、石製バンドコで、平面形は「D」字形のタイプである。

#### SA 3310出土遺物（PL. 60, 第53図）

**越前焼** 甕は、40片、壺は、12片、播鉢は、33片出土している。（838）は、火桶である。越前焼とみられるが、外面は、凸・凹を強調して成形されている。底部には、下駄印状に、黒いタール状のものが付着している。

**中国製陶磁器** (839) は、腰折れの青磁皿である。(840) は、青磁盤。白磁皿は8片出土しているが、(848)と同じ端反りのものである。

**石製品** 石製バンドコ窓の部分、方形の石盤などが出土している。

**SD 269出土遺物** (PL. 60, 第53図)

**瀬戸・美濃焼** (841) は、鉄釉の壺または瓶である。器壁は、0.8cmと比較的厚めに、ロクロで挽かれている。口縁は、ラッパ状に大きく外反し、頸部内面には、しぼりの痕跡が残されている。内面にもサビ釉が施されている。(842)の鉄釉は、黒釉に近い色あいで、内面と、外面は底部近くまでかけられている。底部には、糸切り痕がある。

**中国製陶磁器** (843・844) は、青磁皿で、(844) は、碁笥底となっている。(845) は、青磁酒会壺の蓋の破片とみられる。

白磁では、(847・848)のような皿が12片ほど出土している。全て端反りのタイプである。

染付皿(846)は、外面に芭蕉葉文、口縁部に波濤文帯を描いた碁笥底のもので、染付皿C群Iである。

**SZ 270出土遺物** (PL. 61, 第54図)

**瀬戸・美濃焼** (849) は、灰釉盤である。口縁端を外方に折り返した折縁タイプのものである。胎土は、良質の土を使っており、透明感のあるおだやかな灰釉を施した釉調のすぐれた作品といえよう。

**中国製陶磁器** (850) は、外面は無文、内面見込みに印花文のみられる青磁碗である。(851) は、青磁菊花皿で、胴下部から高台にかけては露胎である。(852) は、染付碗E群IXのマンローシン型のもので、外面には4単位に飛馬文と如意雲文様が描かれている。内面見込みに如意雲文様が、高台内には文字が書かれているが、何という文字かは不明である。

**SB 3320出土遺物** (PL. 61, 第54図)

**土師質土器** (857) は、D<sub>2</sub>類の上師質皿であるが、口縁のすぐ下に、直径0.4cmの円孔が1つ、内側から穿たれている。他には、土釜の底部なども出土している。

**瀬戸・美濃焼** (856) は、鉄釉の小皿である。靴葉は薄くかけられており、外面は、口縁直下から底部を露胎のまま残している。

**瓦質土器** (858) は、「S」字状のスタンプを外面に押圧した瓦質香炉である。

**金属製品** (860) は、銅製かんざしである。長さ20.3cmの完形品で、頂部の耳掻きもよく残っていた。頂部から二又に分れた所には、幅0.7cmの銅板を折り曲げて、5弁の花模様とした飾りが付属していた。

**SE 3322出土遺物** (PL. 61, 第54図)

**金属製品** (869) は、高さ17.1cm、口径7.8cmの銅製水差である。口縁部は、短かく外反しており、蓋の付く構造にはなっていない。取手は、幅0.9cm、厚さ0.3cmのものが、鋳でつなげられていた。注口部は、欠損していたが、こども鋳で左右からとり付けられていたものと思われる。底部は、円形の小さな脚が3つ付いた円形の板をはめ込んで作られている。この水差は、何に使用されたものであるか、よく分からないが、生花用の花器とみなすこともできるだろう。いずれにしても銅器としては優品といえよう。

**石製品** 石製の方形盤が破片であるが出土している。

**木製品** 器壁を薄く挽いて、全面に朱色の漆を塗った椀である。

**SE 3323出土遺物** (PL. 62, 第55図)

越前焼 (870・871) は、越前焼の甕である。(870) は、口縁帯にかわって外側に被、内側に浅い凹線を巡らしたⅢ群 b に、(871) は、口縁の高さが減るとともに、口縁上端が水平で肥厚するⅣ群にそれぞれ分類できる。(885) は、口径14.8cm、高さ41.3cmの均整のとれた壺である。口縁端部は、軽くつまんで外上方へ少し広げている。口縁端部と胴下部には、暗褐色を呈した漆が附着している。破損した部分の補修に漆を使用している例は、よく見られるが、この壺に関しては、補修のための漆ではない。肩部は、丸味をもち黄緑色の自然釉が垂れている。胴部は褐色で、全体として非常に重量感のある壺といえよう。(886) の甕は、口径11.7cm、高さ42cmを測る。口縁部は欠損しているが、同一個体とみられる破片から図は復元した。肩部は、(885) に比べて張りをもち自然釉がきれいにかかっている。この壺は、かなり的高温で焼成されているため、赤褐色を呈し、肩部の自然釉もかき、灰色の胎土を見ている部分も多くみられた。肩部には「青」のヘラ記号が刻されている。壺は、(872-874) の他にも口縁部の破片がまとまって出土している。(878) は、口径約60cm、深さ約15cmの大平鉢の破片である。口縁は、ほぼ水平に切られている。類例は、朝倉館跡の発掘調査で出土した中にある。

瓦質土器 (881) は、朝倉氏遺跡で初めて出土した瓦質の長方碗である。長さは不明、幅は推定 5.8cm、高さ1.6cmを測る。内面は楕円形で、視測縁帯幅は0.4cmであるが、視頭部縁帯幅は1.0cmと広がっている。石碗の型式分類では、長方碗Ⅲ Bc タイプである。

石製品 (887) は、筋谷石製のバンドコのみで、ほぼ完形に復元できた。口縁は、長径21.5cm、短径16cmで、高さは15cmを測る。底部平面は、楕円形を呈し、若干上げ底になっている。火窓は、4.5cm×1.5cmの長方形のものが、6ヶ所に穿たれている。内面の底は、灰で隠れるため、ノミ跡が荒く残されている。バンドコ片は、他に3片、また、図示できなかったが、高さ15cmの(長)方形の石製盤や楕円形の石製盤、炉壇石の破片なども出土している。

木製品 (882・883) は、杉材で作られた木桶の側板である。(882) は、長さ13.3cm、上幅7.5cm、下幅8.1cm、厚さ0.9cm、(883) は、長さ12.7cm、上幅7cm、下幅7.5cm、厚さ0.9cmを測る。底板や、蓋をした跡は残っていない。(884) は、木製の蓋である。火を受けて約半分欠損しているが、楕円形のもので、漆の塗られた痕跡はない。

#### SF 326 出土遺物 (PL. 63, 第56図)

土師質土器 (890) は、土師の破片である。

金属製品 (893) は、金銅製の環付金具である。挿入された部分は、割りピンになっており、その折れ曲り具合からすれば、厚さの薄い器材にとりついてたものと考えられる。

#### SF 3324 出土遺物 (PL. 63, 第56図)

土師質土器 (894) は、B類に分類される手づくの皿で、灯芯痕が認められる。(904) は、土師質土釜の胴部片であり、底部片も出土している。

瓦質土器 (905) は、瓦質の香炉であるが、胎土は黄土色で、黒色には焼成されていない。外面には亀甲形のスタンプが巡っている。

中国製陶磁器 青磁片1、白磁片1、染付碗片7・皿片1が出土している。染付碗(906)は、胴部に梅月文を描いたもので、断面には接合のための漆が附着していた。

#### SF 3327 出土遺物 (PL. 63, 第56図)

土師質土器 (913) は、底部が薄く平らで、口縁部に凹線をもたない土師質皿である。とくに、側面と底部との境に稜が見られる所から、朝倉氏遺跡出土の土師質皿の中では、成形の特異なものであるとい

えよう。(916)は、十師質皿の破片であるが、片面に金泥が塗られている。彩糸皿として酒環などに使用されたものであろう。(917・918)は、口径2.8cm、高さ約2.5cmの小壺である。(919)は、土師質土蓋であり、他に4片出土している。

**瓦質土器** (920)は、瓦燈の台部破片2点である。口径約15.5cm、高さ約4.5cmに図上でおもいきって復元してみた。脚部や目隠板などは、京都や東京の江戸時代遺跡から出土したものを参照している。瓦燈については、(769)の瓦燈の壺の項で詳述しておいた。

**木製品** 折敷の板片や、杉の板材など、若干の遺物が出土している。

**その他** (925・926)は、自然の石にしては比重が軽く、とくに(925)は水中では浮いている。また、(927~938)は、植物の種子である。小さい方の(930~938)は、瓜とみられる。(939~952)は、鳥や魚、小動物等の骨片である。これらは、便所ではないかと見られる溜枳から出土しており、食事の際の生ゴミとして廃棄されたものといえよう。

#### SX 3333出土遺物 (PL. 64, 第57図)

この遺構は、井戸SE 3323の水環として使用された越前焼の大甕(953)を埋設した施設をさす。この大甕の中からは、以下の遺物が出土したが、人頭大の河原石によって埋められた状態を呈していた。

**越前焼** 越前焼大甕(953)は、口縁長径81.5cm、短径74.5cm、胴径86cm、高さ86.5cmを測る。口縁端部は水平で、3.5cmと最も肥厚した狭IV群タイプのものである。肩部やや上方に、凹字の「木」と格子目のスタンプが軽く押圧されている。「Ⅲ」のヘラ記号がある。内面には、輪轆み成形の跡が、指の連続した押圧痕としてみられ、15段ほどの粘土板で輪轆みされている様子が分かる。他に、鉢、指鉢片が各1点づつ出土している。

**石製品** (963)は、バンドコの身の破片である。平面は楕円形を呈し、底部は周囲が高台状で、中央部が上げ底となっている。

**その他** (955~962)は、長さ約6.5cm、幅0.8cm程度の薄いと紙とみられるものを何枚も重ねて、縦で縦じ合せたあと、黒漆を厚く塗って固めた鋸の札と考えられる。(967)は桃、(973~979)は瓜の種子である。

#### SX 3352出土遺物 (PL. 64, 第57図)

**瀬戸・美濃焼** (981)は、灰褐色のかかった折縁鉢である。口縁部の作りからすれば、卸皿になるかもしれない。

**石製品** 図示できなかったが、粘板岩製の剝離した石製硯が出土している。

#### SX 3364出土遺物 (PL. 64, 第57図)

**中国陶磁器** (984)は、内面見込みに蓮華文が大きくスタンプされた青磁皿である。(985)は、折縁の青磁鉢。(986)は、白磁八角杯で、白濁した釉薬が施されている。胴下部から高台にかけては、露胎である。

### II期整地層出土の遺物 (PL. 64, 第57図)

II期整地層は、削平された所が多く、また、耕土・床土・攪乱層との区別もかなり困難なものであった。ここでは、主として床土下として取り上げた遺物について述べることにする。

**越前焼** 甕や壺片が少しみられる。口縁内側に、ヘラを縦に押しつけて膏口を付けた壺もみられた。

**中国製陶磁器** 白磁皿7・杯3、染付碗3・皿5・杯1など、細片が若干出土している。(987)は、

染付の大体で、器壁は厚く、外面にはラマ式蓮弁の中に雲文が、内面見込み周辺に界線が描かれている。  
**金属製品** (988) は、長さ46.5cm、中央での幅約7.5cm、厚さ0.7cmを測る湾曲した鉄器である。上方端部は、平らな面であるが、下部端部は、片刃状に少し尖っている。鍛造品なら、打ち延した痕跡として層状の刺離面をもつが、この鉄器は、全体にボロボロになっている所から鍛造品と考えられる。いずれにしても、用途不明のものである。

**石製品** 楕円形の石製盤が出土している。脚が削り出されているが、破片のため、何脚であったかは不明である。

#### d. 埴土・床土・攪乱層出土の遺物 (PL. 65~67, 第58~60図)

**越前焼** (989~994・999) は、越前焼甕である。(989) は、口縁帯をもち、口縁内側には桶状の凹縁がつく。(990・991) は、Ⅲ群、(993) は、Ⅳ群 a、(994) は、口縁が肥厚したⅣ群 c である。(999) は、胴部に突帯を巡らす甕である。他に甕は、コンテナバットに1箱分出土している。

壺は、(995~998) がある。(995) は、口縁端部を指でつまんで外反させている。(998) は、外面肩部に緑色の自然釉がかかったお歯黒壺である。「( )」のヘラ記号が刻まれている。亦は、他に外面胴部に菊目文様が刷まれているものや、「□」のヘラ記号をもつお歯黒壺、底部に下駄印のみられるものなど、約35片出土している。

鉢は、(1000~1004) がある。(1002) の鉢は、内面に扇状の菊目文様を2個刻んでいる。(1003) は、口縁が2.2cmと肥厚した鉢であり、他にも14片ほど出土している。

楕鉢は、(1005~1011) がある。全てⅣ群タイプのもので、口縁は内傾して切られ、断面三角形に近くになっている。(1005・1007) は、口縁下に沈線を巡らしていない。(1011) の楕鉢は、直径8cmの円盤に打ち欠いており、遊戯具か何かに再利用されたものであろう。楕鉢は、他にもコンテナバットに3分の1程度出土している。

**土師質土器** (1012) は、丸皿である。他に3片出土しているが、蓋として使用される場合もある。土蓋は(1016~1018) があり、他に外面に煤の付着しているものなど8片の破片も出土している。その他に、土鈴の破片1、それに皿の1ヵ所に粘土をひねり出したつまみをもつ土師質皿E類に分類される受け皿のつまみ部片も出土している。この破片は、時期的にみて新しい遺物である。

**瀬戸・美濃焼** (1019~1025) は、鉄釉製品である。大目茶碗は19片出土しているが、(1019) は、口径11.5cmで口縁部に返りをもつ一般的なものである。(1020) は、口縁端部の屈曲がほとんど見られない。これらは、胴下部から高台にかけてサビ釉を化粧がけしている。(1022) は、鉄釉茶人である。胴下部までかけられた鉄釉は、釉だまりもなく直線的になっており、底部には、回転糸切痕も残されている。(1023・1024) は、鉄釉の壺である。

(1026~1038) は、灰釉製品である。(1026・1027) は、青磁写しの灰釉線描蓮弁文碗、(1028) は、無文の碗、(1029) は、灰釉大目茶碗である。(1031) は、口径10.8cm、高さ2.5cmを測る腰折れタイプの灰釉皿で、外面胴下部から高台にかけては、ヘラ削り成形しており露胎となっている。内面見込みには、3ヵ所の目跡が見られる。(1034~1036) は、卸皿で、とくに(1036)の底部には、回転糸切痕が明瞭に残されている。(1038) は、盤であるが、2次的な火を受けて変色している。

**瓦質土器** (1039) は、瓦質の方形火鉢である。口縁は、幅5.5cmの鈎が内側へ水平に張り出しており、外面には、2本の突帯を巡らし、その間に珠粒を配している。

中国製陶磁器 (1040~1046) は、線描蓮弁文の青磁碗である。(1047~1048) は、青磁皿で、(1048) は端反りの口縁である。(1049) の皿は、内面見込みの釉を輪状にカキ取って露胎としている。

白磁は(1052~1057)がある。(1052)は、底部から口縁がそのまま外上方へスッと延びた口売げの皿である。器壁は薄く、黄白色の釉薬がかけられている。内面見込みには、印花文がみられる。(1053)は、切高台のもの。(1054)は、萐筍底。(1057)は、胴下部から高台にかけて露胎で、全体には白濁色の釉薬がかけられている。

染付は(1058~1070)がある。(1058・1059・1061)は、碗E群タイプである。(1058)は、外面に唐草文を描き、口縁部には雷文帯を巡らしている。(1060)は、外面胴部に唐草文、腰部に蓮弁帯を描いたC群Vタイプの碗である。(1062)は、C群Iタイプで、内面見込みには蓮花文が描かれている。染付皿のうち、(1063)は、高台に「天文年造」の年号が記されている。(1069)は、C群皿の萐筍底の皿で、内面見込みには「寿」字が文様化されて描かれている。染付は他に54片、細片で出土している。

(1071)は、外面全体に瑠璃釉をかけ、内面口縁部には界線をめぐらした皿である。一乗谷では、めったに出土しない遺物といえよう。(1072)は、褐釉の壺片で、胎土や釉薬などから(632・657)と同一の個体であることが判明している。

金属製品 (1073)は、銅製煙管の扉首である。火皿は欠損し、ラウも腐蝕して残っていない。煙管の変遷からすれば、首部の湾曲が全くみられない所から、江戸時代でも中頃以降のものと思われる。また(1074・1075)は、煙管の吸口が腐蝕し、竹製のラウのみが残存していた。(1076)は、銅銭の残欠で、文字の判読はできなかった。なお、第54次発掘調査では、81枚の銅銭が出土している。ここでは、第61回に合計63点の銅銭を一括して掲載し、表16に、その内訳を示しておく。(1078)は、鎌の柄の部分であ

ろう。

石製品 (1079)は砥石、(1080)は、平面長方形のバンドコの蓋で、幅18.2cm、厚さ3.6cmを測る。他には、バンドコの身や、石盤、石鉢などの破片が若干出土している。

No.	該種	出土遺跡	1102	1102	1102	1124	?	S F 3327
1081	政和通宝	磯原レンテ	1103	治平元宝	#	1125	至道元宝	S X 3564
1082	祥符元宝	#	1104	洪武通宝	#	1126	天禧通宝	横上東山?
1083	永樂通宝	#	1105	元豊通宝	#	1127	治平元宝	#
1084	?	#	1106	至和元宝	#	1128	皇宋通宝	#
1085	崇寧元宝	#	1107	熙寧元宝	#	1129	景祐元宝	#
1086	祥符元宝	#	1108	?	#	1130	元豊通宝	#
1087	仁祐通宝	S B 3318	1109	開元通宝	#	1131	太平通宝	#
1088	宋通元宝	S F 3326	1110	?	#	1132	政和通宝	#
1089	皇宋通宝	I期整地	1111	元豊通宝	#	1133	大聖元宝	#
1090	皇太口宝	#	1112		S A 3520	1134	景祐元宝	#
1091	開元通宝	#	1113	至口通宝	S B 3320	1135	仁祐口	#
1092	元豊通宝	#	1114	熙寧元宝	S E 3322	1136	寛永通宝	#
1093	?	#	1115	#	#	1137	開元通宝	#
1094	熙寧元宝	#	1116	祥符通宝	#	1138	熙寧元宝	#
1095	?	#	1117	景祐元宝	#	1139	紹聖元宝	#
1096	熙寧元宝	#	1118	開元通宝	S E 3323	1140	祥符通宝	#
1097	天禧通宝	#	1119	皇宋通宝	#	1141	景祐元宝	#
1098	熙寧元宝	#	1120	熙寧元宝	#	1142	寛永通宝	#
1099	皇口口宝	#	1.21	?	S F 3324	1143	#	#
1.00	皇宋通宝	#	1.22	元豊通宝	S F 3327			
1.01	景祐元宝	#	1.23	?	#			

表16 出土銅銭一覧



## 4. 小 結

### a. 遺 構

検出した諸遺構については前項で素述した通りであって、この屋敷は、南北方向の道路と、これと直交する東西方向の道路の合流点にあつて、西の山裾との間約60mに広がる間口約30mの規模を持ち、この西の山裾を除く東・南・北の三面に土塁を廻し、道路に面した東土塁に門を開くものであること、また、諸遺構は、I・II期の2つに大別されることを述べた。ここでは、こうした遺構から想定される屋敷の全体像について若干の考察を加え、まとめとする。

#### 年代

まず、遺構の年代についてふれておこう。この一乗谷朝倉氏遺跡は、越前の支配者となった一乗谷初代朝倉孝景がここを支配の拠点とした文明3年(1471)に始り、第5代義景が織田信長との戦いに敗れ滅亡する天正元年(1573)までの約100年間が中心となることは良く知られている。この前後に若干の遺構の存在も考えられるが、計画的な町割を行い、整然とした町並を形成したのは、この100年間と考えた方が良いものと思われる。しかし、大事業である都市の造成が一朝一夕で完成したとは考えられず、一定の期間が必要であろう。また、町割策定後も大規模な改造が行われたことも各調査で明白であつて、かなりの間にわたつてこの町が存在したことも明らかである。明確な町割策定の実年代を示す資料を欠く現時点においては、この町割策定時は、文明3年以後の比較的早い時期と考えるにとどまらずを得ないであろう。

#### 構成

この屋敷の位置する所は、東西と南北の道路の接点であつて、ここで町割の基準軸が若干異なるように考えられる。これを反映して、道路に面する東土塁は、中程の門SI 1082を境に少し「く」字に折れている。また、この東土塁から西へ延びる南北の2つの土塁は平行せず、大きく西で屋敷の幅を収めている。なお、北境界となる土塁SA 262はI期には存在せず、約3m南の石列SV 3311が境界であつたと考えられ、東土塁の北半SA 264も、この石列位置で方向を若干変え、また幅も異っている。このように、この屋敷は、谷地形という制約によって町割軸の変更点を多く持っていたと考えられるこの一乗谷の城下町の一典型ということも出来よう。なお、これらの土塁の幅は、7尺(2.1m)程であつて、高さは約5尺(1.5m)と考えられ、これが基底部であつて、上部には土堀の存在が想定され、これらを合せた高さは、当時の通例から考え、7尺程であつたであろう。また、東土塁中程に設けられた門SI 1082は、間口は約10尺(3m)であつて、これまでの調査結果においても、門は間口を10尺としたのが通例であることが知られている。そして、ここには、門建物SB 3319があつて、これは正面8尺、側面5尺の規模を持つ4本柱の建物であることが知られ、薬医門等が考えられる。これまでの調査例から、門建物としては、その他、柱を2本の擁立とする棟門形式のもの等が知られているが、こうした形式に対し、1ランク上級の形式といえよう。また、この屋敷の規模は、当初が約30mであつて、これを後に約3m広げているが、この30m程度の間口は、この城下の町割の基本単位と考えられるものである。しかし、奥行きは深く60m程あつて、このように西の山裾に位置する屋敷は規模が比較的大きいといえよう。

つぎに、こうした構えを持つ屋敷内の様子を建物規模等が比較的明らかなI期を中心にみていること

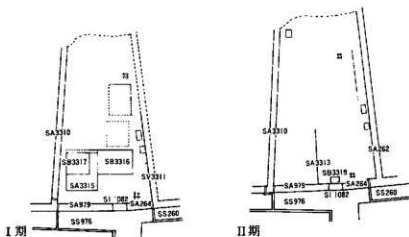
とする。

正面の東土塁中程に設けられた門を入ると、正面に大きな建物 SB 3316が存在する。この建物の東・南には広縁が設けられた立派なものと推定される。そして、この建物の南には、軒を接するようにもう一つの建物 SB 3317が設けられている。この建物は、規則的な柱配置を持っていたようである。そして先の SB 3316の東南隅から東へ延び、南へ折れ、さらに西へ折れて、おそらく SB 3317の東南隅へ取りついていたと推定される塀 SA 3315があって、この塀で SB 3317の東に中庭を形成している。こうした中庭を附属させ、規則的な柱配置を示す SB 3317は、接客等の機能を持つ書院的性格の建物と考えられよう。また、SB 3316に接して、西後方にも建物 SB 3318が存在する。このように SB 3316を中心に3棟の建物が接して設けられており、これが、この屋敷の中心をなしていたと思われる。これに対し、西半には、井戸や大興理設遺構（SX 3333-II期）等が存在し、東半は比較的整然とした遺構がみられるのに対し、やや雑然とした様子が感じられ、質の違いを示しているようである。II期においては、削平等によって不明な点が多いものの、塀や断片的に残る礎石等から、I期と似た構成であったように見受けられる。なお、こうした屋敷に設けられた建物についてこれまでの調査で知られていることを若干述べておこう。一乗谷においては、瓦の出土例はなく、屋根は板・樹皮・茅等の植物製の材料で葺かれていたと推定され、柱は、その断片や痕跡から、4.3寸角程度が一般的であり、外に板戸（舞良戸）を引違いとし、内に明障子を入れる柱間装置や畳等も普及している。

#### まとめ

以上、この屋敷は、奥行き深い形状から、全体を前後に大きく2分し、前方に整った建物群を中心とする表向空間を、後方に、これを支える内向空間を配していたことが知られた。最後に、こうした発掘調査の結果と、この屋敷が「ショーゲドン」と通称されてきたことについて若干ふれておこう。

概要で述べた通り、この屋敷は「ショーゲドン」と通称され、また、「一乗谷古絵図」のこのあたりは「鰐淵将監」の名がみられ、この屋敷の住人として「鰐淵将監」が有力視されてきた。別項で述べられているように、この鰐淵氏は、朝倉氏の家臣として、古くからの有力者の一人であった。調査結果においては、この屋敷の住人を具体的に示す資料は見えていない。しかし、屋敷の位置や規模、そして、その構成は、住人として、有力家臣を想定させるものであって、これまでの推定と矛盾するものではないといえよう。



挿図17 道橋変遷略図

## b. 遺物

前項では、第54次調査で出土した遺物について、各層、各遺構ごとに詳しく述べた。しかし、これらの遺物からは、この屋敷地が狩瀧氏のものであるかどうかの結論は当然導き出せないにしても、それではいったい何割ぐらいの品々が一乗谷城下町滅亡時にここから運び出されたのか、また、後世の水田化事業の際に、上地の低い一乗谷川の方へどれぐらいの量の遺物が掻き出されたのか、さらには、木製品や金属製品のように、400年という長い歳月に朽ちてしまったものがどの程度あるのかなどの問題についても結論を出すことはできなかった。ここでは、過去に実施した他地点での発掘成果をも加味しながら、今回出土した遺物から400年前の一乗谷城下町に住いた1武将の生活ぶりの一端を復元してまとめたい。

### 日常生活用具

この屋敷からは、日常生活用具の主流といえる調理、貯蔵、食膳具が多く出土している。しかし、一乗谷の武家屋敷・寺院・町屋などの過去の調査例の平均値からすれば、土師質皿（灯明皿として使用されたものも含んでいるが……）が平均の約1.3倍の84パーセントと、圧倒的に多いのが目につく。そのため、越前焼は、平均の約3分の1、瀬戸・美濃焼も約3分の1、中国製陶磁器も2分の1から4分の1程度の比率となっている。このことは、土師質皿の細片までもカウントした結果生じたことでもあろうが、より内的な「カララケ文化」というものに、ここの屋敷の住人がどっぷりと浸っていたと捉えることもできるであろう。調理には、鉄鍋がかなり普及していたものと思われるが、この屋敷からは出土しなかった。煮沸するのに使用されたものとしては、土師質の土釜と、銅釜(621)がある。播鉢や鉢の出土量は、一乗谷の平均とさほど変わらない。越前焼人鉢(878)の出土は、注目されよう。灰釉の卸皿(650他)の出土も少々目立った。貯蔵具では、越前焼の大甕(953)がほぼ完形に復元された。これは井戸SE3323の水を貯める水甕としてSX3333の焼土遺構に設置されていたものといえよう。越前焼壺(885・886)も復元できたが、(885)の口縁部や胴下部に漆が付着している点は、注目される。木桶なども出土している。食膳具としては、土師質の耳皿と呼ばれる箸置、小壺、青磁や灰釉の盤や鉢などが出土している。食器では、畿内の製品とみられる朱漆塗りで、器壁を薄く焼いた碗が細片で出土しており、陶磁器では、碗は青磁製品を、皿や杯は白磁や灰釉製品を、また、染付製品は碗、皿それぞれ半々に使用するという実態が認められる。一乗谷では、一般的な現象である。食物は、便所とみられる溜枳遺構から検出された種子や骨片などから、瓜や桃、鳥や魚、小動物などを食べていたことが若干知られるのみである。

女性の身繕いに用いられた化粧道具としては、越前焼小壺(826)がお歯黒壺として使用されたものと思われる。他に、銅製の紅皿(815)、かんざし(860)などが少し検出されている。この屋敷の奥方が使用したものであろう。下駄は、長さ19.8cmの成人女性が履いたとみられる露甲下駄で、歯は、かなりすりへっていた。

冬、寒い日の暖房具としては火鉢とバンドコがある。火鉢は、奈良の火鉢座で作られたとみられる瓦質(611, 647, 763, 1039)のものを購入しており、寝床には、バンドコを用いている。バンドコは越前では、昭和30年頃まで、一般家庭でも使用されていた馴染みの行火で、笏笏石の石工も、客からの注文があってから、1日3個程度を1度に作ったといわれている。バンドコの身が3つ以上、蓋が2つあることから、この屋敷には、5個以上のバンドコがあったものとみられる。灯火具としては、土師質の灯

明皿が主流である。えごま油を入れ、灯芯押え(749)で芯を沈めて火を点したのであるが、最低 827 個の土師質皿のうち、灯芯油痕がみられ、灯明皿として使用されたものは、約半数で想定することができる(50頁参照)。灯火具の中で、ユニークなものは(668, 769, 920)などの瓦燈である。使用法は、先に述べたが、縦方向のへら磨き調整が施されていることなどから、奈良、もしくは京都あたりの製品と考えられる。これらの瓦燈は、現在の所最古のものといえよう。

#### 座敷飾り

当時は、武将といえども茶の湯などの文化に関心を示さざるをえなかったようで、一乗谷のどこからでも、茶道具が多く出土している。この屋敷からも、日本製の茶臼(638)が出土している。(1022)の茶入れは、瀬戸・美濃焼の鉄釉茶入れである。茶壺(632)は、同一個体の裾輪四耳壺片が3片出土しており、なかなか器壁も薄く挽いた良質のもので、中国から舶来された「唐物」である。瀬戸・美濃焼の鉄釉の天目茶碗は、43片出土している。他には、黄瀬戸天目茶碗(693)、灰釉天目茶碗(758)、中国製の黒釉碗(813)、瑠璃釉皿(1071)もそれぞれ1点出土している。また、酒壺(845)や、染付瓶(812)なども、座敷飾りとして考えてよいであろう。この屋敷の主人が、茶の湯に人並ならぬ関心を示していたとは、この出土した茶道具からはいきれない。むしろ当時の武士の一般的教養として、この程度の茶道具は、誰もが揃えていたものと理解しておきたい。次に、銅製水差(869)は、茶の湯の席などで水差としても使用されたであろうが、床の飾りとして牛花などの花器に用いられる場合もみられる。次に閑香に関する遺物であるが、瓦質の香炉(766, 767, 768, 905など)が多く出土している。通例香合せに用いられる香炉は、青磁の煙返しのない、3脚のものである。ここの瓦質香炉も器形からは適当であるが、青磁ではない点、問題が残る。いずれにしても、この香炉からは、宗教具としての香炉か、閑香用の香炉かは判然としない。次に、文房具としては、硯(821・881)と銅製水滴(671)が出土している。とくに(881)は、瓦質の硯で非常に珍しい品といえよう。

#### 武器・武具

この屋敷の住人は、武士であるから、多くの武器や武具が出土してもおかしくはない。しかし、鉄製品などは腐蝕しやすく残存条件が難しいためか、刀(633)、小柄(634)など5本、札(636)など4枚と、概して少ない出土量であった。札(956)は、SX 3333の鏝の中に入っていたため、黒漆で固められたそのままだけ出土された。貴重な資料といえよう。

#### 遊戯具

土師質土鈴は、8片出土しているが、現具かもしれない。(1011)は、越前焼摺鉢を直径約8cmの円形に打ち欠いた円盤状のもので、石観などの遊びに用いられたのではないかとも思われる。

#### 宗教具

地鎮の例は、一乗谷では若干知られている。今回土師質皿2枚づつ3組(639~645)が、礎石建物SB 3317の周辺から重なった状態で出土しており、これも地鎮の諸例と対応はみなしておきたい。また、口縁を合わせた状態で2枚の土師質皿(741・742)が出土しているが、東京八王子城の例では、墨片が出土していることや、民俗例から「エナ処理用の土器」と報告されている。出土状況は類似しているが、一乗谷のこの例が、エナ処理用の土器であるかないかは、全く不明といわざるをえない。

以上、第54次調査出土の遺物から、この屋敷の住人のくらしぶりを素描してみたが、あまりに特異な遺物や、職種を示す遺物、高級な品々を有していないことなどから、この屋敷の住人が、一乗谷城下町の中では、質素で、かつ一般的な上級武士であったと理解されたのである。

## 附論 朝倉氏の家臣鵜淵氏について

第54次調査区は地元では「ショウゲドン」とよばれ、『一乗谷古絵図』においても「新馬場」の隣に「鵜淵將監跡」と記され、その屋敷跡と推定されている。鵜淵氏についてはすでに明治43年発行の『越前人物誌』にその家系の紹介がなされているが、若干の考察の余地があるので以下鵜淵氏に関する史料を整理する。

『朝倉盛衰記』下巻「朝倉家士座列并素姓之事」に「一、五十、鵜淵將監吉廣、一、七十五、同金十郎、一、七十六、同清右衛門吉次、一、同次郎左衛門、一、同三郎兵衛、一、同内藏助、同三郎左衛門、一、鵜淵三郎五郎」と一族8人の名が記されている鵜淵氏は、朝倉氏の家臣団のなかでも有力なものひとつであったようである。同項は朝倉氏一族と家臣の座列を家ごとにまとめて列記したものであるが、鵜淵氏は家臣のなかで前波・山崎・魚住・河合・青木・印牧・窪田・堀江・梅野・桜井・鳥井などの名だたる重臣につく序列を与えられている。

松平文庫『諸士先祖之記録』は越前松平家の藩士の由緒をまとめたものであるが、ここに鵜淵氏が含まれるので以下引用する。

「△鵜淵、吉品公於吉江、明暦元乙未年被召出、○鵜淵小太郎政幸、本國出登、生國越前、姓淵、初名高屋金右衛門、先祖ハ佐々木家ニテ候、足利尾張守高経ニ屬シ罷有候由、鵜淵將監正廣ト申者、朝倉義景ニ仕へ候、其子次郎左衛門弘治元年乙卯十月十三日加州龍美郡本折口ニテ高名仕、義景ヨリ給儀感状于今有之候、其後天正元癸酉八月十四日於江州刀根朝倉義景萬死一生ノ軍之節、討死仕候由、其子鵜淵勘太郎政廣ト申者ハ小太郎政幸父ニテ候、當岡丸岡ノ城主青山修理大夫藏ニ相勤候、鵜淵先祖之儀覺書所持仕候（以下略）」

この記事によれば、鵜淵氏は南北朝以前の由緒をもつ家柄であったらしいが、その先祖の事蹟は他の文献にみえず未詳である。『朝倉記』によれば、弘治元年（1555）宗満を大将として13,000騎の兵力で加賀に侵攻した時、戦いなかばで宗満は病み一乗谷にもどり、そこで卒するのであるが、その後同年10月には山崎氏らが再度安宅に攻め入る。この時に鵜淵金十郎の勢50余騎が先陣をとったけれども、深追いして逆に鵜淵金十郎・坪田五郎・五十嵐藤内らが討たれてしまったと記されている。『朝倉盛衰記』下巻の「朝倉家士被官之事」の項には「鵜淵將監被官、一、五十嵐藤助、一、半田、一、坪田、一、木村、一、井河、一、松浦、一、□□左衛門」と記されており、さきの3人は鵜淵氏の一族・被官であったことがわかる。また前引の『諸士先祖之記録』でもこの時に一族の鵜淵次郎左衛門も同時に本折口に出兵したことが知られる。以上のように鵜淵氏はおそくとも義景の代のはじめ頃から朝倉氏の軍事行動に参加し、活躍していたことがうかがえる。

『朝倉記』によれば、元亀元年（1570）4月、織田信長が敦賀を急襲した際、朝倉義景は軍勢の手分けをして圍城の要所を固めたとき、その時に「桜井新左衛門七百余騎・鵜淵將監三百余騎各杉津口エ向フ」と記されている。同書に記されているような整然とした守備体制がこの時敷かれたかどうかは疑問であるが、その格付けをみると鵜淵氏は朝倉氏の一族・家臣の中でも有数の存在とされている。

鵜淵吉広は前引の『朝倉盛衰記』「朝倉家士座列并素姓之事」の交名にも同族中の筆頭にみえ、義景の代に最末期に活躍したことが知られる人物である。年末詳であるが、彼の書状が「南部文書」にみられるが、その内容は近江における信長方と越前の武將及国人衆の戦況を天台座主の庁書に報じ、あわせて

御守の下賜を申請するものである。そこには「北郡之時宜、先日我々登山之間ニ、敵卒大勢取巻、御方少々生還仕、散々式候き、仍國人衆山上面ニ先取退候間、私も一昨日罷上候、總て可有出陣候」と苦戦の状況が伝えられている。あるいは元龜2年9月の信長による比叡山焼打ちの直前のものではないかとも思われるのであるが、鵜淵吉広は近江北郡の国人衆と共に出兵して信長方と対峙し、山上に追われて再起をはかっているのである。その後吉広は比叡山から脱出したであろうが、委細未詳である。吉広は天正元年（1573）8月の刀根坂の合戦で、信長方に追撃され戦死した<sup>13)</sup>。

以上のように鵜淵氏については、確実な史料に乏しいけれども、義景の代から武将としての活躍がみられ、一族のうちには50乃至300騎を率いるものがあり、朝倉氏の家臣団の中でも比較的上位の序列にあったのである。

最後に鵜淵氏の居城については「朝倉盛衰記」下巻「朝倉家十住居之事」に「一、吉田郡城法寺、鵜淵将監」「一、吉田郡上浄法寺、鵜淵内藏助、同清左衛門」とみえるが、『越前国古城跡并館屋敷蹟<sup>14)</sup>』には「朝倉家鵜淵将監、志比郡下浄法寺村際西方二十間許四方之所、自福井三里半計」と記される。その遺構や知行の内容は未詳である。

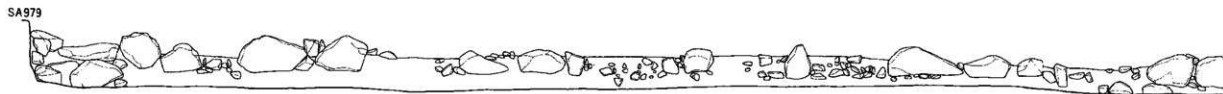
#### 注

- (1) 『一乗谷史学』別冊6号所収
- (2) 福井県立図書館蔵
- (3) 『越前若狭一向一揆関係資料集成』所収
- (4) 『福井県史』資料編2所収
- (5) 『朝倉武』
- (6) 『越前若狭地誌叢書』上巻所収

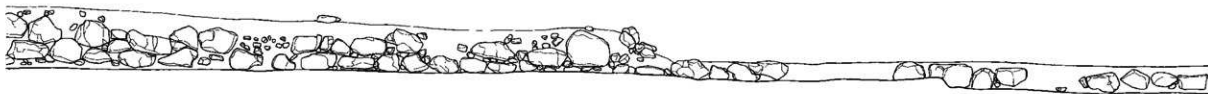
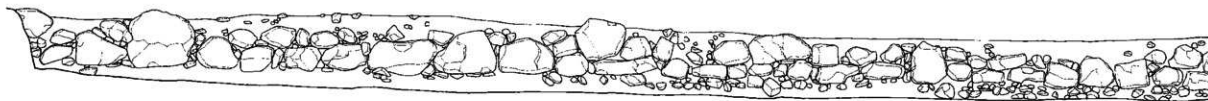
第37圖 土壘石堆立面圖



土壘 SA979西面石堆立面圖



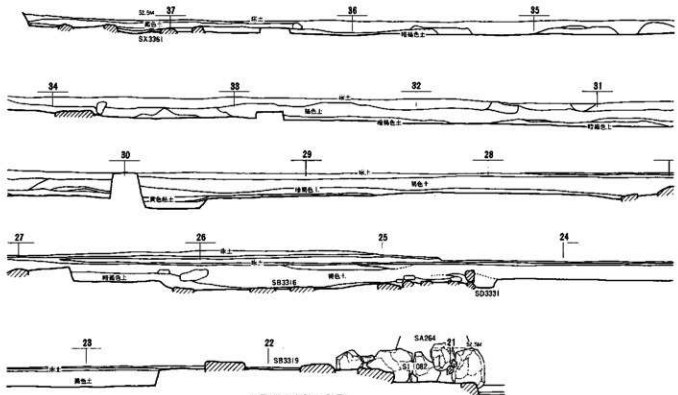
土壘 SA3310北面石堆立面圖



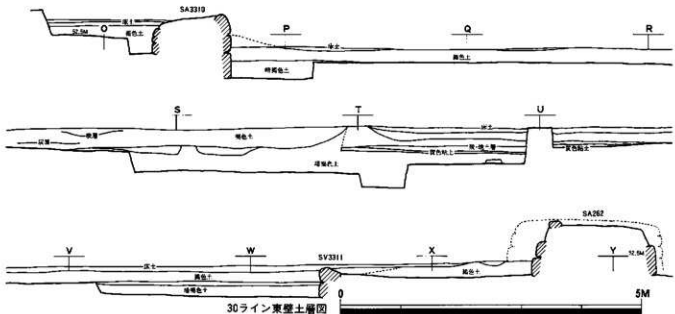
土壘 SA262南面石堆立面圖



第38図 土層図



Uライン南壁土層図

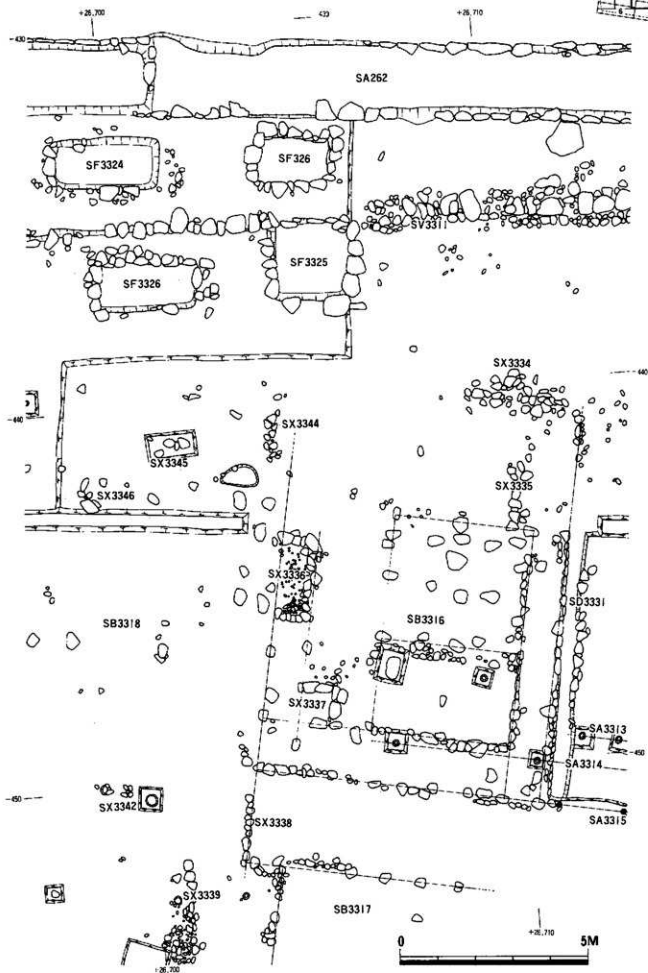


30ライン東壁土層図

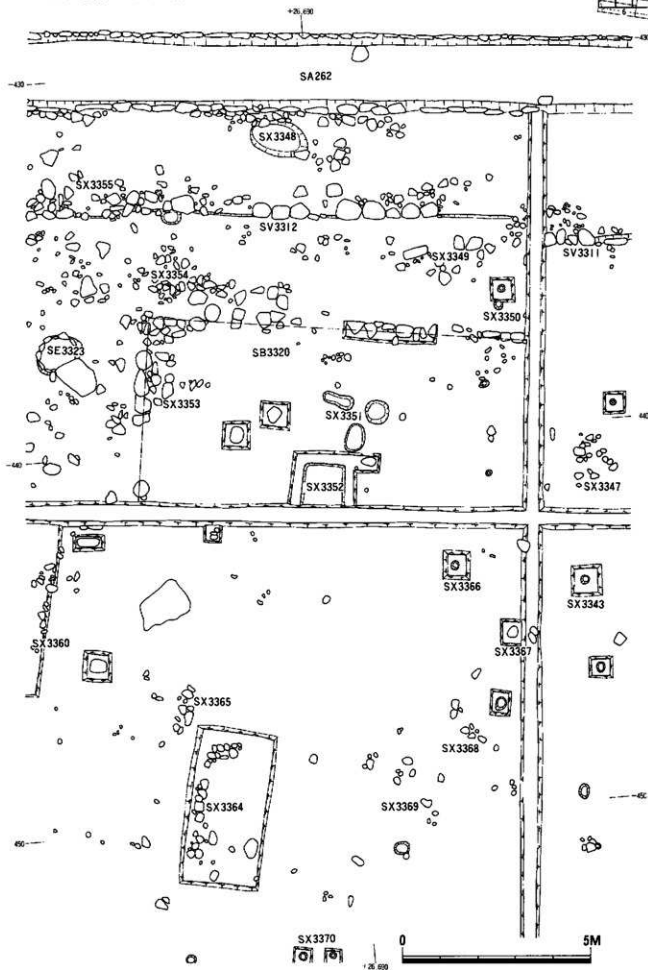




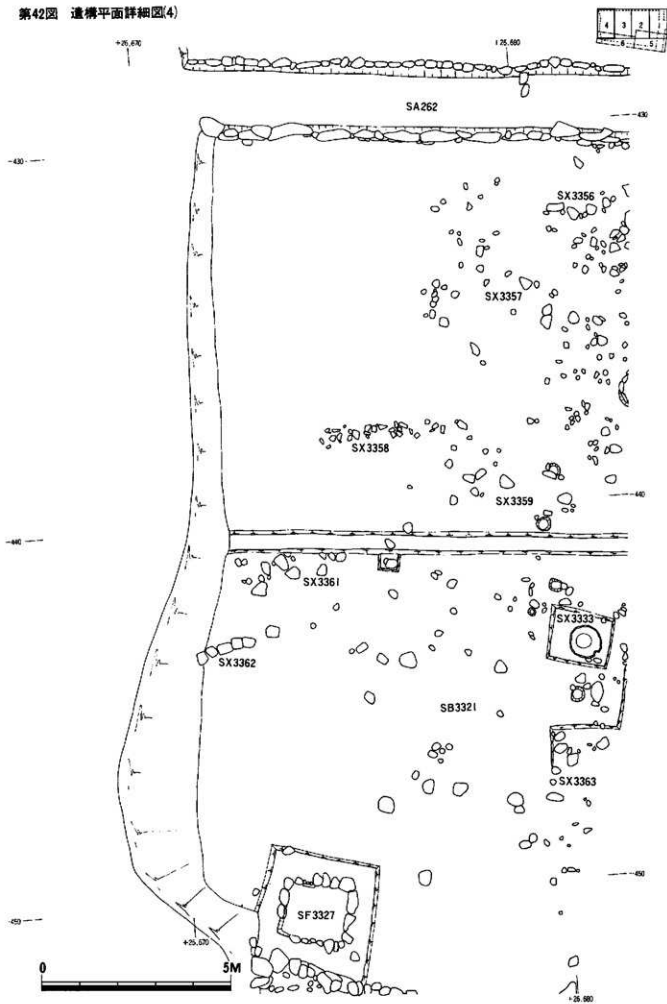
第40図 遺構平面詳細図(2)



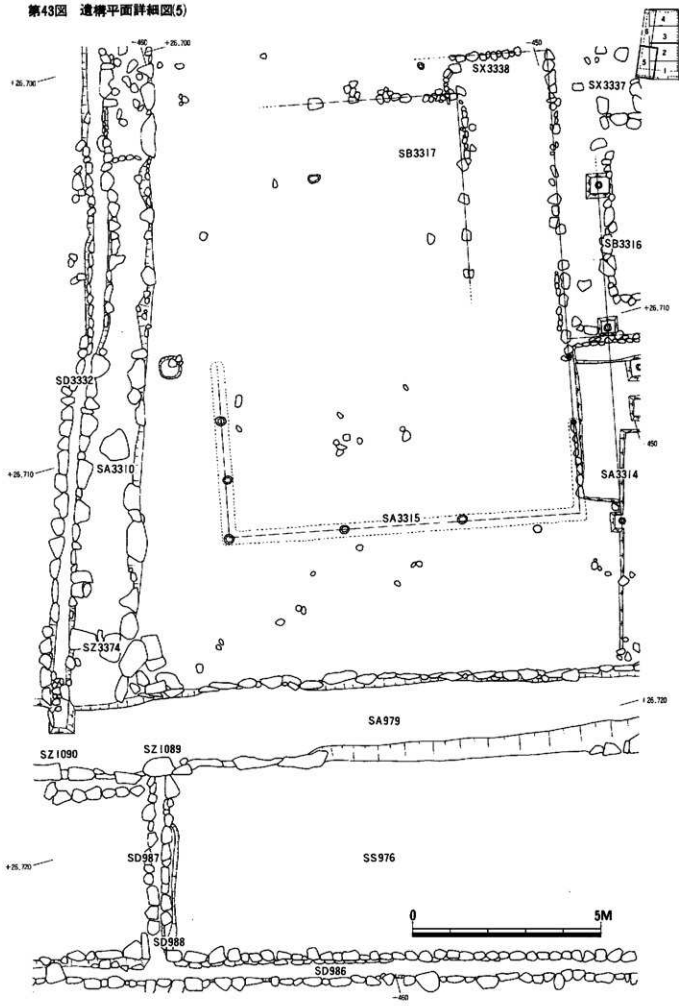
第41図 遺構平面詳細図(3)



第42圖 遺構平面詳細圖(4)



第43区 遺構平面詳細図(5)







屋敷全景（北東から）



建物SB316（東から）

銅製水甕▶



越前焼大甕▼







(東から)



(北東から)



(南東から)





◀ SA 262  
(東から)  
▶ SA 3310  
(東から)



SA 979  
東面石垣  
(南端部)



同上  
西面石垣



SA 262  
南面石垣  
(西半部)



屋敷内部



東半部  
(南から)



西半部  
(南から)



西半部  
(東から)

SB3316・3317  
SA3313 他  
(東から)



SB3316・3317  
3318  
(西から)



SB3316  
(東から)



SV3312  
SB3320  
(東から)



S1 1082  
(1期)  
(東から)



S1 1082と  
SB3319  
(II期)  
(東から)



SV3311と  
SF3325・3326  
(南から)



◀SZ270  
(東から)  
▶SZ270  
(天井石撤去後)  
(西から)



◀SD3331  
(南から)  
▶SX3336  
(南から)





- ◀ SE 3322  
(西から)
- ▶ SE 3323  
(西から)



- ◀ SF 326と  
SF 3325  
(南から)
- ▶ SF 3324と  
SF 3326  
(南から)



- ◀ SF 3325  
(南から)
- ▶ SF 3326  
(南から)

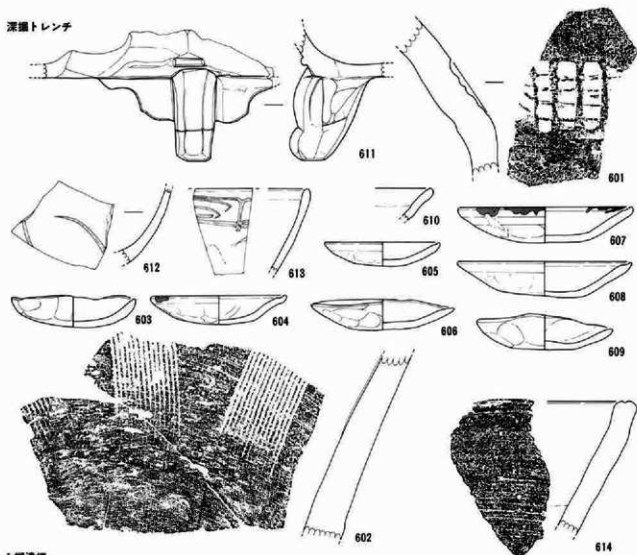


- ◀ SF 3327  
(南から)
- ▶ SX 3333  
(東から)



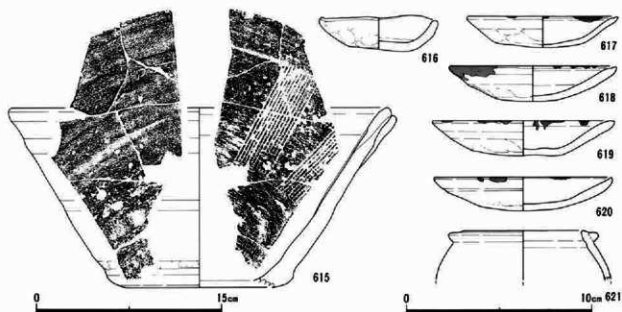
第45図 第54次調査・遺物(1)

深掘トレンチ

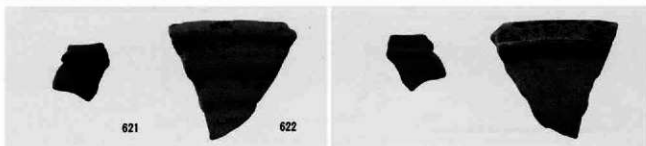
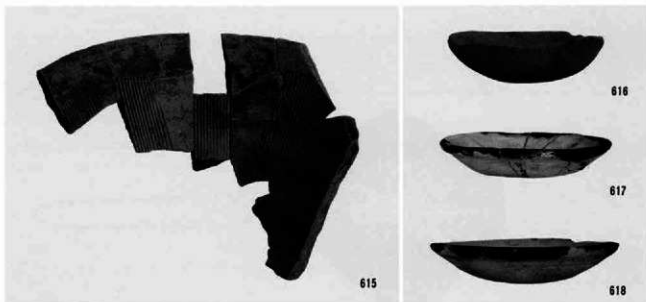
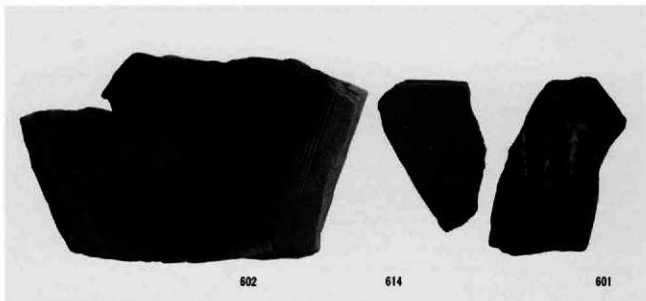
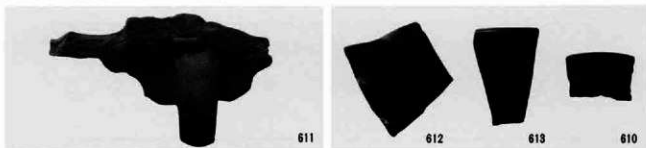


I期遺構

SB3316

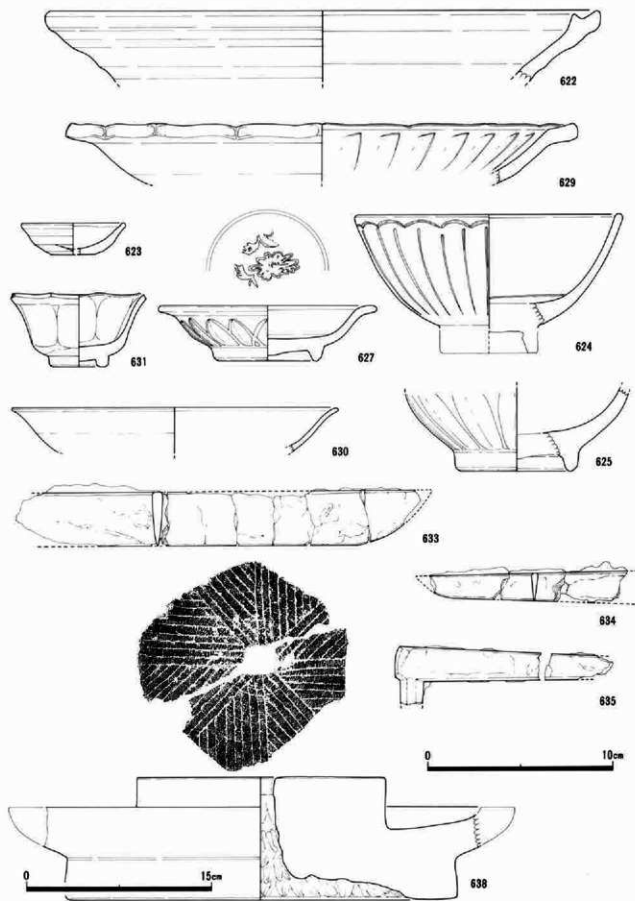


越前焼罎601 漆鉢602 土師質皿603~609 灰輪皿610 瓦質火舎611 青磁碗612-613 越前焼鉢614  
漆鉢615 土師質皿616~620 鈎釜621

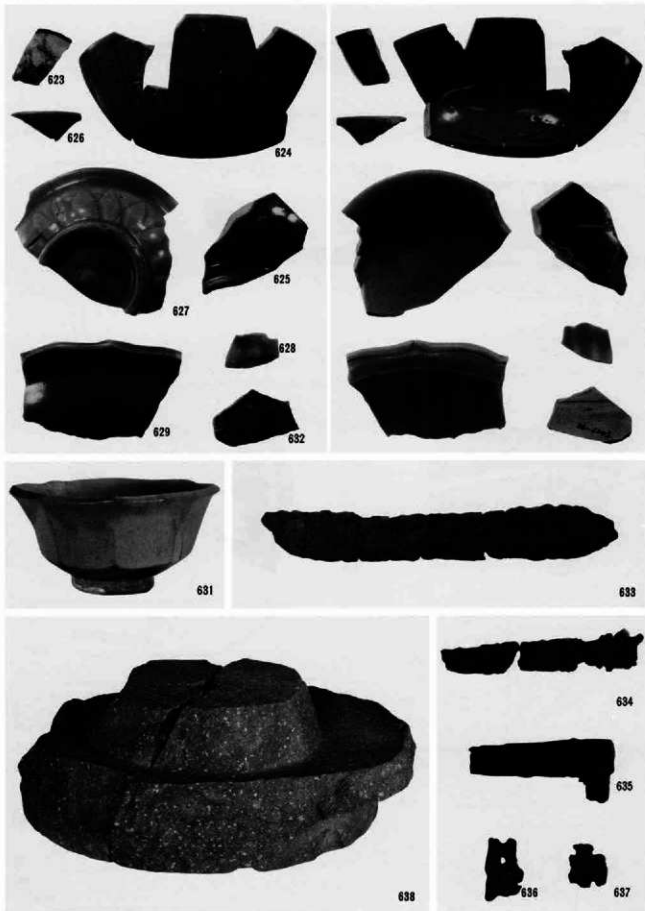


深掘トレンチ 越前焼罌601 摺鉢602 鉢614 灰輪皿610 瓦質火舎611 青磁碗612-613  
SB3316 越前焼摺鉢615 土師質皿616-618 鈔釜621 灰輪椀622

第46図 第54次調査・遺物(2)



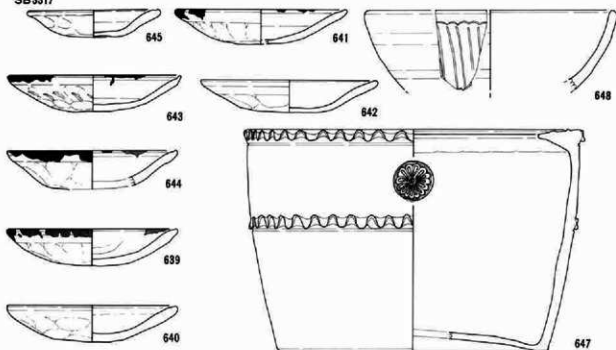
灰釉壺622 鉄袖小皿623 青磁碗624-625 皿627 壺629 白磁皿630 杯631 金属刀633 小刀634  
不明635 石製品茶臼638



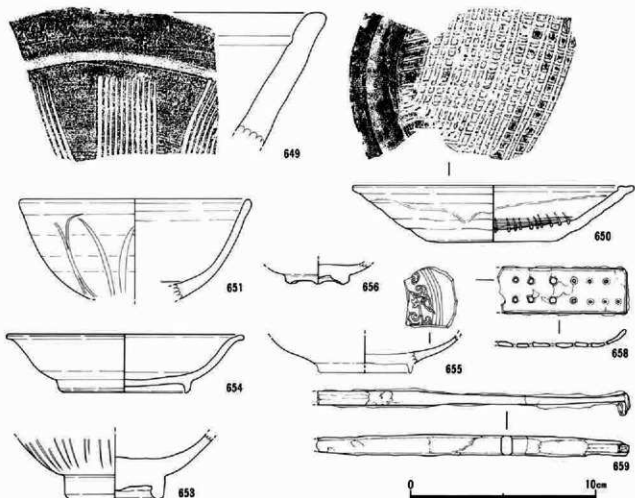
SB3316 鉄軸小皿623 青磁碗624~626 皿627-628 鉢629 白磁杯631 横軸密632 金風刀633  
 小刀634 不明635 小札636-637 石製品茶臼638

第47图 第54次調査・遺物(3)

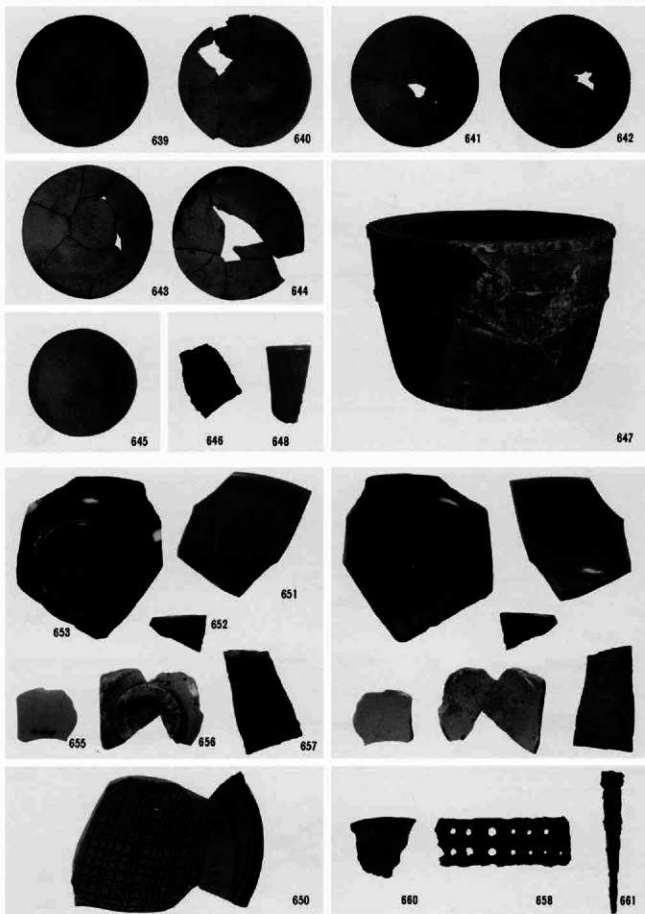
SB3317



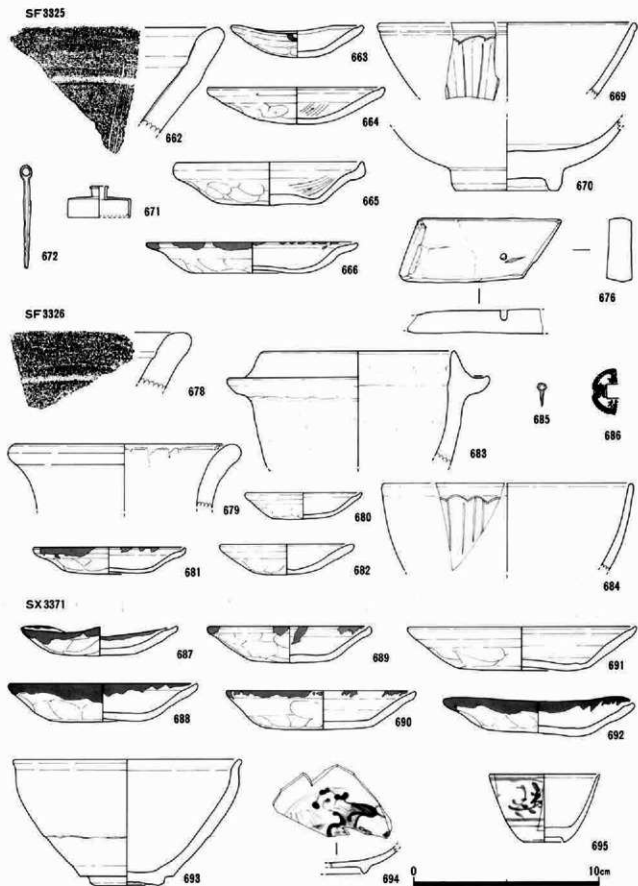
SB3318



土師質皿639~645 瓦質火鉢647 青磁碗648 越前焼楳鉢649 灰輪埴皿650 青磁碗651・653  
白磁皿654・655 杯656 金属小札658 鏡カ659

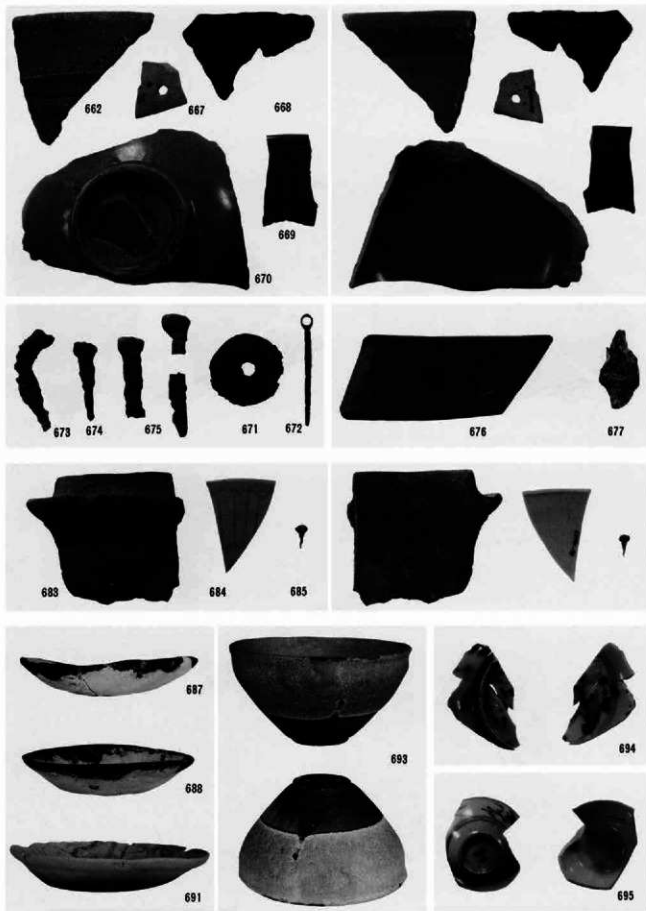


SB3317 土師質皿639～645 鉄輪646 瓦質火鉢647 青磁碗648 SB3318 灰輪印皿650  
 青磁碗651～653 白磁皿655 環656 襦輪壺657 金属小札658 銅杯660 釘661



越前焼指鉢662 土師質皿663-666 青磁碗669-670 金属水筒671 不明672 石製品砥石676 越前焼  
鉢678 壺679 土師質皿680-682 土釜683 青磁碗684 金属鈎685 指鉢686 土師質皿687-692  
黄瀬戸碗693 染付皿694 瑁695

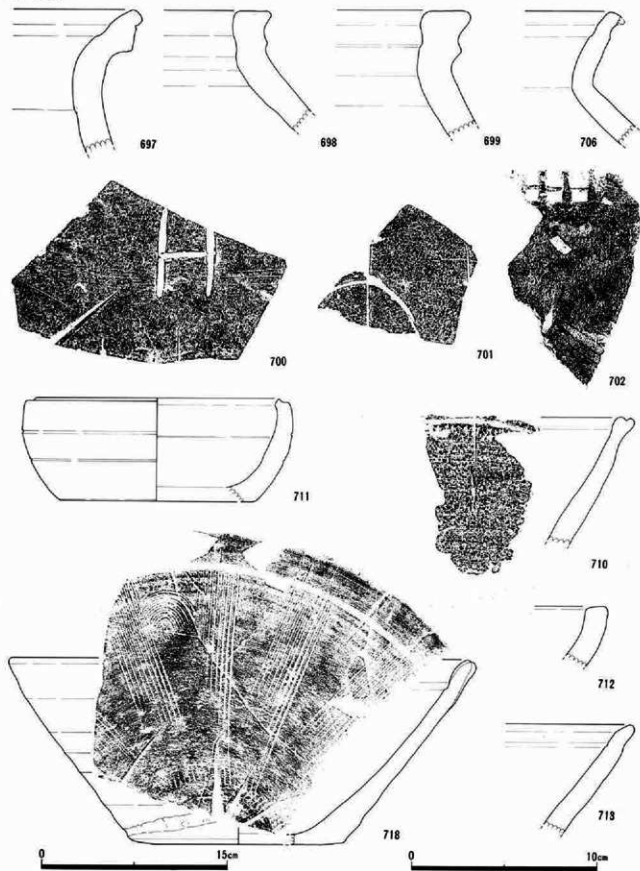




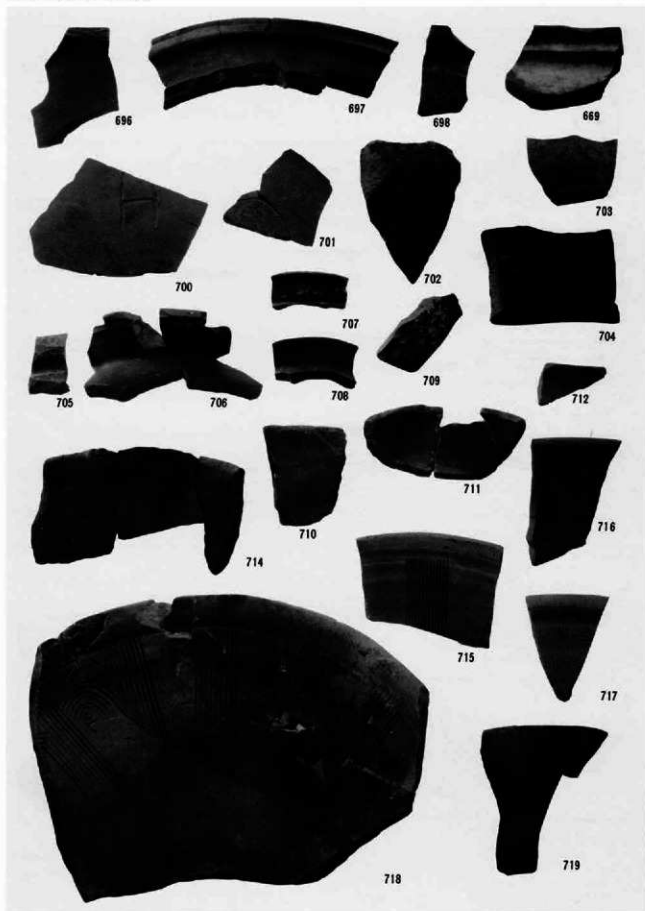
[SF 3325] 越前焼信鉢662 土師質皿667 瓦質瓦燈668 青磁碗669-670 金屬水筒671 不明672  
 釘673-675 石製品砥石676 骨片677 [SF 3326] 土師質土釜683 青磁碗684 金屬鉢685  
 [SX 3371] 土師質皿687-688-691 黄瀬戸碗693 染付皿694 埴695

第49図 第54次調査・遺物(5)

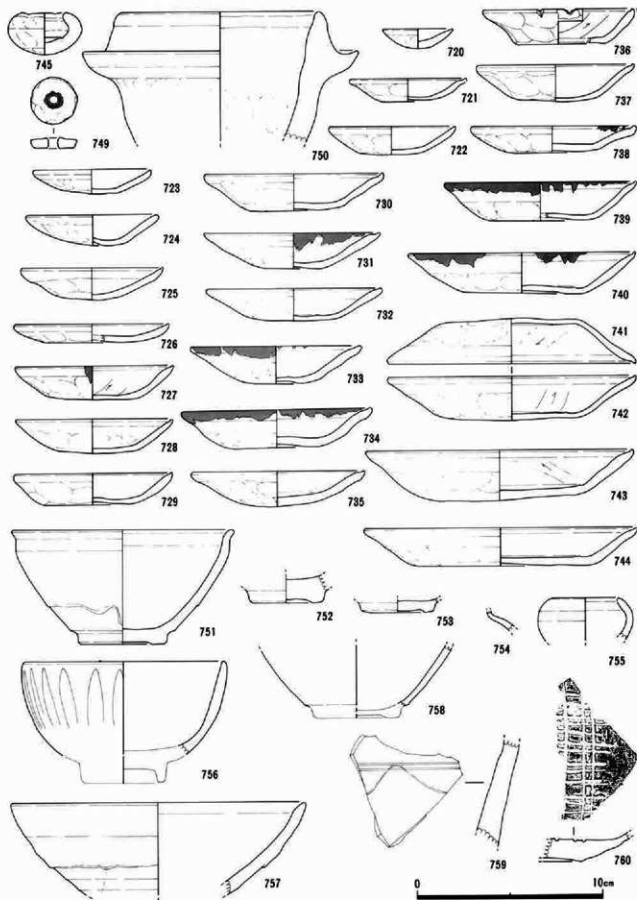
I期整地層



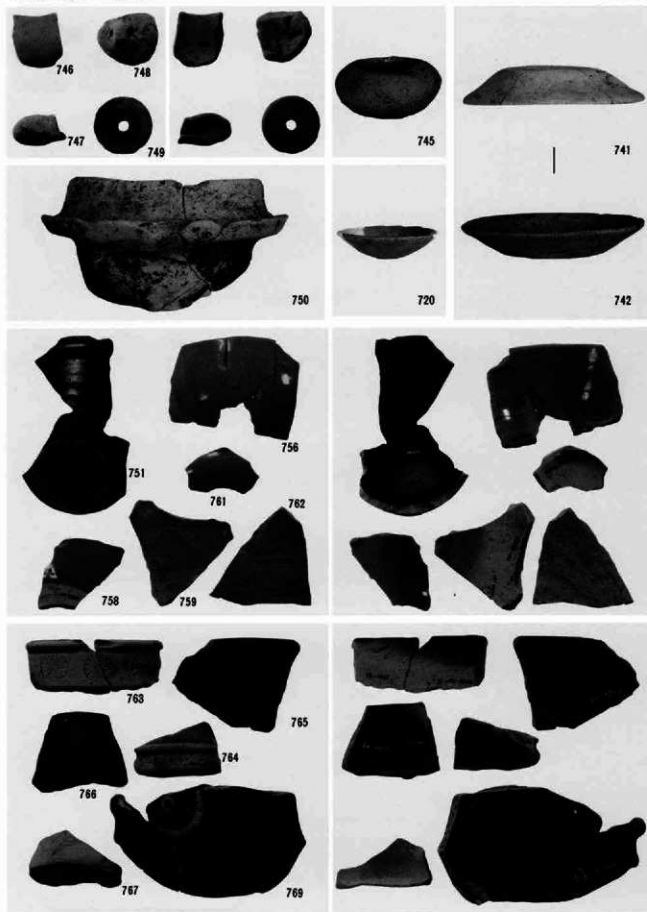
越前焼裏697~702 壺706 鉢710~713 擂鉢718



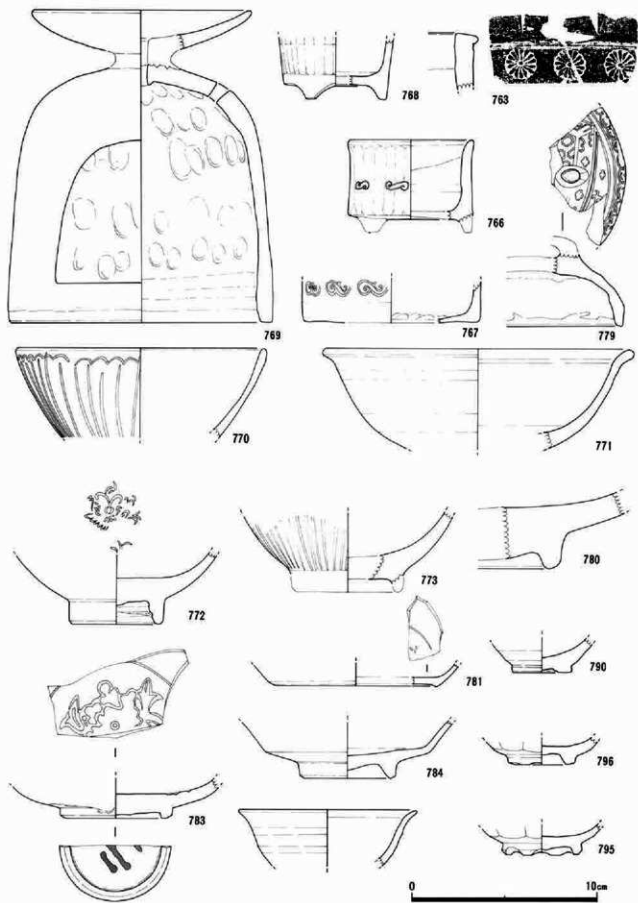
I期整地層 越前焼灰696~702 壺703~709 鉢710~712 摺鉢714~719



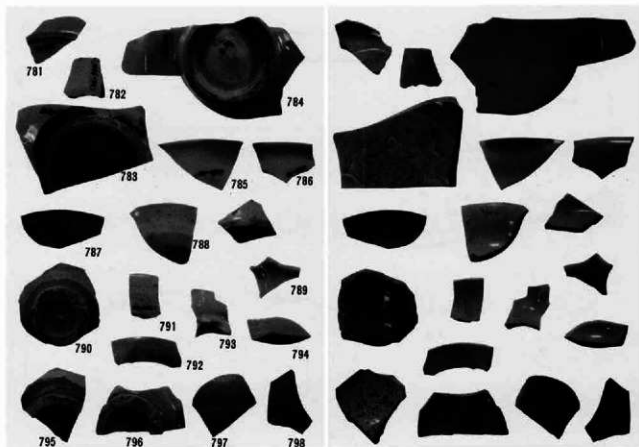
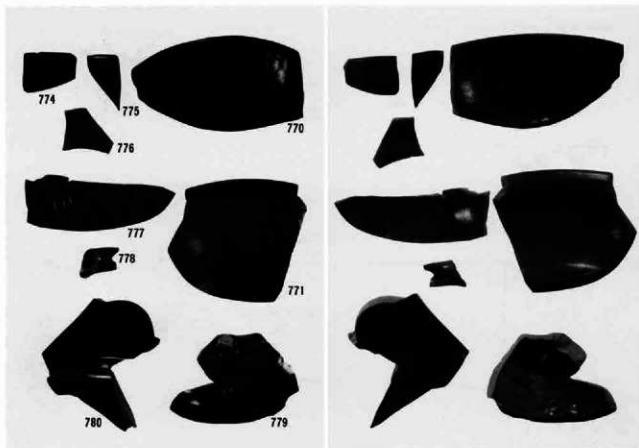
土師質皿720~744 小壺745 灯芯押之749 土釜750 鉄輪碗751~753 茶入754 小壺755  
 灰輪碗756~758 壺759 鉢皿760



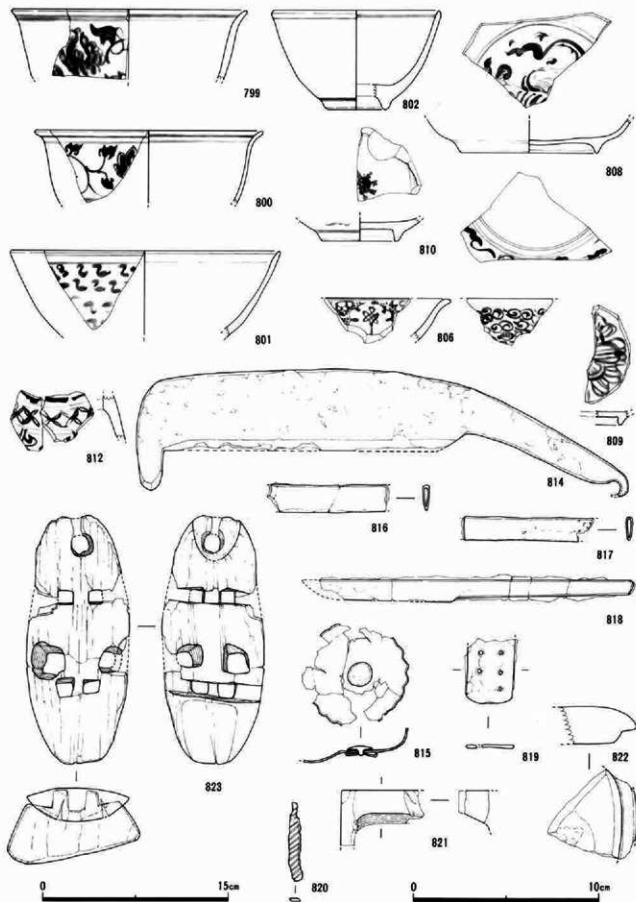
I期整地層 土師質皿720-741-742 小壺745-746 耳皿747 土鈴748 灯芯押え749 土釜750  
 鉄輪碗751 灰輪碗756-758 壺759-761 甕762 瓦質火鉢763-765 香炉766-767 瓦壇769



瓦質火鉢763 香炉766-768 瓦甕769 青磁碗770-773 蓋779 甕780 白磁皿781-783-784  
 杯790-795-796

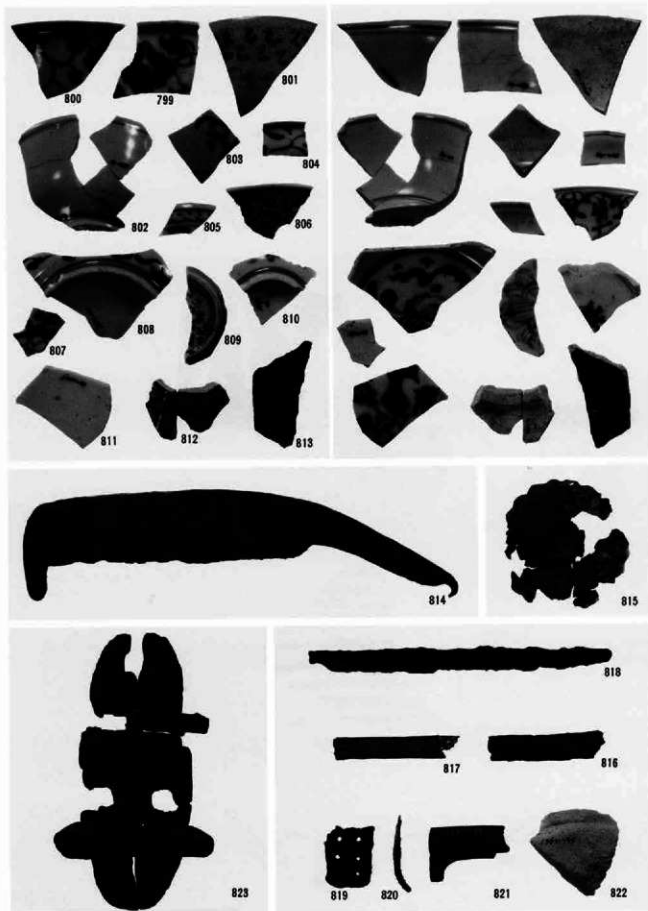


I 期整地層 青磁碗770・771・774～777 水注778 蓋779 壺780 白磁皿781～787・789  
 杯788・790～796 壺797・798



染付碗799~802 皿806・808~810 壺812 金属鉈814 紅皿815 小柄816~818 小札819  
飾り金具820 石製品硯821 バンドコ蓋822 木製品下駄823



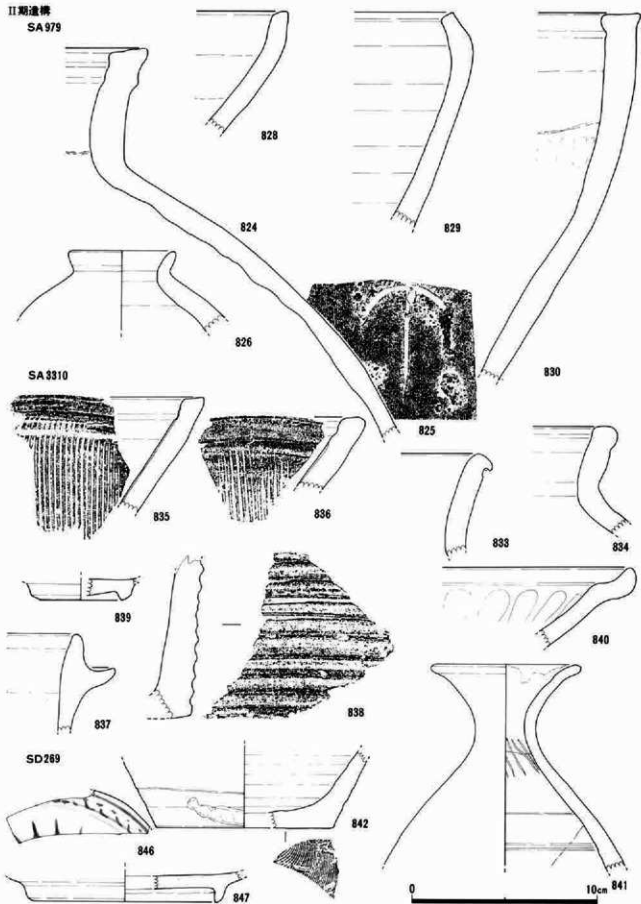


**I期整地層** 染付陶799~803 埴804 皿805~811 壺812 黒輪陶813 金屬鉈814 紅皿815  
 小柄816~818 小札819 飾り金具820 石製品硯821 ノブドコ蓋822 木製品下駄823

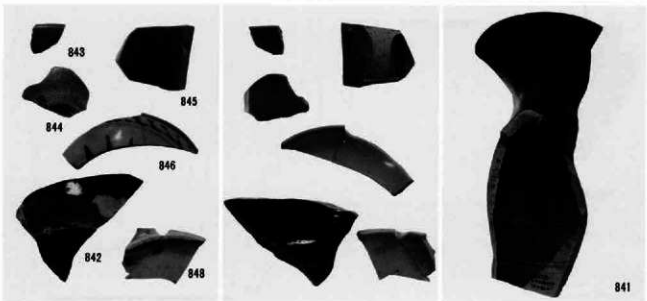
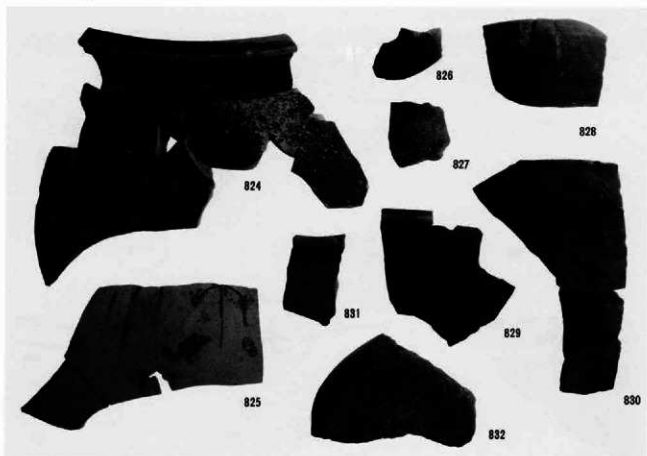
第53回 第54次調査・遺物(9)

II期遺構

SA979



越前焼灰824 壺826 鉢828-830 越前焼志833-834 摺鉢835-836 土師質土釜837 越前焼(?)  
火桶838 青磁皿839 壺840 鉄輪壺841-842 染付皿846 白磁皿847

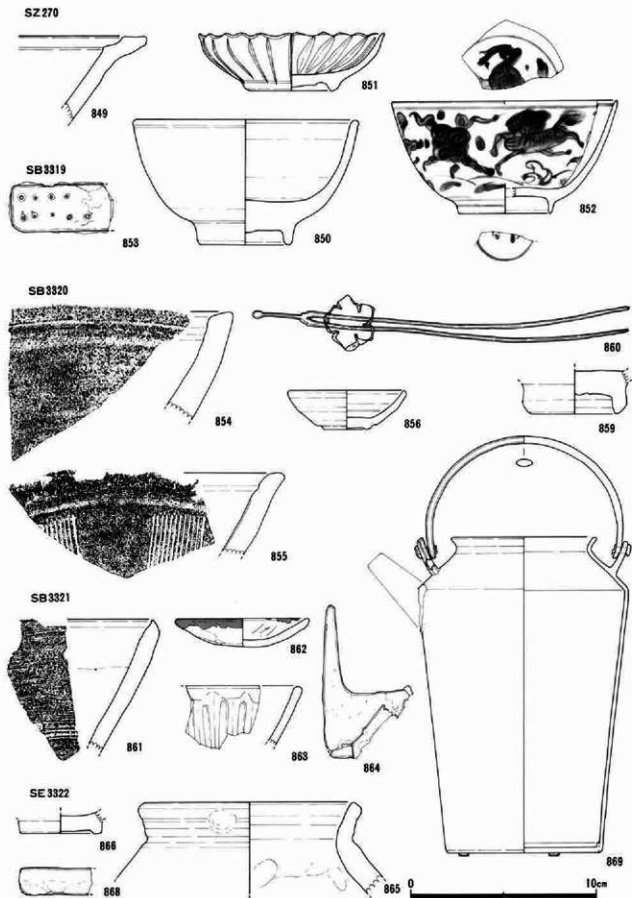


SA 979 越前焼壺824・825 壺826・827 鉢828～830 石製品風炉831 バンドコ832

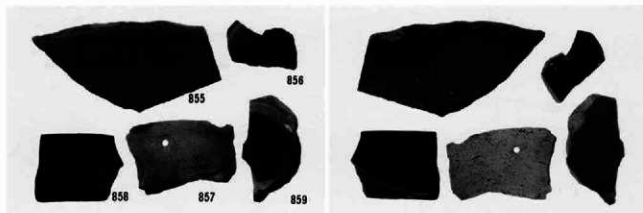
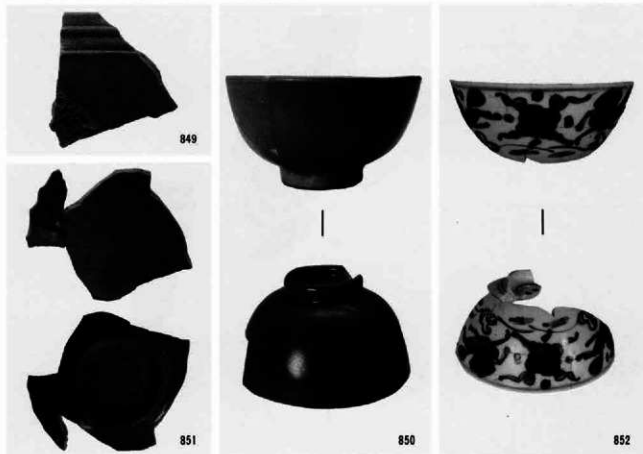
SA 3310 越前焼壺833 越前焼(?)火桶838 青磁壺840 SD 269 鉄軸壺841・842 青磁皿843・844

酒会壺蓋845 染付皿846 白磁皿848

第54図 第54次調査・遺物⑩



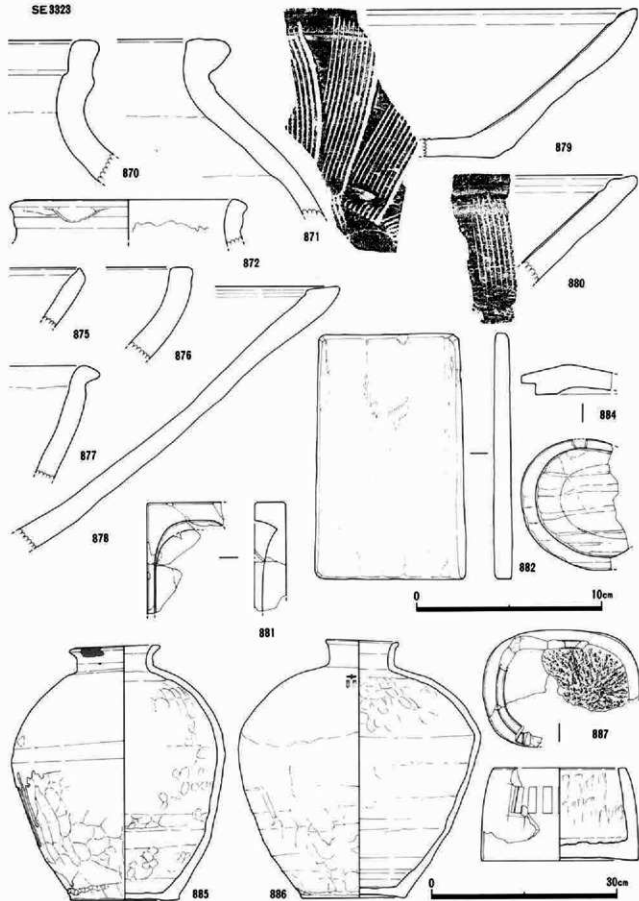
灰軸型849 青磁碗850 皿851 染付碗852 金屬小札853 越前焼鉢854 指鉢855 鉄軸小皿856  
 青磁碗859 金屬かんざし860 越前焼鉢861 土師質皿862 青磁碗863 金屬不明864 越前焼壺865  
 金屬小札868 水差869



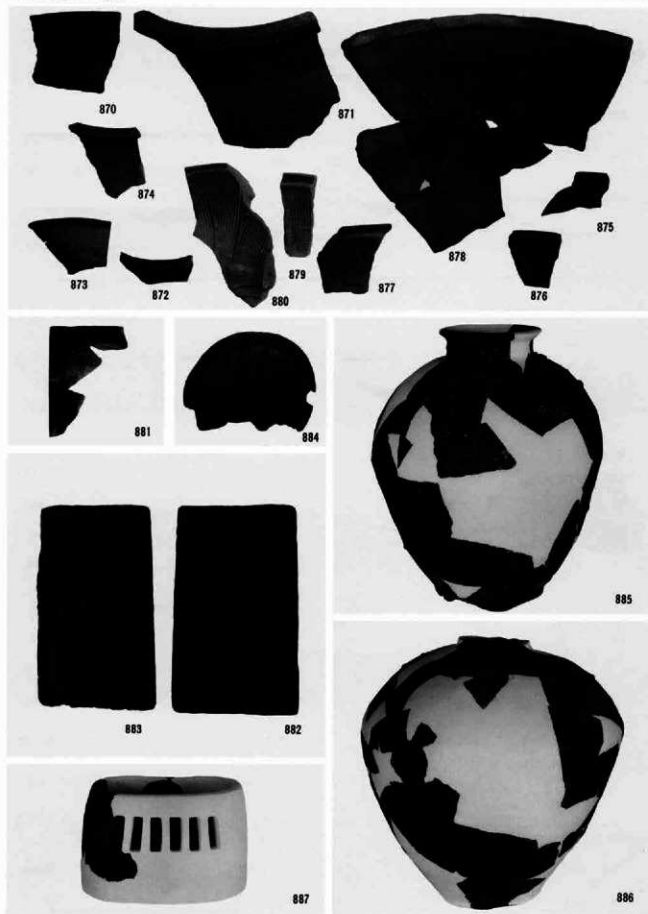
[SZ 270] 灰輪埴849 青磁碗850 皿851 輪付碗852 [SB 3319] 金属小札853 [SB 3320] 越前焼  
 摺鉢855 鉄輪小皿856 土師質皿857 瓦質香炉858 青磁碗859 金属かえぎ860  
 [SB 3321] 越前焼鉢861 青磁碗863 金属不明864 [SE 3322] 越前焼埴865 鉄輪866 染付皿867  
 金属小片868

第55図 第54次調査・遺物(1)

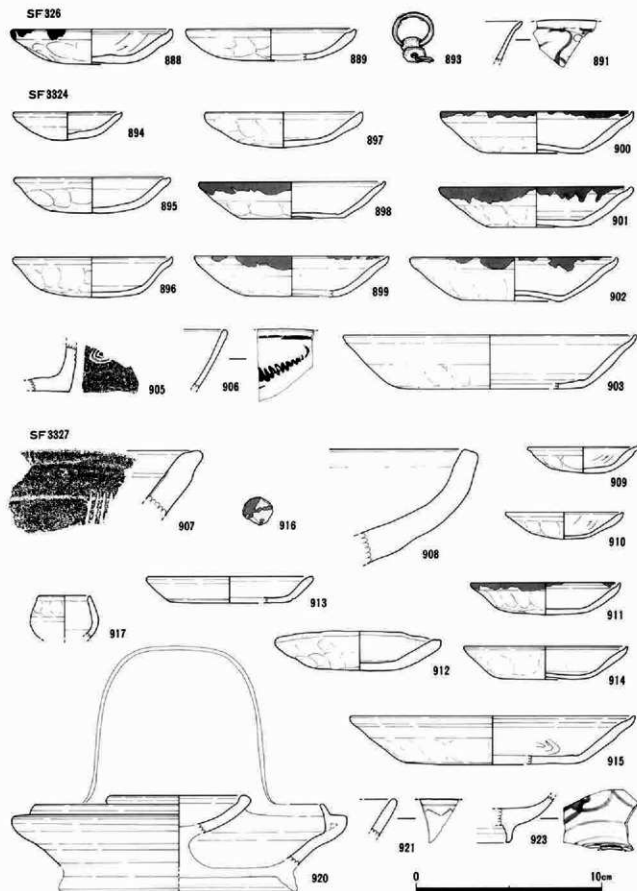
SE 3323



越前焼870-871 壺872・885・886 鉢875-878 拵鉢879-880 瓦質硯881 木製品櫛板882 蓋884  
石製品バンドコ887

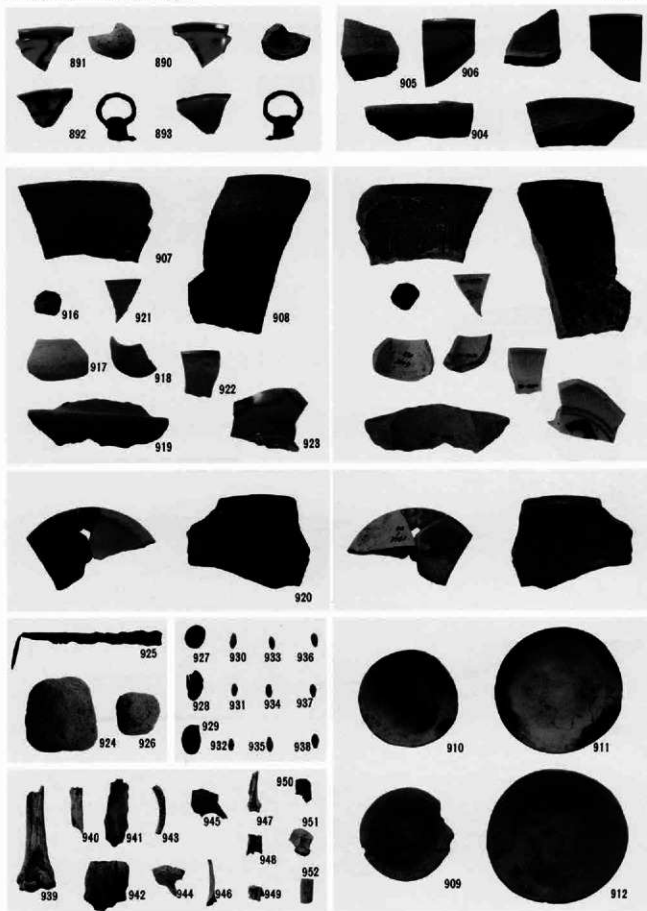


SE3323 越前焼灰870-871 壺872-874-885-886 鉢875-878 信鉢879-880 瓦質硯881  
木製品板板882-883 蓋884 石製品バンドコ887



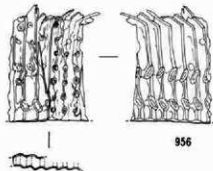
土師質皿888-889 染付杯891 金屬環付金具893 土師質皿894-903 瓦質香炉905 染付碗906  
 越前焼楕鉢907 鉢908 土師質皿909-915 彩絵皿916 小壺917 瓦質瓦甕920 灰釉碗921 染付碗923



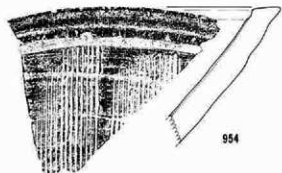


[SF 326] 土師質土鈴890 染付坏891-892 金属環付全具893 [SF 3324] 土師質土釜904 瓦質香  
 炉905 染付碗906 [SF 3327] 越前焼埴鉢907 鉢908 土師質甕909-912 彩絵甕916 小壺917・  
 918 土釜919 瓦質瓦器920 灰釉碗921 青磁碗922 染付碗923 金属釘924 不明925-926 種子  
 927-938 骨片939-952

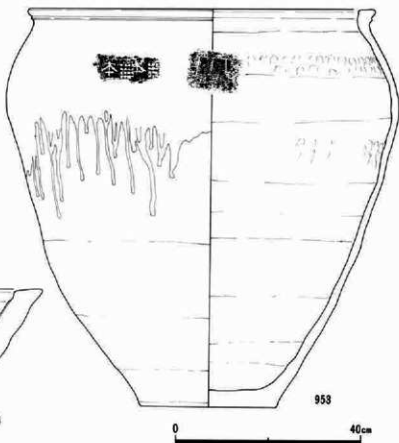
SX 3333



956



954



953

0 40cm

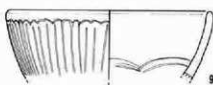
SX 3352



981



980

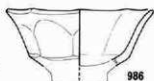


982

SX 3364



983



986

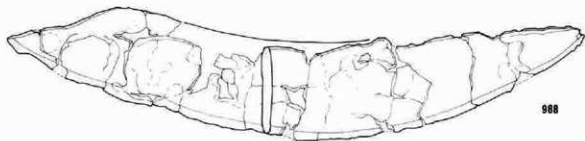


985

984

0 10cm

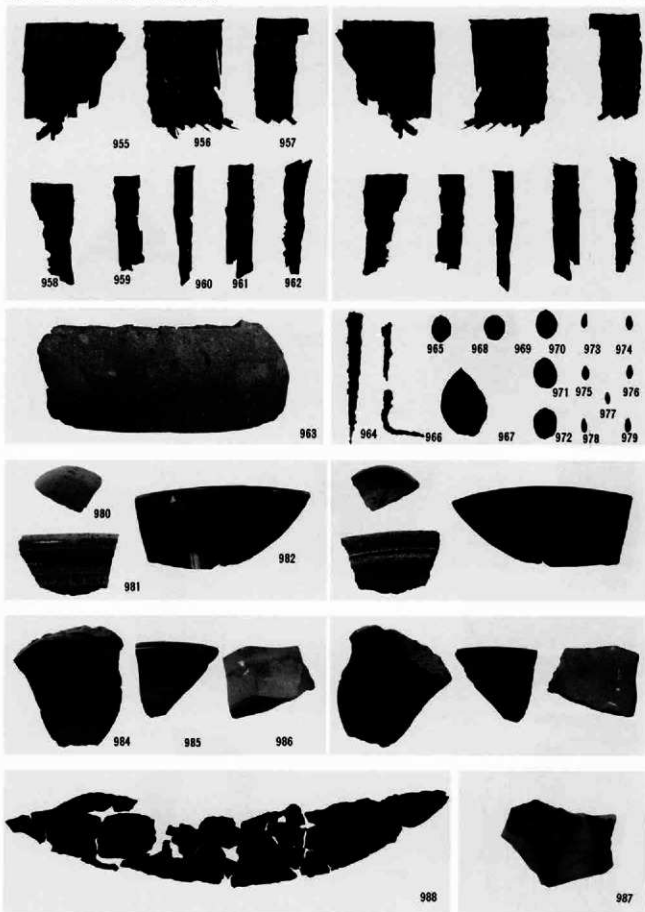
II期整地層



988

0 15cm

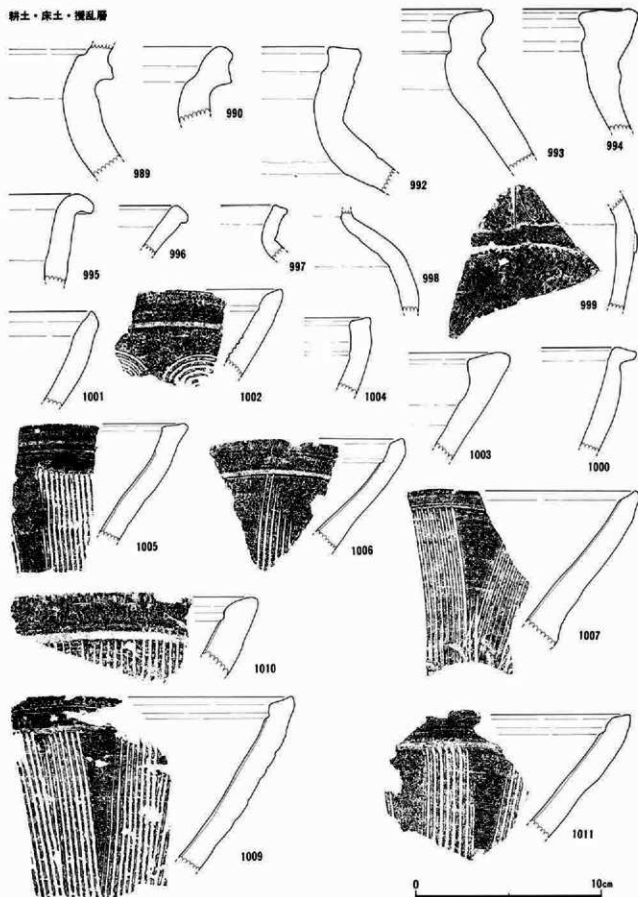
越前焼壺953 播鉢954 小札956 土師質皿980 灰輪鉢981 青磁碗982 土師質皿983 青磁皿984  
鉢985 白磁鉢986 金屬不明鉄器988



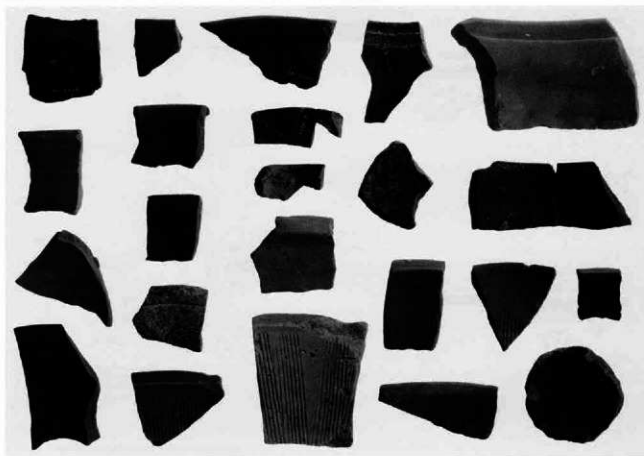
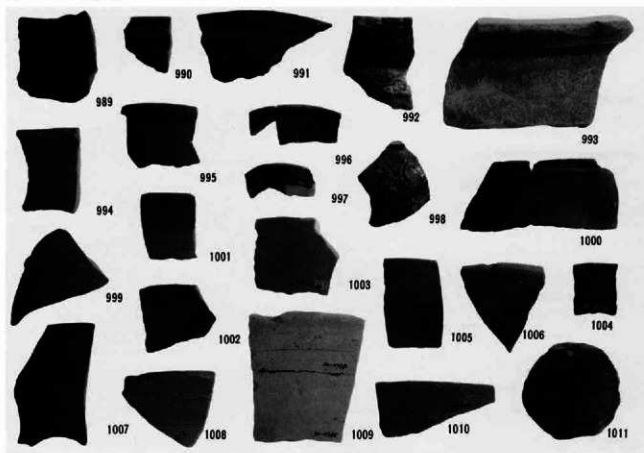
SX 3333 小札955～962 石製品バンドコ963 金属釘964～966 種子967～979 SX 3352 土師質皿  
 980 灰輪鉢981 青磁碗982 SX 3364 青磁皿984 鉢985 白磁付986 Ⅱ期築地層 染付鉢987  
 金属不明鉄器988

第58図 第54次調査・遺物(4)

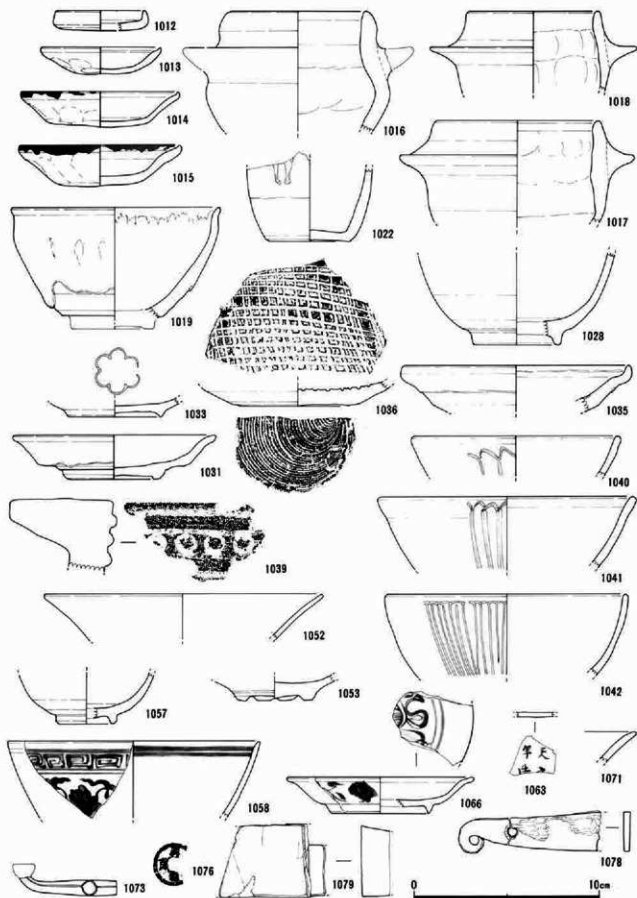
粘土・灰土・擾乱層



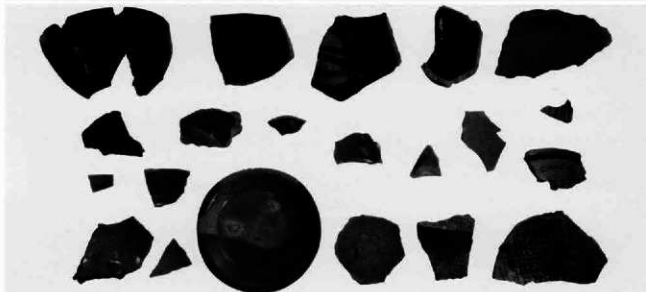
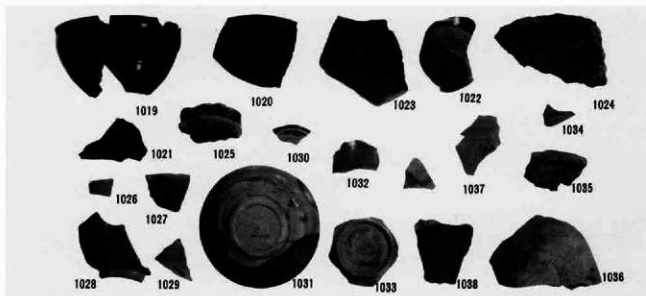
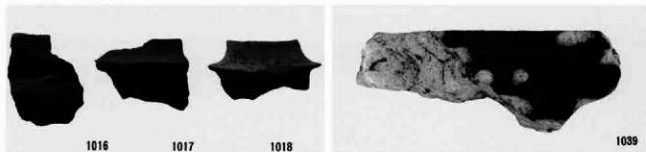
越前焼壺989-990-992-994-999 壺995-998 鉢1000-1004 播鉢1005-1007・1009-1011



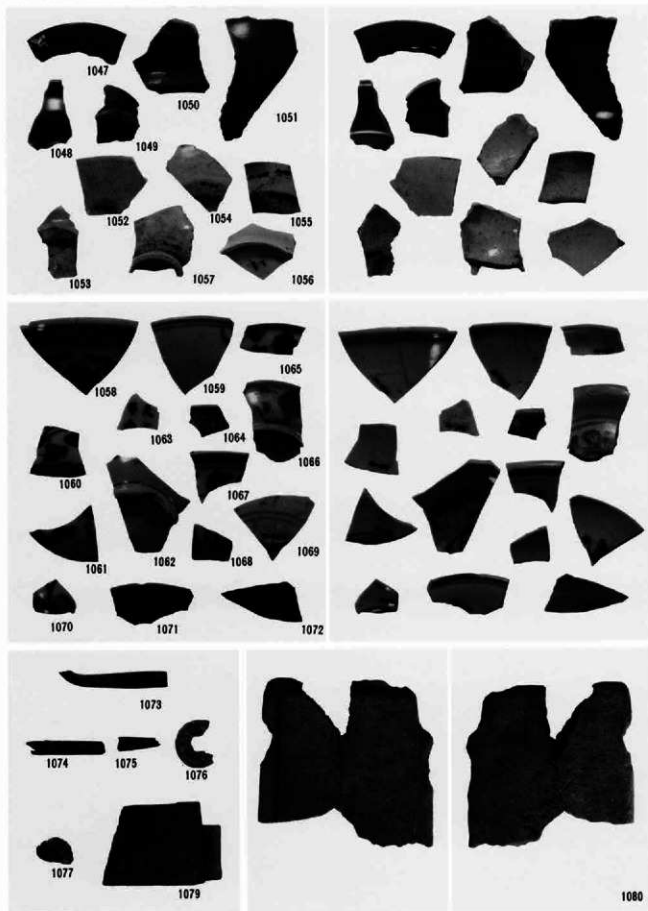
耕土・床土・攪乱層 越前焼罎989～994・999 壺995～998 鉢1000～1004 楕鉢1005～1011



土師質皿1012～1015 土釜1016～1018 鉄輪碗1019 茶入1022 灰輪碗1028 皿1031・1033 卯皿  
1035・1036 瓦質火鉢1039 青磁碗1040～1042 白磁皿1052・1053 杯1057 染付碗1058 皿1063・  
1066 瑠璃輪皿1071 金属キセル1073 銅銭1078 鎌の柄1078 石製品砥石1079



粘土・床土・攪乱層 土師質土釜1016～1018 鉄軸碗1019～1021 茶入1022 壺1023～1025 灰輪碗  
1026～1029 皿1030～1033 卸し皿1034～1036 鉢1037 壺1038 瓦質火鉢1039 青磁碗1040～1046



**耕土・床土・攪乱層** 青磁皿1047~1049 蓋1050 壺1051 白磁皿1052~1056 杯1057 染付碗1058~  
 1062 皿1063~1069 杯1070 瑠璃軸皿1071 褐釉壺1072 金属キセルと羅字1073~1075 銅銭1076  
 不明1077 石製品砥石1079 バンドコ蓋1080





昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月31日 発行

特別史跡

## 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ

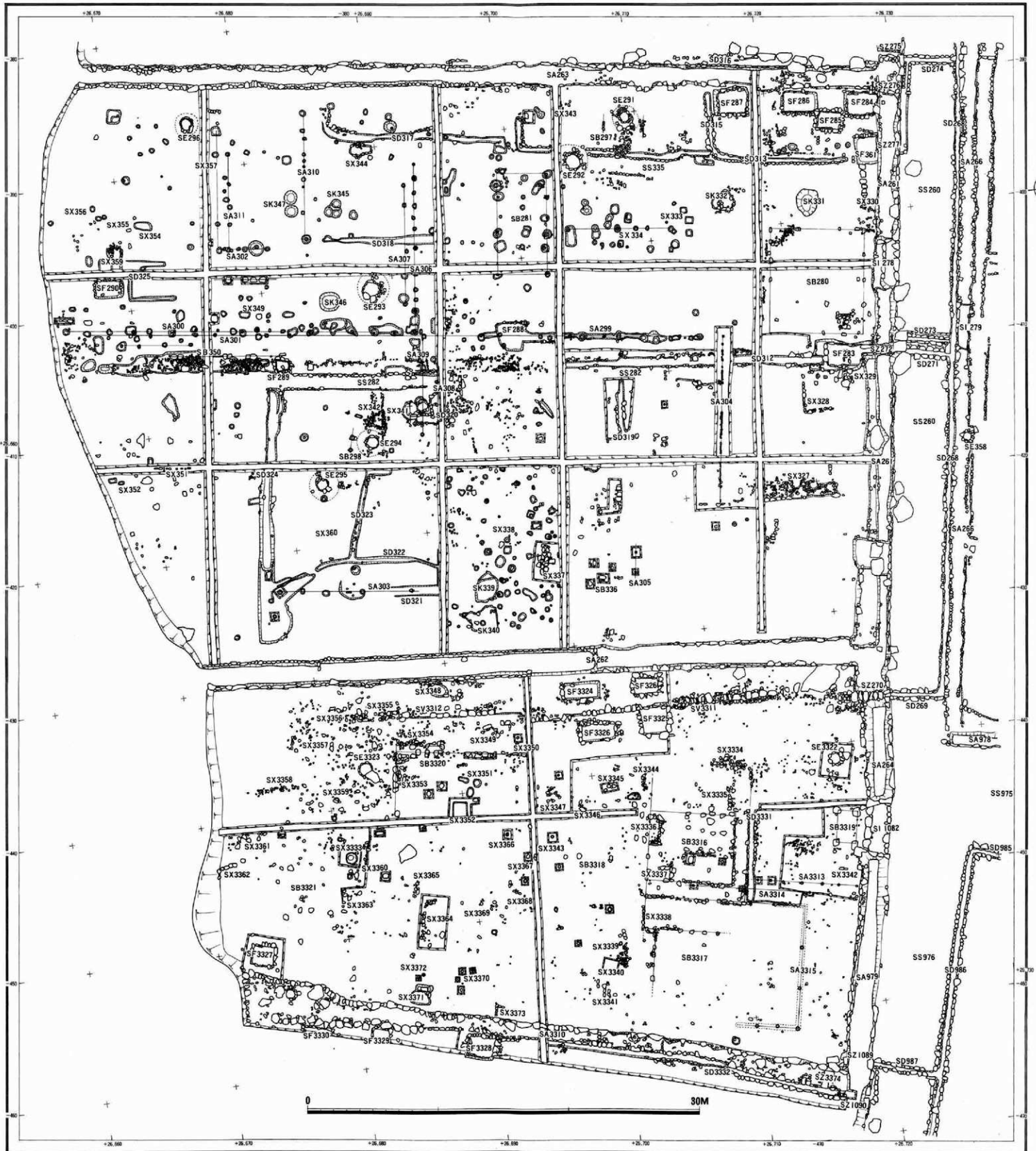
第10・11次、第54次調査

執筆・編集者 福井県立朝倉氏遺跡資料館

発行者 福井県教育委員会  
福井県立朝倉氏遺跡資料館

印刷者 河和田屋印刷株式会社

付図1 第10・11次調査, 第54次調査全測図





# 特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡

